

笹川スポーツ財団 20年史

THE 20 YEAR HISTORY OF SASAKAWA SPORTS FOUNDATION

1991 - 2010



笹川スポーツ財団 20年史

THE 20 YEAR HISTORY OF SASAKAWA SPORTS FOUNDATION

---

1991 - 2010



# 新たなスタートへ



公益財団法人 笹川スポーツ財団  
理事長 小野 清子

1991年(平成3年)3月15日、坪内嘉雄初代会長の下、わが国のあらゆるスポーツの普及、振興、育成を図り、国民の心身の健全な発達と明るく豊かな国民生活の形成に寄与することを目的に、財団法人笹川スポーツ財団は設立されました。

私どもは、設立以来スポーツ団体への助成事業である「スポーツエイド」を基幹事業とし、イベント開催を

通じたスポーツ振興事業や調査研究事業等を積極的に展開してまいりました。スポーツエイドは、20年間にのべ8,400件のスポーツ事業に対し約50億円を助成し、生涯スポーツの育成を担ってまいりました。

また、生涯スポーツの普及につながるイベントとして、スポーツ団体や地方自治体の協力を得て、「チャレンジデー」「スポーツ・フォア・オール国際フェア」「湘南オープンウォータースイミング」等、人々にスポーツの楽しさを知って頂くことを狙いとした一般参加型のイベントを開催してまいりました。イベントの運営を通じて、スポーツ振興の現場を支えるスポーツボランティア育成の重要性を認識し、「東京マラソン」の立ち上げと、大会運営に携わる1万人規模のボランティアの体制構築にも取り組みました。

調査研究事業として、国民のスポーツ参加状況やスポーツに対するニーズを把握するため、全国調査を定期的実施しております。成人を対象とした調査を1992年から、10代の青少年を対象とした調査を2001

年から、4～9歳の子どもの対象とした調査を2009年から実施し、結果を「スポーツライフ・データ」として刊行し、スポーツ関係者に広く周知してまいりました。また、わが国のスポーツ振興に関する各種データを集大成した「スポーツ白書」を刊行しております。

このように、笹川スポーツ財団は、生涯スポーツの振興に資するさまざまな事業を実施し、チャレンジデーやスポーツボランティアの育成、スポーツ白書など、特色ある事業にも取り組んでまいりました。これもひとえに関係各位のご理解とご協力の賜物であり、ここで改めて御礼申し上げます。

2011年、笹川スポーツ財団は設立20年を迎えました。この節目の年に、私どもは公益財団法人に移行し、スポーツ分野のシンクタンクとして新たな歩みをはじめます。

東京オリンピック(1964年)開催の根拠法の性格を持つ「スポーツ振興法」の制定から半世紀が過ぎ、この間スポーツを取り巻く環境は大きく変化してきました。現在、新たな政策の基盤となるスポーツ基本法の制定に向け、超党派による議論が活発化するとともに、スポーツ行政を一元的に担当するスポーツ庁の設置も検討されております。

こうした時代の流れに対応し、笹川スポーツ財団では、研究調査活動の充実を図り、スポーツ振興に不可欠な情報を集積することにより、「する」「みる」「支える」スポーツに関する諸施策の発展のため、政策提言を積極的に行い、更なる元気なわが国の未来に貢献してまいりたいと考えております。今後ともなお一層のご指導、ご鞭撻を賜りますよう、心よりお願い申し上げます。

笹川スポーツ財団設立



笹川スポーツ財団設立記念パーティー  
左から笹川良一名誉会長、海部俊樹首相、アーノルド・シュワルツェネッガー  
米国大統領体力スポーツ審議会(略称PCPFS)会長、坪内嘉雄会長  
(1991年6月10日 於ホテルオークラ)



提携決議書をバックに、PCPFSエグゼクティブ・  
ディレクターのジョン・バターフィールド氏と  
堅い握手を交わす城倉英人常務理事  
(1992年6月12日)

スポーツ・フォー・オールの実現を目指して始動(1)



SSF第1号財団概要パンフレット



クリアリングハウスとの協力提携書(1995年3月7日)



クリアリングハウス アルバート・レーマン氏来日  
(1995年3月7日)

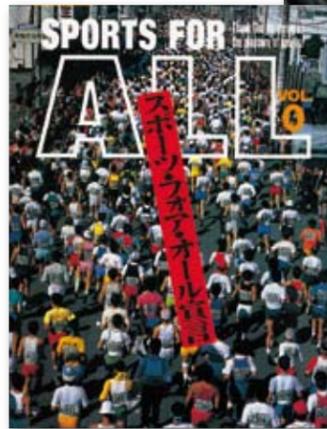
スポーツ・フォー・オールの実現を目指して始動(2)



スポーツ・フォー・オール宣言はがき



雑誌「sports for ALL」創刊号  
(1992年6月発行)



雑誌「sports for ALL」0号  
(1992年1月発行)



「sports for ALL NEWS」Vol.1  
(1993年4月発行)



スポーツエイド(1991年度後期)の助成実績  
ポスター

国際交流



交流した国際機関等との交換バッジの数々



ASFAA理事会(韓国・プサン 2006年)



TAFISAシンポジウム(韓国・プサン 2006年)



TAFISAコンGRESS(チャイニーズタイペイ・台北 2009年)



第11回ASFAAコンGRESS(イスラエル・テルアビブ 2010年)



第5回  
ASFAAコンGRESS  
(オーストラリア・  
ダンデノン  
1998年)



スポーツ・フォー・オール  
リーダーシップコース  
(マレーシア・  
クアラルンプール  
2010年)



TAFISA2008  
ワールド・スポーツ・  
フォー・オールゲームズ  
(韓国・プサン 2008年)



TAFISAコンGRESS  
(マレーシア・ペナン 1997年)

世界スポーツフォトコンテスト(WSPC)



SSF世界スポーツフォトコンテスト開催記念写真展  
"ワン・モーメント・イン・タイム"



世界スポーツフォトコンテスト開催記念写真展へ  
高円宮憲仁親王殿下、同妃殿下ご来場(1994年4月28日)



WSPC'95 ゴールドプライズ「Double Exposure」 Chris Cole



2002  
2004  
SSF World Sports Photo Contest DVD



WSPC'96 ゴールドプライズ  
「Can't Believe It. I'm a Champion!」 Lui Kit Wong

チャレンジデー スポーツ・フォア・オール 国際フェア ワールドゲームズフェア



チャレンジデー2011ポスター



2008チャレンジデー  
事前ワークショップ



2008チャレンジデー  
事前ワークショップ 抽選会



2007チャレンジデー 事後ワークショップ 表彰式



スポーツ・フォア・オール 国際フェア



ワールドゲームズフェア



ワールドゲームズ



フェアのゲストとして招聘した  
5種目の世界チャンピオンと共に

設立10周年感謝の集い 海洋船舶ビル10Fホール 2001年3月30日



設立10周年感謝の集い 小野清子会長挨拶



坪内嘉雄前会長と岡野俊一郎氏



小野会長、日本財団 笹川陽平会長、岸本健氏

SPORT FOR  
**every  
one**



ご来賓をお出迎え



ご来賓の皆様

スポーツ・フォア・オールニュースからウェブサイトへ



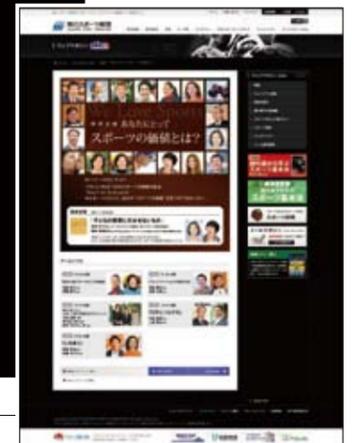
スポーツ・フォア・オールニュース Vol.13(設立5周年号)  
「スポーツ文化の定着を目指して」



スポーツ・フォア・オールニュース Vol.40(設立10周年号)  
「スポーツ・フォア・オールの10年を振り返る」



SSFウェブサイト(2011年4月)



湘南オープンウォータースイミング 東京シティロードレース

東京マラソン ボランティア



湘南オープンウォータースイミング2006ポスター



25kmスタート直後(2008年8月)



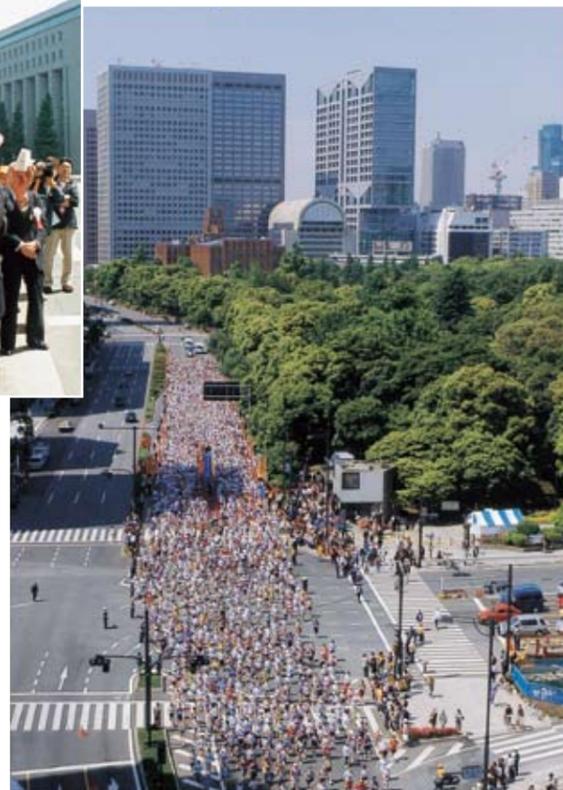
カヌーに見守られ、ゴールを目指す(2005年8月)



日比谷公園をスタート



表彰式



東京シティロードレース(2002年5月19日)



2008東京マラソンエキスポ SSF出展ブース



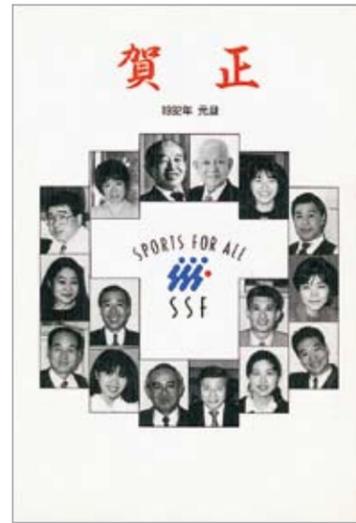
給水ボランティア



ゴールでのメダル掛けボランティア



役員 思い出のひとこま



設立当時のメンバー総出の初めての年賀状(1992年)



1991年6月 企画部、業務部全スタッフ (旧事務所にて)



1991年秋 現事務所へ移転直後(坪内会長を囲んで)



1992年初秋 関連団体の集いにて



2000年頃 K2展覧会(長友啓典氏を囲んで)

役員 思い出のひとこま



2001年9月 職員送別会(小野会長を囲んで)



2010年7月 職員送別会



2011年3月31日

1988-1990 昭和63年度～平成2年度	1991 平成3年度	1992 平成4年度	1993 平成5年度	1994 平成6年度	1995 平成7年度	1996 平成8年度	1997 平成9年度	1998 平成10年度	1999 平成11年度
<ul style="list-style-type: none"> <li>●1990年 日本スポーツ機構設立 (SSFの前身)</li> <li>●1991年3月15日 SSF設立 初代会長に坪内嘉雄就任</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>●6月10日 笹川スポーツ財団設立記念パーティー(於て東京・ホテルオークラ)</li> <li>●6月 第12回国際トリム・フィットネス生涯スポーツ会議出席(フランス・ポルドー)</li> <li>●9月 スポーツエイズ募集開始(以降平成22年度まで連続実施)</li> <li>●5月 第5回国際スポーツ・フォア・オール・フェスティバルへの参加(イギリス・マインヘッド)</li> <li>●ニューススポーツ国際フェア開催(東京都立川市)</li> <li>●12月 日本ワールドゲームズ協会(JWGA)設立(以降SSF内にJWGA事務局を設置)</li> <li>●1992年1月 情報誌「sports for ALL」Vol.0発行</li> <li>●全調査スポーツ1 「スポーツライフに関する調査報告書」</li> <li>●全調査スポーツ2 「スポーツ・レクリエーション団体実情調査報告書」</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>●4月 TAFISA-JAPAN(日本トリム・フィットネス生涯スポーツ協議会)設立</li> <li>●5月 第2回ASFAA コンgressおよび総会出席(オーストラリア・バララット)</li> <li>●坪内会長、ASFAA会長に就任 事務局をSSF内に設置(2000年3月まで)</li> <li>●6月 第1回世界伝統スポーツ・ゲームズフェスティバルに流鍋馬、なぎなた、弓道、蹴鞠を派遣</li> <li>●PCPFS(米大統領体力スポーツ審議会)と業務提携</li> <li>●情報誌「sports for ALL」Vol.1 発行</li> <li>●9月 日本・サハリン親善少年サッカー交流(日本船舶振興会と共催)</li> <li>●10月 スポーツ・フォア・オール国際フェア'92開催(東京都立川市、大阪市)</li> <li>●11月 雲仙普賢岳チャリティマラソン開催(日本船舶振興会、B&amp;G財団と共催)</li> <li>●SSF海外レポート No.1～6 英国編</li> <li>●ニュージーランド・オーストラリアのマリンスポーツ報告書 「陽は南から昇る」</li> <li>●スポーツライフデータ1993 ースポーツライフに関する調査報告書ー</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>●5月 チャレンジデー初開催(島根県加茂町が参加)(以降平成22年度まで連続実施中)</li> <li>●7月～8月 日本・サハリン親善少年少女サッカー交流</li> <li>●10月 スポーツ・フォア・オール国際フェア'93開催(東京都立川市、兵庫県明石市)</li> <li>●11月 第13回トリム・フィットネス生涯スポーツ会議開催(千葉県・幕張メッセ) TAFISAとTAFISA-JAPANが主催</li> <li>●1994年2月 ASFAA理事会出席(韓国・プサン)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>●4月 SSF世界スポーツフォトコンテスト開催記念写真展「ワン・モーメント・イン・タイム」肉体の瞬間」開催(東京・渋谷)</li> <li>●7月18日 笹川良一名誉会長逝去</li> <li>●5月 IASI'95会議出席(スペイン・マラガ)</li> <li>●6月 ASFAA理事会、総会出席(イスラエル・ネタニア)</li> <li>●7月 サマースポーツスクール in KAMO 実施(島根県加茂町)【地震被災地の子ども達にスポーツを】</li> <li>●8月 世界スポーツフォトコンテスト'95 表彰式開催(東京・恵比寿)</li> <li>●8月～10月 世界スポーツフォトコンテスト'95チャリティ写真展「ワン・モーメント・イン・タイム」開催(東京都、大阪市)</li> <li>●10月 スポーツ・フォア・オール国際フェア'94開催(東京都立川市、江東区)</li> <li>●11月 第3回ASFAAコンgressおよび総会、理事会出席(マレーシア・ランカウイ)、事務局運営</li> <li>●1995年3月 ヨーロッパのスポーツ情報機関クリアリングハウス(ベルギー)との協力提携</li> <li>●スポーツライフデータ1994 ースポーツライフに関する調査報告書ー</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>●7月18日 笹川良一名誉会長逝去</li> <li>●5月 IASI'95会議出席(スペイン・マラガ)</li> <li>●6月 ASFAA理事会、総会出席(イスラエル・ネタニア)</li> <li>●7月 サマースポーツスクール in KAMO 実施(島根県加茂町)【地震被災地の子ども達にスポーツを】</li> <li>●8月 世界スポーツフォトコンテスト'95 表彰式開催(東京・恵比寿)</li> <li>●8月～10月 世界スポーツフォトコンテスト'95チャリティ写真展「ワン・モーメント・イン・タイム」開催(東京都、大阪市)</li> <li>●10月 スポーツ・フォア・オール国際フェア'95開催(千葉県浦安市、兵庫県西宮市)</li> <li>●11月 地震被災地の子ども達にスポーツ用具を贈ろうキャンペーンを実施</li> <li>●世界スポーツフォトコンテスト1995写真集「One Moment in Time」</li> <li>●SSF海外レポート No.7～9 ドイツ編</li> <li>●スポーツライフデータ1994 ースポーツライフに関する調査報告書ー</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>●4月 SSFスポーツ・フォア・オールネットワーク発足</li> <li>●ASFAA理事会出席(韓国・ソウル)事務局運営</li> <li>●7月 世界スポーツフォトコンテスト'96 表彰式開催(東京・恵比寿)</li> <li>●7月～3月 世界スポーツフォトコンテスト'96写真展「ワン・モーメント・イン・タイム」開催(東京、横浜、福岡、大阪、北海道)</li> <li>●8月 SSFスポーツ・フォア・オールプログラム「40歳からの快適スポーツ」完成</li> <li>●SSFホームページ開設</li> <li>●12月 第1回神宮外苑ロードレース開催</li> <li>●第4回ASFAAコンgress(兼 世界伝統スポーツサイエンティフィックシンポジウム)および理事会、総会出席(タイ・バンコク)、事務局運営</li> <li>●第2回世界伝統スポーツ・ゲームズフェスティバルに「和太鼓」と「独楽」を派遣(TAFISA-JAPANとして)</li> <li>●スポーツ白書 ー2001年のスポーツ・フォア・オールに向けてー</li> <li>●スポーツライフデータ1996 ースポーツライフに関する調査報告書ー</li> <li>●世界スポーツフォトコンテスト1996写真集「One Moment in Time」</li> <li>●SSF海外レポートNo.10 イタリアCONIF'2000年に向けてのスポーツ提言(イタリア・オリンピック委員会)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>●4月 2代目会長として小野清子就任</li> <li>●6月 IASIサイエンティフィックコンgress出席(フランス・パリ)</li> <li>●7月 SSFスポーツ・フォア・オールプログラム「20歳からのチャレンジスポーツ」完成</li> <li>●10月 ワールドゲームズフェア'97開催(秋田県)</li> <li>●11月 スポーツ・フォア・オール国際フェア'97開催(東京・神宮外苑)</li> <li>●第15回TAFISAコンgress出席「スポーツ・フォア・オールとクオリティオブライフ」(マレーシア・ペナン)</li> <li>●ASFAA理事会、総会出席(マレーシア・ペナン)</li> <li>●12月 第2回神宮外苑ロードレース開催</li> <li>●SSF海外レポートNo.11～12 英国編</li> <li>●ASFAA Booklet 1997</li> <li>●ASFAA Booklet 1997</li> <li>●ASFAA Booklet 1997</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>●8月 世界スポーツフォトコンテスト'98 表彰式開催(横浜)</li> <li>●8月～3月 世界スポーツフォトコンテスト'98写真展「ワン・モーメント・イン・タイム」開催(横浜、大阪、福岡、東京、兵庫、北海道)</li> <li>●10月 ワールドゲームズフェア'98開催(秋田県)</li> <li>●11月 スポーツ・フォア・オール国際フェア'98開催(東京・神宮外苑)</li> <li>●第7回IOC世界スポーツ・フォア・オールコンgress出席(スペイン・バルセロナ)</li> <li>●12月 ASFAA理事会、総会出席、運営(オーストラリア・ダネデン)</li> <li>●第5回ASFAAコンgress出席およびTAFISAゲームズフェスティバル参加(オーストラリア・ダネデン)</li> <li>●第3回神宮外苑ロードレース開催</li> <li>●1999年3月 第11回IASIサイエンティフィックコンgress出席(アメリカ・ロサンゼルス)</li> <li>●文部省委託事業 「諸国におけるスポーツ振興政策についての調査」</li> <li>●世界スポーツフォトコンテスト'98写真集「One Moment in Time」</li> <li>●SSF海外レポートNo.13 イタリアCONIF「イタリア・スポーツ白書」(イタリア・オリンピック委員会)</li> <li>●スポーツライフデータ1998 ースポーツライフに関する調査報告書ー</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>●8月 ワールドゲームズフェア'99開催(秋田県)</li> <li>●11月 ASFAA理事会・総会出席および運営(キプロス・リマンソル)</li> <li>●第16回TAFISAコンgress出席(キプロス・リマンソル)</li> <li>●スポーツ・フォア・オール国際フェア'99開催(東京・神宮外苑)</li> <li>●12月 第4回神宮外苑ロードレースの開催</li> <li>●「SSFが考えるスポーツクラブ」</li> <li>●SSF海外レポート No.14 USOC 米国オリンピック委員会 '97-'98ファクトブック</li> </ul>



<ul style="list-style-type: none"> <li>●1988年 文部省体育局スポーツ課が生涯スポーツ課と競技スポーツ課に改組</li> <li>●第1回全国スポーツ・レクリエーション祭開催(山梨県)</li> <li>●1989年 第3回ワールドゲームズ カールスルーエ大会(ドイツ)</li> <li>●JOC(日本オリンピック委員会)が日本体育協会から独立</li> <li>●1990年 生涯スポーツコンベンション開始</li> <li>●スポーツ振興基金設立</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>●国際トリム・フィットネス生涯スポーツ協議会(TAFISA)設立</li> <li>●アジアニア・スポーツ・フォア・オール協会(ASFAA)設立</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>●第1回世界伝統スポーツ・ゲームズフェスティバル(ドイツ・ボン)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>●リーグ開幕</li> <li>●第1回国際チャレンジデー</li> <li>●第4回ワールドゲームズ ハーグ大会(オランダ)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>●1995年</li> <li>●1月17日 阪神・淡路大震災</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>●総合型地域スポーツクラブ育成モデル事業開始</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>●第2回世界伝統スポーツ・ゲームズフェスティバル(タイ・バンコク)</li> <li>●O-157猛威を振るい市民スポーツイベント中止相次ぐ</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>●第5回ワールドゲームズ ラハティ大会(フィンランド)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>●長野冬季オリンピック 長野冬季パラリンピック</li> <li>●特定非営利活動促進法施行</li> <li>●スポーツ振興投票法成立</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>●国際スポーツ団体総連合(GAISF)総会(大阪)</li> </ul>
--	--	--	---	---	--	--	---	--	---

# 2000-2011

2000 平成12年度	2001 平成13年度	2002 平成14年度	2003 平成15年度	2004 平成16年度	2005 平成17年度	2006 平成18年度	2007 平成19年度	2008 平成20年度	2009 平成21年度	2010 平成22年度	2011 平成23年度
<ul style="list-style-type: none"> <li>●5月 第8回IOC世界スポーツ・フォー・オール コンgress出席(カナダ・ケベック)</li> <li>●6月 第3回世界伝統スポーツ・ゲームズフェスティバル参加(ドイツ・ハノーバー)</li> <li>●7月 第6回ASFAAコンgressおよび理事会、総会出席(韓国・プサン)</li> <li>ワールドゲームズフェア2000開催(秋田県)</li> <li>●11月 スポーツ・フォア・オール国際フェア2000開催(東京・神宮外苑)</li> <li>●12月 第5回神宮外苑ロードレースの開催</li> <li>●2001年1月 世界スポーツフォトコンテスト表彰式開催(東京・恵比寿)</li> <li>●3月 国際スポーツ・フォア・オールシンポジウム参加、発表(韓国・プサン)</li> <li>設立10周年感謝の集い開催(東京・虎ノ門)</li> <li>●スポーツライフデータ2000 -スポーツライフに関する調査報告書-</li> <li>●スポーツ白書2010~スポーツ・フォー・オールからスポーツ・フォー・エブリワンへ~</li> <li>●英文ブックレット「Sport for All in Japan」</li> <li>●ASFAA2000(Sport for All Structures in Asian and Oceanian Countries)</li> <li>●世界スポーツフォトコンテスト2001写真集「One Moment in Time」</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>●4月 スポーツエイド スポーツプログラム事業の助成開始</li> <li>第11回IASIコンgress・総会出席(スイス・ローザンヌ)</li> <li>●8月 ワールドゲームズフェア2001開催(秋田県)</li> <li>●10月 第17回TAFISAコンgress・総会出席(南アフリカ・ケープタウン、ヨハネスブルグ)</li> <li>●11月 ASFAA理事会・総会出席(南アフリカ・ケープタウン、ヨハネスブルグ)</li> <li>●11月 スポーツ・フォア・オール国際フェア2001開催(東京・神宮外苑)</li> <li>●2002年1月 総合スポーツサイト「スポーツ・フォー・エブリワン・ネットワーク(sfen)」開設</li> <li>●3月 IASI年次会議・理事会出席(スペイン・バルセロナ)</li> <li>●TAFISA World 2001 -The Global almanac on Sport for All-</li> <li>●英文ブックレット「Sport for All in Japan」(SECOND EDITION)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>●5月 東京シティロードレース2002開催(東京・日比谷公園~国立競技場)</li> <li>●9月 第7回ASFAAコンgressおよび理事会、総会出席(中国・北京)</li> <li>●10月 第3回スポーツNPOサミット東京の開催「実りある連携に向けて」</li> <li>●10月 第9回IOC世界スポーツ・フォー・オール コンgress出席(オランダ・アーネム)</li> <li>●11月 第2回スポーツNPOサミット東京の開催「スポーツNPOとスポーツ振興」</li> <li>スポーツ・フォア・オール国際フェア2002開催(東京・神宮外苑)</li> <li>●12月 世界スポーツフォトコンテスト2002表彰式開催(東京・恵比寿)</li> <li>●12月~2003年3月 世界スポーツフォトコンテスト2002展覧会(東京、北海道、新潟、兵庫)</li> <li>●2003年3月 IASI年次会議・理事会出席(キューバ・ハバナ)</li> <li>●「青少年のスポーツライフ・データ2002」 -10代のスポーツライフに関する調査報告書-</li> <li>●「スポーツライフ・データ2002」 -スポーツライフに関する調査報告書-</li> <li>●世界スポーツフォトコンテスト2002DVD写真集「One Moment in Time」</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>●9月 第18回TAFISAコンgress出席(ドイツ・ミュンヘン)</li> <li>ASFAA理事会出席(ドイツ・ミュンヘン)</li> <li>●10月 第3回スポーツNPOサミット東京の開催「実りある連携に向けて」</li> <li>国際スポーツ・ボランティア調査(106ヶ国、245機関)の実施</li> <li>●4月 IASI年次会議・理事会出席(ポルトガル・リスボン)</li> <li>●8月 第1回湘南オープンウォータースイミングの開催(神奈川県・湘南海岸)</li> <li>●9月 第8回ASFAAコンgressおよび理事会出席(チャイニーズタイペイ・台北)</li> <li>●10月 世界スポーツフォトコンテスト2004表彰式開催(東京・恵比寿)</li> <li>第4回スポーツNPOサミット東京の開催「スポーツNPOの価値と使命」</li> <li>●11月 第10回IOC世界スポーツ・フォー・オール コンgress出席(イタリア・ローマ)</li> <li>●スポーツライフデータ2004 -スポーツライフに関する調査報告書-</li> <li>●文科省委嘱事業「諸外国におけるスポーツ振興政策についての調査研究」</li> <li>●「クラブハウス・ガイドブック~Community of Sports Life」</li> <li>●「青少年のスポーツライフ・データ2002」 -10代のスポーツライフに関する調査報告書-</li> <li>●世界スポーツフォトコンテスト2004 DVD写真集「One Moment in Time」</li> <li>●「青少年のスポーツライフ・データ2006」 -10代のスポーツライフに関する調査報告書-</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>●5月 IASI年次会議・理事会およびスポーツ情報国際会議出席(中国・北京)</li> <li>●6月~3月 スポーツボランティア・リーダー養成研修会(東京)4期13回実施</li> <li>●8月 第2回湘南オープンウォータースイミングの開催(神奈川県・湘南海岸)</li> <li>●9月 第19回TAFISAコンgressおよびASFAA理事会・総会出席(ポーランド・ワルシャワ)</li> <li>●11月 第5回スポーツNPOサミット東京の開催「スポーツNPOとまちづくり」</li> <li>●2006年3月 ASFAA理事会およびTAFISAシンポジウム出席(韓国・プサン)</li> <li>SSFスポーツセミナー2006の開催~スポーツ白書最新版刊行記念~「日本のスポーツを考える」(東京)</li> <li>SSFスポーツ・フォア・オール・ネットワーク組織解消</li> <li>●スポーツ白書~スポーツの新たな価値の発見~</li> <li>●世界スポーツフォトコンテスト2004 DVD写真集「One Moment in Time」</li> <li>●「青少年のスポーツライフ・データ2006」 -10代のスポーツライフに関する調査報告書-</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>●4月 IASI年次会議・理事会およびスポーツ情報国際会議出席(ブラジル・ブラジリア)</li> <li>●6月~11月 スポーツボランティア・リーダー養成研修会(東京)2期4回実施</li> <li>●8月 第3回湘南オープンウォータースイミングの開催(神奈川県・湘南海岸)</li> <li>●10月 第11回IOC世界スポーツ・フォー・オール コンgress出席(キューバ・ハバナ)</li> <li>●11月 第9回ASFAAコンgressおよびASFAA理事会・総会出席(フィリピン・マニラ)</li> <li>●2007年2月 東京マラソン2007開催(運営ボランティアの体制構築およびコースの運営・管理)</li> <li>●スポーツライフデータ2006 -スポーツライフに関する調査報告書-</li> <li>●スポーツ白書英語版「Sport White Paper in Japan Digest」</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>●5月 IASI年次会議・理事会出席(東京・国立スポーツ科学センター)</li> <li>●8月 第4回湘南オープンウォータースイミングの開催(神奈川県・湘南海岸)</li> <li>●9月 第10回ASFAAコンgressおよび理事会・総会出席(韓国・プサン)</li> <li>●11月 第12回IOC世界スポーツ・フォー・オール コンgress出席(マレーシア・ゲンティン・ハイランド)</li> <li>●2009年3月 第13回IASIコンgressおよび理事会・年次会議出席(オーストラリア・キャンベラ)</li> <li>ASFAA理事会出席(中国・マカオ)</li> <li>東京マラソン2009開催(運営ボランティアの体制構築およびコースの運営・管理)</li> <li>●スポーツライフデータ2008 -スポーツライフに関する調査報告書-</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>●8月 第5回湘南オープンウォータースイミングの開催(神奈川県・湘南海岸)</li> <li>●9月 第6回IOCフォーラム出席(韓国・プサン)</li> <li>●9月 第10回ASFAAコンgressおよび理事会・総会出席(韓国・プサン)</li> <li>●11月 第12回IOC世界スポーツ・フォー・オール コンgress出席(マレーシア・ゲンティン・ハイランド)</li> <li>●2009年3月 第13回IASIコンgressおよび理事会・年次会議出席(オーストラリア・キャンベラ)</li> <li>ASFAA理事会出席(中国・マカオ)</li> <li>東京マラソン2009開催(運営ボランティアの体制構築およびコースの運営・管理)</li> <li>●スポーツライフデータ2010 -10代のスポーツライフに関する調査報告書-</li> <li>●「諸外国から学ぶスポーツ基本法」</li> <li>●スポーツ白書 ~スポーツが目指すべき未来~</li> <li>●スポーツライフデータ2010 -スポーツライフに関する調査報告書-</li> <li>●TAFISA Active World 2011 -The Global Almanac on Sport for All-</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>●9月 第21回TAFISAコンgress出席(チャイニーズタイペイ・台北)</li> <li>●10月 TAFISA理事会出席(韓国・ソウル)</li> <li>●10月 SSFホームページリニューアルオープン(SSFホームページとsfenホームページが合体一本化)</li> <li>●2010年3月 第11回ASFAAコンgress出席(イスラエル・テルアビブ)</li> <li>全国SSFスポーツボランティア・リーダーサミット2010の開催(東京)</li> <li>●子どものスポーツライフデータ2010 -4~9歳のスポーツライフに関する調査報告書-</li> <li>●青少年のスポーツライフデータ2010 -10代のスポーツライフに関する調査報告書-</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>●5月 TAFISA認定スポーツ・フォー・オール・リーダーシップコースへTAFISA-JAPANを代表してSSF職員1名派遣(マレーシア・クアラルンプール)</li> <li>●6月 第13回IOC世界スポーツ・フォー・オール コンgress出席(フィンランド・ユウヴァスキュラ)</li> <li>●8月 TAFISA理事会出席(タンザニア・ダルエスサラーム)</li> <li>●11月 ASFAA・TAFISA理事会出席(中国・マカオ)</li> <li>sfen特別座談会「日本のスポーツ政策を考える」開催(東京)</li> <li>●2011年2月 笹川スポーツ研究助成制度創設。募集開始</li> <li>●「諸外国から学ぶスポーツ基本法」</li> <li>●スポーツ白書 ~スポーツが目指すべき未来~</li> <li>●スポーツライフデータ2010 -スポーツライフに関する調査報告書-</li> <li>●TAFISA Active World 2011 -The Global Almanac on Sport for All-</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>●4月1日 公益財団法人へ移行</li> <li>●4月 スポーツシンクタンクとして新たなスタート</li> <li>●6月 スポーツ振興に関する政策提言</li> </ul>	



<ul style="list-style-type: none"> <li>●健康日本21発表(厚生省)</li> <li>●スポーツ振興基本計画発表(文部省)</li> <li>●TAFISA、FISpT(国際スポーツ・フォー・オール連盟)両者間の統合へ向けた「バーレーン宣言」採択</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>●文部省と科学技術庁が統合して文部科学省となる</li> <li>●サッカーくじ販売開始</li> <li>●第6回ワールドゲームズ秋田大会(秋田)</li> <li>●第13回世界移植者スポーツ大会(神戸)</li> <li>●第1回日本スポーツマスターズ(宮崎県)</li> <li>●国立スポーツ科学センター(JISS)オープン</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>●2002 FIFAワールドカップ(日本・韓国)</li> <li>●指定管理者制度導入</li> <li>●日本スポーツ振興センター設立</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>●福祉医療機構の障害者スポーツ支援事業開始</li> <li>●子どもゆめ基金助成開始</li> <li>●第7回ワールドゲームズ デュイスブルク大会(ドイツ)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>●第4回世界女性スポーツ会議(熊本)</li> <li>●スポーツ振興基本計画(見直し)発表(文科省)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>●第8回ワールドゲームズ高雄大会(チャイニーズタイペイ)</li> <li>●2011年3月11日 東日本大震災</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>●スポーツ立国戦略発表(文科省)</li> <li>●2011年3月11日 東日本大震災</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>●文部科学省スポーツ・青少年局生涯スポーツ課がスポーツ振興課へ名称変更</li> </ul>
--	---	---	--	---	--	--	---

## CONTENTS

### 座談会

SSFの20年 ..... 22

笹川スポーツ財団が日本のスポーツ界にどう貢献できたのか。  
そして今後何をなすべきか。

出席者： 赤木 恭平氏 財団法人 全日本ボウリング協会 名誉会長  
玉利 齊氏 財団法人 日本健康スポーツ連盟 理事長  
三ツ谷 洋子氏 株式会社 スポーツ21エンタープライズ 代表取締役  
法政大学スポーツ健康学部 教授  
渡邊 一利 笹川スポーツ財団 常務理事  
司 会： 坂井 宣夫 笹川スポーツ財団

### インタビュー

スポーツを通して人間をもっと好きになるように。 ..... 26

そういう活動をいっしょにしていきたいですね。

有森 裕子氏

### 20年の歩み

第1章／スポーツ・フォア・オールの夜明け 1991-2000 ..... 28

第2章／スポーツ・フォー・オールからスポーツ・フォー・エブリワンへ 2001-2010 ..... 34

#### 寄稿

笹川スポーツ財団設立20周年を祝って ..... 40

岡野 俊一郎氏 国際オリンピック委員会 委員

笹川スポーツ財団設立20周年に思う ..... 41

本間 政雄氏 立命館アジア太平洋大学副学長(元文部省生涯スポーツ課長)

祝辞 Congratulatory Message for The Sasakawa Sports Foundation ..... 42

ウォルフガング・バウマン氏 Wolfgang Baumann TAFISA事務総長 TAFISA Secretary General

笹川スポーツ財団 初代会長として ..... 44

坪内 嘉雄氏 笹川スポーツ財団 前会長

新しく生まれ変わる笹川スポーツ財団に期待しています ..... 45

横山 喬氏 笹川スポーツ財団 前常務理事

「得魚忘筌」 ..... 46

藤本 和延氏 笹川スポーツ財団 前常務理事

### 事業の歩み

SSFスポーツエイド ..... 50

スポーツライフ調査 ..... 54

スポーツ・フォア・オール 国際フェア ..... 58

チャレンジデー ..... 62

SSF世界スポーツフォトコンテスト ..... 66

国際スポーツ機関との連携 ..... 70

スポーツ白書 ..... 74

財団広報 ..... 76

湘南オープンウォータースイミング ..... 78

東京マラソン 神宮外苑ロードレース～東京シティロードレース ..... 80

スポーツ団体のネットワーク化 ..... 84

ワールドゲームズ ..... 86

雲仙普賢岳チャリティマラソン ..... 88

日本・サハリン親善少年サッカー交流 ..... 89

### これからのSSF

進むべき道—「未来に夢を描き、行動する」シンクタンクへ。 ..... 92

渡邊 一利 笹川スポーツ財団 常務理事

笹川スポーツ財団設立20周年を祝って ..... 94

武藤 泰明氏 早稲田大学スポーツ科学学術院 教授(SSF研究調査委員長)

これからのSSFを創る ..... 95

職員のひとこと

### 資料

財団概要 ..... 98

歴代役員・評議員 ..... 100

主な刊行物 ..... 102

あとがき ..... 103



座談会 「SSFの20年」



笹川スポーツ財団が日本のスポーツ界にどう貢献できたのか。そして今後何をなすべきか。

笹川スポーツ財団設立当時のスポーツ界の状況や、設立の経緯を深く知り、その後も発展にご尽力いただいた方々にお集まり願ひ、当時のエピソードや今後についてお話しいただきました。

■期日：2011年2月15日(火)  
■会場：日本財団ビル2階 第8会議室

出席者： 赤木 恭平氏  
財団法人 全日本ボウリング協会 名誉会長  
玉利 齊氏  
財団法人 日本健康スポーツ連盟 理事長  
三ッ谷 洋子氏  
株式会社 スポーツ21エンタープライズ 代表取締役  
法政大学スポーツ健康学部 教授  
渡邊 一利 笹川スポーツ財団 常務理事  
司 会： 坂井 宣夫 笹川スポーツ財団

坂井 お忙しいところご出席いただきありがとうございます。おかげ様で笹川スポーツ財団(以下SSF)は今年で設立20周年を迎えます。今日は、設立当初からご尽力いただいた皆様からその当時のことや、今後どのようにしていけばよいか、などのお話をいただければと考えております。まずは設立の経緯についてお話しさせていただきたいと思います。

当時のわが国のスポーツを取り巻く環境についてSSFが誕生するまで

三ッ谷 1988年か89年のことですが、「ある組織に新しいスポーツ団体の設立を提案しようと思うので相談にのって欲しい」という話がありました。ある組織というのは、日本船舶振興会(現日本財団)で、そこに出入りしている広告代理店から相談を持ちかけられたのです。

私が常々感じていたのは、スポーツ振興といえば日本体育協会による競技スポーツの振興が主で、市民スポーツの振興も含めてもっと大きな意味でスポーツに目配りが必要ではないかということでした。さらに、スポーツの推進を管轄する部署が13もの省庁にまたがっていたので、スポーツというくくりの新しい考え方で推進する仕組みが必要なのではないか感じていました。  
赤木 ソウルオリンピックの次の年、平成元年ですかね。いま三ッ谷さんからお話があったように、1989年に日本オリンピック委員会(JOC)が日本体育協会から分離しました。ですから、日本のスポーツを大きく改革していこうと、ちょうどそういう時期でしたね。

玉利 その通りです。時代の流れですね。そのころ私は新宿で財団法人スポーツ会館を運営していました。社会人を対象にしたスポーツ推進の団体がなくて、誰もが気軽に運動できる場を作らなければならない、という狙いで、たまたま私が専務理事でした。

1964年の東京オリンピックが成功して、日本の高度成長がはじまる。スポーツ界の状況も高度成長と同時にだいぶ変化していたんですね。つまり、社会体育、生涯スポーツが必要だという急務が出てきました。スイミングクラブがどんどんできて、そのような時代背景の中でスポーツ会館ができたのです。JOCや日本体育協会はオリンピック競技だけで、新しいスポーツがどんどん育ってきたのに、どこの団体にも加入が認められなかった時代でした。

その後、知り合いからオリンピックの種目ではないが、世界的に発展しているスポーツ種目の大会を実施しようという大きな計画が出てきており、ソウルで会議があるから一緒に行こうと誘われました。その時、これはオリンピックに入っていない競技の大会が始まるな、と感じました。参加することになるだろうと。それから4年に1回、ワールドゲームズ大会をオリンピックの次の年に行うようになりましたね。

赤木 SSFが発足したのが1991年。その時は海部内閣で、前の年の90年にスポーツ基金、現在のスポーツ振興基金が出来ました。スポーツにはお金が必要であるということ、このためにSSFのような財団ができるということ、これはスポーツ界にとっては大きな支えだと

SSFの発足があの時代のスポーツ界を大きく支えましたね。



思いました。そういう意味でもこのころから大きくスポーツが変わっていきました。その変化の中で、新しい国際大会ワールドゲームズも行われたり、人々のスポーツに対する親しみが深まり、その流れで、その後の長野オリンピックの招致にもつながったと思います。

玉利 スポーツが一部の人のだけのものだったのが、大衆化という大きな流れと並行してきたということですね。  
赤木 新しいスポーツに対する考え方が変わってきて、いろいろなことが同時に動いていた時代ですね。そこでSSFが出来ていったということですね。

三ッ谷 1991年、SSFが設立された年の11月にJリーグの組織(社団法人日本プロサッカーリーグ)ができました。その2年後の93年にJリーグが開幕しました。パブルがはじけた頃ですが産業界もまだ余力がありました。企業がスポーツや文化をサポートする、つまりお金を出す“メセナ”という動きが活発なころです。経済的に余裕のあるいい時期でしたね。

SSFの設立がもたらしたスポーツ界の変化についてSSFに影響を与えた方々

坂井 SSFが設立されたことで日本のスポーツ環境が変わったのか変わらなかったのか、どのように貢献できたのか、についてはいかがでしょうか。

赤木 お話ししてきましたように、スポーツ界が変わってきた時代でした。でもいくら豊かな時代でもスポーツにはどうしてもお金がかかる。それを国や企業が理解してくれなければ、新しいスポーツも生まれてこない。このころは、国民のニーズに応えるかのように、

500種類くらいのスポーツがありました。けれど、それをまとめる所がない。そこで、地方の小さなスポーツのイベントを支えたのは、SSFのスポーツエイドだけでした。これは今日の国民スポーツに大きく貢献していると思います。誇りを持っていい実績です。



生涯スポーツを促進するためにSSFの存在は意義があります。

**玉利** スポーツといえば競技スポーツという時代から、スポーツの概念が広がった新しい時代に対応するために文部省(当時)も、スポーツ課だけだったものを「生涯スポーツ課」「競技スポーツ課」に分けました。

この生涯スポーツ課が、新しい社会状況に対応していたわけです。でも、それを促進するために支援する組織というものはありませんでした。そこにSSFの存在意義、設立した大きな意味があったと思います。かけ声だけでなく、それを実際に育て、施設も指導者もイベントにも協力する団体はなかったのですから。

**三ッ谷** 地域では、みんなでお金を出し合っても活動していくという小さなスポーツ組織がたくさんあります。そういう細かいところに一つ一つサポートしていくことは、日本全体からすれば大変大きな効果があったのではないかと思います。

**玉利** その発想が大事ですね。まだどのようなものに成長するか分からない小さな団体に対してもサポートしたこと、小さくても積極的に育成しているこうという姿勢には素

晴らしく大きな意味があったと思います。

**赤木** 国際的な情報がSSFに集まってきたこと、さらにデータをとっていることも大きな功績です。

**坂井** 日本のスポーツ・フォー・オールは、欧米の先進国に比べて20~30年遅れていると言われていました。いろいろな国の情報を貪欲に集めたというのは確かにありました。

本日で出席の皆様はもちろんですが、他にもSSFに影響を与えた方はいらっしゃいましたでしょうか。

**三ッ谷** 池田勝先生は、忘れてはいけないと思います。先生のネットワークで海外へ視察にも行きました。

**玉利** 海外のスポーツ政策や生涯スポーツ事情を学習するという点で貢献されたのが池田先生です。私たちは、どちらかというと、実際の動きの中で見てきましたが、それを学問的に整理したのは池田先生ですね。

**三ッ谷** そうですね。池田先生が紹介された国際的イベントで、地域のスポーツにも貢献したのがカナダ生まれの「チャレンジデー」です。

**渡邊** チャレンジデーは現在は全国117か所で行われるほど発展しています。

**坂井** ところで、SSFでは、スポーツライフ調査を2年に1度行っていて、アクティブスポーツ人口の統計をとっています。週に2回以上、1回30分以上、汗ばむくらいの運動している人の統計です。1992年は6.6%でしたが、最新のデータでは18.4%でした。時代の中でスポーツの本来持っている価値が見直されてきたのかなとも思います。

**赤木** この調査をSSFが継続して行ってきたことも大きな評価です。

**三ッ谷** それまで日本にはスポーツ人口調査はなかつ



新しい政策を  
考えるだけでなく、  
実施することが大切です。

たんですね。それをSSFが初めて全国調査をしたのは、画期的なことでした。これを継続していること、しかも国際比較も行っていることは地道でとても重要な仕事をされていると思います。

**玉利** スポーツというのは、いろいろな多面性があります。競技としてのスポーツ、人生を楽しむため、健康づくりなど。ところが、国は競技や学校体育ばかりを先行させてきました。そこに一石を投じたのがSSFです。パイオニアとしての意味は大きいですね。

## SSFの今後と期待することについて

**渡邊** 20年間の流れを勉強させていただきました。

これからは、スポーツ分野のシンクタンクとして新たな第一歩を踏み出します。日本の将来像を見据えながら「国や地方公共団体への政策提言」「スポーツ振興機関への企画提案」を積極的に行っていきます。と同時に、政策提言や企画提案を具現化するためには、国や地方公共団体、スポーツ団体と好意的に協働しな

ければと、考えています。そのためには、今までの活動を通じた様々なネットワークを活かさなければなりません。また新しい事業展開として、日本のスポーツ政策、スポーツ振興を一層充実させるために「スポーツ振興研究助成」や「スポーツ政策学生会議」を通じて、次代を担う若手研究者、学生といった人材育成を図り

ます。さらに、チャレンジデーのような地域とのつながりを大事にして、質の高いスポーツが国中で行われるような事業を展開していきたいと考えています。

スポーツ政策のシンクタンクとして若い人を育成していきます。



**三ッ谷** いくら政策を作っても実施されなければ意味がありません。実施することがいちばん大切です。政策について若い人が研究してくれるというのは大変良いことだと思います。そして、その若い人たちが、各自自治体と一緒にその地域の振興政策を作るのもとても良いことなのですが、本当に実施するにはどのように地域の人たちを巻き込んでいくかというのが問題です。政策はもちろん大事ですが、それを誰がどのようにやるかということこそが、一番、重要だと思います。

**赤木** 現在、スポーツをマネジメントする行政がありません。いくら良い政策があってもどうやっていいのかわからない、ここが日本の遅れている部分です。総合的にスポーツをマネジメントすること、プロマネジメントが大事なのではないかと思います。そのための支援をSSFのシンクタンクの中では是非行ってもらいたいですね。

**玉利** 世の中の流れに対応して今があるのですが、同時に世の中の流れをリードすること、この両面が指導的立場には必要です。流れを無視してはいけない、しかし、流れに流されるままではなく、その流れを方向づける役目をこれからのSSFには担っていただきたいと思っています。

**坂井** ありがとうございました。スポーツに対して、またSSFに対しての愛情あふれるお言葉の数々に感謝いたします。

## 有森 裕子 さん

スポーツを通して  
人間をもっと好きになるように。  
そういう活動をいっしょに  
していきたいですね。

「スポーツを通じて希望と勇気をわかちあう」ハート・オブ・ゴールドでの社会貢献、知的発達障害のある人たちがスポーツを通じて社会参加することを応援する「スペシャルオリンピックス日本」で理事長を務める有森裕子さん。ご自身の活動と評議員も務められた笹川スポーツ財団の今後に期待することについて聞きました。



マラソン選手として活躍してきた私ですが、走りたい、記録を残したいというより“本気・一生懸命”というエネルギーに触れることがしくて、そこにたまたまスポーツ、またマラソンが手段としてあったのです。引退後の現在の活動も、「社会貢献」とか「なにかしなければいけない」という意識は特になく、自分を支えてくれたスポーツという手段を使って、他の人に生かせるのなら、というスタンスで、やれることをやっているというあくまで自然体で、選手時代の延長として今があります。

その活動のひとつとして、年に1度岡山で小学生を対象にした「キッズ・スポーツ体験キャンプ」があります。ここでスポーツを通して、“人間が社会で生きていくための大切なこと”を子どもたちに学んで欲しいということから始まった企画です。

出来る、出来ないという基準でなくスポーツを楽しみ、そこにある「ルールの大切さ」、「仲間とのコミュニケーションやリスペクトする気持ち」、そして「人間を造るために食事がどんなに大切なことなのか」などを子どもたちに理解してもらうための現場を提供することが目的であり、実現しています。

プロのスポーツ選手から本物を教えてもらう子どもたちは、大いに楽しみ、また自然に大切なものを吸収していきます。こういう活動を国内でもっともっと増やすべきだと思いますし、笹川スポーツ財団（SSF）のような経験や人材があれば、国内すみずみまでこういう活動

の支援ができるのではないのでしょうか。

また、このようなイベントや子どもたちにいい環境を作っておけるための情報交換を、私のようなスポーツを通して社会で活動している人々とSSFはもっといっしょにしていくべきなんだと思っています。

SSFは、平成23年度から、笹川スポーツ研究助成によって、スポーツを通じたまちづくり、子どものスポーツ振興などを行いながらスポーツシンクタンクとしての活動をしていくと聞きました。私が日ごろ思うのは、「日本のスポーツを“文化”レベルに押し上げたい」ということ。なにかを見て感動したり、涙する感情は人間が持ついちばん大切な部分であり、音楽や美術、そしてスポーツは、この大切な部分を磨ける大きな手段です。

音楽や美術（アート）と並ぶ“文化”として、これらとコラボレーションできるようなスポーツの企画・イベントをいっしょに考えていきたいですね。

そして、これから実現できるような新しい企画やイベントは必ず「大人」も参加できるようなものでなければなりません。子どもたちが帰って行く家には必ず大人が待っていますし、子どもたちがスポーツする環境を作るのも大人です。そして、スポーツの好きな大人は、スポーツの素晴らしさを子どもに上手に伝えることもできます。大人が関わり大人を動かす楽しい企画やアイデアで、大人も子どもも元気になり、人間が人間をもっと好きになるように、私もいっしょに拡げていきたいと思っています。

THE 20 YEAR HISTORY OF SASAKAWA SPORTS FOUNDATION

1991-2010

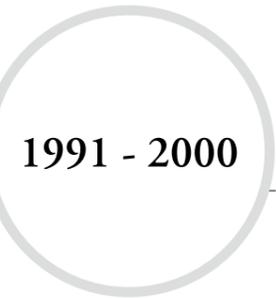
# 20年の歩み

■ありもり ゆうこ / 1966年岡山県生まれ。就実高校、日本体育大学を卒業して、(株)リクルート入社。バルセロナオリンピック、アトランタオリンピックの女子マラソンでは銀メダル、銅メダルを獲得。2007年2月18日、日本初の大規模市民マラソン『東京マラソン2007』でプロマラソンランナーを引退。1998年NPO「ハート・オブ・ゴールド」設立、代表就任。2002年4月アスリートのマネジメント会社「ライツ」設立、取締役就任。国際陸連（IAAF）女性委員会委員、スペシャルオリンピックス日本理事長。他、日本陸上競技連盟理事、国連人口基金親善大使、笹川スポーツ財団評議員、社会貢献支援財団評議員等を歴任。2010年6月、国際オリンピック委員会（IOC）女性スポーツ賞を日本人として初めて受賞。同12月、カンボジア王国ノロドム国王陛下より、ロイヤル・モニサラボン勲章大十字を受章。米国コロラド州ボルダー在住。

20年の歩み

# 第1章

## スポーツ・フォア・オールの夜明け



1991 - 2000

### 1. SSF誕生までの時代背景

1960年代後半から欧米諸国を中心に、健康づくり、心臓病等の成人疾患(生活習慣病)、麻薬、ノイローゼ、人種問題等の対策として、スポーツの普及を国家の政策とする機運が高まりを見せてきた。先鞭をつけたのは、ノルウェーのトリム運動であり、以後スウェーデン(トリム運動)、西ドイツ(ゴールデンプラン)、英国(スポーツ・フォア・オール)、米国(フィットネス運動)等の諸国に波及し、各国のスポーツ政策に大きなインパクトを与えた。

これらは、各国に共通の心身両面の健康への危機意識に支えられたものであり、そのような中からスポーツ・フォア・オールムーブメントが推進されてきた。

一方、わが国では、1964年の東京オリンピックを契機にスポーツに対する国民の関心は高まったが、スポーツを行うのは学校、企業をバックにした選ばれた競技者である場合が多く、一般の人々はむしろスポーツを見て楽しむ側に回っていた。

未だわが国では、欧米社会の諸問題が切実なものとして認識されるには至っていなかったのである。

しかし、高度経済成長の時代から、1980年代以降の成熟社会へと移行し高齢化、都市化、自由時間の増大といった社会変化の中で、健康づくりによる医療費の削減、高齢者の生きがいづくり等の問題が顕在化し、一般市民がスポーツを行うことの必要性、重要性が叫ばれるようになった。

これに対応した形で、1988年7月に文部省体育局スポーツ課が、生涯スポーツ課と競技スポーツ課に分轄され、生涯スポーツ振興のための施策がスタートした。

このような時代背景の中、市民レベルのスポーツ団体の育成までも視野に入れた、きめ細かいサービスを提供

### 1991～2000

#### 1991(平成3)年度

- 6月: 第12回国際トリム・フィットネス生涯スポーツ会議出席(フランス・ポルドー)
- 9月: スポーツエイド募集開始('91年度後期分)(以降平成22年度まで連続実施)
- 9月: 第5回国際スポーツ・フォア・オールフェスティバルへの参加(イギリス・メインヘッド)
- 9月: ニュースポーツ国際フェア開催(東京都立川市)(1992年からのスポーツ・フォア・オール国際フェアの前身)
- 10月: TAFISA(国際トリム&フィットネス生涯スポーツ協議会)理事会開催協力(千葉県)
- 12月: 日本ワールドゲームズ協会(JWGA)設立(以降SSF内にJWGA事務局を設置)
- 1992年1月: 情報誌「sports for ALL」Vol.0 発行
- SSFスポーツセミナー 7回実施
  - 第1回(9月)各国ニュースポーツの現状と課題について
  - 第2回(10月)世界のスポーツ・フォア・オール運動一誕生から今日まで
  - 第3回(11月)歩け運動を提唱して四半世紀一組織づくりと普及活動について
  - 第4回(12月)日本のスポーツ界、いま何が問われるべきなのかアマチュアスポーツ界が抱える問題
  - 第5回(1月)市民スポーツ愛好者は何を望んでいるのか一ジョギングを例に
  - 第6回(2月)エスニックスポーツと国際交流
  - 第7回(3月)普及と強化がかみ合ってこそ、真のスポーツ振興一バレーボール界の世界戦略を聞く
- 国民のスポーツニーズ調査、スポーツ・レクリエーション団体の実情調査 実施
- 海外のマリンスポーツ実情調査実施(オーストラリア、ニュージーランド)
- ASFAA(アジアニア・スポーツ・フォア・オール協会)設立、事務局をSSF内に設置(2000年3月まで)

し得る民間のスポーツ・フォア・オール振興組織の設立の可能性について、1989(平成元)年に日本船舶振興会が調査を開始した。1990年には前身の日本スポーツ機構を設立し、スポーツ・フォア・オール先進国の米国とカナダを訪れ両国のさまざまな組織の調査を行った。

約2年間の調査研究ののち、文部省の設立許可を得て、1991(平成3)年3月15日、財団法人 笹川スポーツ財団(SSF)が誕生した。同年4月1日から活動がスタートし、6月10日には、ホテルオークラで海部首相、笹川良一日本船舶振興会会長、アーノルド・シュワルツェネッガー米国大統領体カスポーツ審議会会長らを迎えて設立記念パーティーが開催された。

### 2. スポーツ・フォア・オール 20年間の遅れ

産声を上げたSSFがまず実施したことは、日本スポーツ機構時代に引き続いてスポーツ・フォア・オール先進国の実情調査であった。国際会議への出席をはじめ、フランス、西ドイツ、イギリス等のスポーツ振興組織を次々と訪問して各国の現状を貪欲に勉強した。

また、日本の実情がどのようなものであるかを把握するため、設立初年度(1991年)に2つの全国調査を実施した。スポーツ・レクリエーション団体実情調査と、国民のスポーツライフに関する調査である。

これらにより、わが国のスポーツ・フォア・オールは、欧米のスポーツ・フォア・オール先進国と比較して20年遅れを取っていることが判明した。

その差を埋めるべく、事業計画が策定されスポーツ・フォア・オールの実現へ向け、数々の具体的な事業が行われていった。



スポーツ・フォア・オール宣言

※スポーツ・フォー・オールの表記について  
財団設立から10年間は、イベント名、新聞、その他すべて「スポーツ・フォア・オール」と表記していましたが、その後、発音により近い表記が望ましいとの考えから、「スポーツ・フォー・オール」と表記するようになりました。本文では、その当時の表記を尊重して記載しておりますので「フォア」と「フォー」が混在しています。ご了承くださいたく存じます。

## 20年の歩み

事業の実施順に2000（平成13）年までの活動を以下に記す。

### ■国際スポーツ機関との連携

1991（平成3）年度～

国際的なスポーツ・フォア・オール振興組織TAFISA（国際トリム&フィットネス生涯スポーツ協議会）、FISpT（国際スポーツ・フォア・オール連盟）への加盟、ASFAA（アジアニア・スポーツ・フォア・オール協会）の設立、IASI（国際スポーツ情報協会）、クリアリングハウス（ベルギー）、カナダのSIRC（Sport Information Resource Centre）などのスポーツ情報機関からの情報収集、パティシパクション（カナダ）、PCPFS（米国大統領体カスポーツ審議会）、英国スポーツ・カウンシル、CCPR（英国スポーツ・レクリエーション協議会）、CONI（イタリア・オリンピック委員会）等、各国のスポーツ推進機関との情報交換を行った。

### ■スポーツライフ調査

1991（平成3）年度～

国民のスポーツに対する取り組み方、考え方を把握して、今後の事業運営の指針とするために実施した。これまでの調査では、日本人成人の3人に2人は1年間に1回以上何らかの運動やスポーツを行っているとして報告されていたが、この調査結果が意味するものは何なのか、これをもってスポーツ人口というのはあまりにも大雑把な捉え方ではないのか、という疑問から独自の調査指標を検討した。フィットネスカナダの調査票などを参考に検討した結果、スポーツの実施状況を量および質の面からの確に把握するために「実施頻度」「実施時間」「運動強度」を加え、3つの観点から調査を行った。そして、「週2回以上」「一回30分以上」、運動強度「ややきつい」以上の運動・スポーツを行う人の割合を「アクティブ・スポーツ人口」と名付け、現在に至るまで、隔年でその変化を調査し続けている。

### ■SSFスポーツエイド

1991（平成3）年度～ 2010（平成22）年度

「日本のスポーツを元気にしたい!」をキャッチフレーズに、事業実施への資金援助によるスポーツ団体の育成を主たる目的として、スポーツエイドがスタートした。

### 1993(平成5)年度

- 5月： チャレンジデー初開催(島根県加茂町が参加)  
(以降平成22年度まで連続実施中)
- 7月： 第4回ワールドゲームズ ハーグ大会現地調査  
(オランダ・ハーグ)
- 7月： 日本・サハリン少年少女サッカー交流  
(清水サッカー協会及び東京少年サッカーリーグの代表選手をロシア・サハリンに派遣)
- 10月：スポーツ・フォア・オール国際フェア'93開催(東京都立川市、兵庫県明石市)  
クロッケー、フライングディスク、ホースシューズ、キャストイング、ローンボウルの世界チャンピオン招聘
- 10月：世界チャンピオンによるスポーツ指導者講習会  
(島根県加茂町)
- 11月：第13回 国際トリム・フィットネス生涯スポーツ会議開催(千葉県・幕張メッセ)  
TAFISAとTAFISA-JAPANが共催
- 11月：ASFAA総会開催(千葉県・幕張メッセ)
- 1994年2月：ASFAA理事会出席(韓国・プサン)
- 3月：ヨーロッパのスポーツ情報機関クリアリングハウス(ベルギー)との協力提携

### 1994(平成6)年度

- 4月：SSF世界スポーツフォトコンテスト開催記念写真展  
ワン・モーメント・イン・タイム「肉体の瞬間」開催  
(東京・渋谷)
- 4月：第1回SSF世界スポーツフォトコンテスト作品募集開始(翌年1月末まで)
- 5月：IASI(国際スポーツ情報協会)'94 会議出席  
(オーストラリア・キャンベラ)
- 6月：スポーツライフに関する全国調査 実施
- 10月：スポーツ・フォア・オール国際フェア'94開催  
(東京都立川市、江東区)
- 11月：第3回ASFAA総会、理事会、およびコンgres出席  
(マレーシア・ランカウイ)、事務局運営
- .....
- SSFスポーツアワードの開発

### 1995(平成7)年度

- 5月：IASI(国際スポーツ情報協会)'95会議出席  
(スペイン・マラガ)
- 6月：ASFAA理事会、総会出席(イスラエル・ネタニア)
- 7月：サマースポーツスクールin KAMO実施  
(島根県加茂町)
- 【地震被災地の子ども達にスポーツを】

スポーツの普及に情熱を傾けるスポーツ団体ならば法人格の有無を問わず助成の対象とすることが大きな特徴である。SSFの根幹を成す事業であり、スポーツ団体が行う事業の自立を促す資金援助制度としての役割を果たしてきた。

当初は、老若男女広い対象をターゲットとしていた。

### ■スポーツ・フォア・オール 国際フェア

1992（平成4）年度～ 2002（平成14）年度

諸外国ではポピュラーだが、日本ではほとんど知られていないスポーツや、日本で生まれてまだ間もないスポーツ等を紹介し、国内に普及するきっかけとするスポーツフェアをほぼ毎年2箇所（関東地区と関西地区）で開催した。参加スポーツ団体とSSFとで実行委員会を組織してフェアの運営に当たった。数多いスポーツの中から自分に合ったスポーツを見つけてもらえるように、各スポーツ団体がブースを担当してPR、指導に努めた結果、毎年多くの参加を得た。

1996年に、2001年の第6回ワールドゲームズを秋田で開催することが決定し、翌1997年から2001年までの5年間「ワールドゲームズフェア」の名称でワールドゲームズ種目の周知を図るため秋田市周辺でフェアを開催した。したがってこの5年間の開催地は東京および秋田であった。

スポーツ・フォア・オール国際フェアは、一定の役割を終え2002年に終了した。

### ■スポーツアワードの開発

1992（平成4）年度～ 1994（平成6）年度

PCPFSが米国で実施し成果を上げていた、スポーツを行う個人を表彰するプレジデンシャルアワードにヒントを得て、日本版のスポーツアワード制度の検討を行った。

登録をしたスポーツを一定期間内に一定回数行い、自己申告にしたがい表彰する制度である。個人でスポーツを実施するきっかけづくりには最適な仕組みであり、足掛け3年実施に向けて検討を重ねたが、取りまとめの事務局機能の問題等から実現に至らなかった。

- 8月：世界スポーツフォトコンテスト'95表彰式開催  
(東京・恵比寿)
- 8月～10月：世界スポーツフォトコンテスト'95チャリティ写真展「ワンモーメントインタイム」開催(東京都、大阪市)【入場料収入でスポーツ用具を購入し兵庫県西宮市内全中学校へ寄贈】
- 10月：スポーツ・フォア・オール国際フェア'95開催  
(千葉県浦安市、兵庫県西宮市)
- 10月：地震被災地の子ども達にスポーツ用具を贈ろうキャンペーンを実施【集まった各種スポーツ用具を西宮市ボランティア統括団体経由で配布】
- 11月、3月：世界スポーツフォトコンテスト'95写真展「ワンモーメントインタイム」開催  
(ハルセロナ、北海道)
- .....

SSFスポーツ・フォア・オール ネットワークの推進  
(会員募集開始、スポーツセミナーの開催「スポーツイベントとスポンサー」東京、名古屋、大阪 2回)

### 1996(平成8)年度

- 4月：SSFスポーツ・フォア・オール ネットワーク発足
- 4月：第6回IOCスポーツ・フォア・オール世界会議に参加(韓国・ソウル)
- 4月：ASFAA理事会出席(韓国・ソウル)、事務局運営
- 4月：日本ダブルダッチ協会設立(事務局をSSF内に設置)
- 6月：スポーツライフに関する全国調査 実施
- 6月：中国国家体委体育情報研究所訪問 情報収集  
(中国・北京、上海)
- 7月：世界スポーツフォトコンテスト'96 表彰式開催  
(東京・恵比寿)
- 7月～3月：世界スポーツフォトコンテスト'96写真展「ワン・モーメント・イン・タイム」開催(東京、横浜、福岡、大阪、北海道)
- 8月：SSFホームページ開設
- 8月：SSFスポーツ・フォア・オールプログラム「40歳からの快適スポーツ」完成
- 12月：SSFスポーツフォーラム開催(東京)  
「ゼロからのスタート」
- 12月：第1回神宮外苑ロードレース開催
- 12月：第4回ASFAAコンgres(兼世界伝統スポーツサイエンティフィックシンポジウム)および理事会、総会出席(タイ・バンコク)、事務局運営
- 12月：第2回世界伝統スポーツ・ゲームズフェスティバルに「和太鼓」と「独楽」を派遣(TAFISA-JAPANとして)(タイ・バンコク)

## 20年の歩み

### ■チャレンジデー

1993(平成5)年度～

カナダのパティシパクションが1983年から行って大きな成果を上げているチャレンジデーをわが国でも実施することとなった。

毎年5月下旬にカナダ政府が主催する「全国フィットネス週間」の一環行事として実施されていたチャレンジデーは、スポーツに気軽に取り組むきっかけづくりのイベントとして、最盛期には国民の5人に1人が参加するというカナダ最大の市民スポーツイベントであった。

1993(平成5)年に島根県加茂町が、わが国、第1号の参加を果たした。その後2001年には、62自治体、50万人以上が参加するイベントに成長した。

### ■SSF世界スポーツフォトコンテスト

1994(平成6)年度～2004(平成16)年度

スポーツ写真から得た感動により、自らも身体を動かしたいと思わせるような写真を世界中に求めてコンテストを行った。コンテストに先立ち開催記念スポーツ写真展を1994年に行い、その後1995、1996、1998、2000年と4回実施した。趣旨に賛同した企業数社からも協賛を得て、世界的に注目されるコンテストとなった。ゴールドプライズ(第1位)の賞金が1000万円という破格の高額賞金も話題を呼んだ。

### ■スポーツプログラムの開発

1994(平成6)年度～1997(平成9)年度

スポーツ・フォア・オールプログラムとしてコンピュータソフトの開発を行い、販売した。スポーツ習慣の定着と、スポーツ種目の普及を目的としたもので、年齢別に「40歳からの快適スポーツ」「20歳からのチャレンジスポーツ」の2種を開発した。

個人のライフスタイルを評価するプログラムとしても活用できる内容となっており、自治体、研究機関等で好評を博した。

### ■スポーツ・フォア・オール ネットワーク

1995(平成7)年度～2004(平成16)年度

同じ志を持ったスポーツ団体の橋渡しのゆるやかな連携として発足した。スポーツセミナー、スポーツフォーラムの開催等を通して情報の提供を行った。また、スポー

### 1997(平成9)年度

- 6月: IASIサイエンティフィックコンgres出席(フランス・パリ)
- 7月: SSFスポーツ・フォア・オールプログラム「20歳からのチャレンジスポーツ」完成
- 8月: 第5回ワールドゲームズ ラハティ大会現地調査(フィンランド・ラハティ)
- 8月～9月: SSFネットワークミーティング開催(大宮市、福島市、名古屋市)「スポーツ・フォア・オールの実現について」
- 10月: SSFスポーツサロン開催(東京)「スポーツクラブづくりを探る意見交換」
- 10月: ワールドゲームズフェア'97開催(秋田県)
- 11月: スポーツ・フォア・オール国際フェア'97開催(東京・神宮外苑)
- 11月: 第15回TAFISAコンgres出席「スポーツ・フォア・オールとクオリティオブライフ」(マレーシア・ペナン)
- 11月: ASFAA理事会、総会出席(マレーシア・ペナン) ASFAAニュースレター発行
- 12月: SSFスポーツフォーラム'97開催(東京、大阪)「スポーツクラブをつくりましょう」
- 12月: 第2回神宮外苑ロードレース開催
- 1998年2月: IIHP(国際ヘルス・プロモーション協会)と協力合意書取り交わし
- .....
- メールサーバー導入

### 1998(平成10)年度

- 4月: SSF国際スポーツセミナー開催(東京)「スポーツ情報サービス 世界の動向を探る」
- 6月: スポーツライフに関する全国調査 実施
- 7月: SSFスポーツセミナー'98の開催(大阪、東京)「NPO法とスポーツ団体」
- 8月: 世界スポーツフォトコンテスト'98表彰式開催(横浜)
- 8月～1999年3月: 世界スポーツフォトコンテスト'98写真展「ワン・モーメント・イン・タイム」開催(横浜、大阪、福岡、東京、兵庫、北海道)
- 10月: ワールドゲームズフェア'98開催(秋田県)
- 11月: スポーツ・フォア・オール国際フェア'98開催(東京・神宮外苑)
- 11月: SSFネットワークミーティング開催(福井、神戸、横浜)「スポーツクラブってどんなところ?」「スポーツクラブへ行こう!」
- 12月: ASFAA理事会、総会出席、運営(オーストラリア・ダンデノン)

ツ団体同士のネットワーク作りにも一役買った。

### ■神宮外苑ロードレース

1996(平成8)年度～2000(平成12)年度

「道路をスポーツに開放しよう」を合言葉に、国立競技場をスタート・ゴールとする10kmのロードレースを5年間実施した。この大会は、車椅子ランナーと健常者が一緒に走るさきがけの大会でもあった。

### ■スポーツ白書

1995(平成7)年度～

1996(平成8)年、設立5周年の節目にわが国初のスポーツ白書を発刊したが、その中で『「共栄共生」の社会を求めて』という提言を行った。

これは、スポーツ・フォア・オールの早期実現のためには、スポーツ行政の再編成と統括するための審議会の設置、新たな財源の確保と使途の明確化、学校施設を含む施設の統合と独立、施設整備の方向転換、スポーツクラブ創設の本格化、情報ネットワークの整備が急務であるとの認識に基づいたものである。

### ■その他

設立間もない1992(平成4)年には、日本船舶振興会との共催で「雲仙普賢岳チャリティマラソン」「日本サハリン少年サッカー交流」事業を実施している。

さらに、ワールドゲームズ種目の取りまとめ、育成を目的として日本ワールドゲームズ協会事務局を運営し、協会のNPO法人化、ワールドゲームズ大会の秋田県招致等を推進した。

またダブルダッチの国内普及をバックアップするため日本ダブルダッチ協会事務局の運営を行った。

広報面では、雑誌sports for ALLを2号発行した。また、sports for ALL NEWSを1993春号(Vol.1)から2001.3月号(Vol.41)まで8年間に亘り発行した。紙面では、SSFの事業紹介、海外のスポーツ事情、中央官庁のスポーツ振興政策、スポーツ団体の活動等を掲載した。毎月6,000部以上(最多号13,000部)発行し、スポーツ団体、地方自治体のスポーツ行政担当者、学識経験者、マスコミ、関係省庁等へ幅広く配付した。

1996(平成8)年には、公式ウェブサイトを開発して活動の一部など情報の提供を開始した。

- 12月: 第5回ASFAAコンgres出席およびTAFISAゲームズフェスティバル参加(オーストラリア・ダンデノン) ASFAAニュースレター発行
- 12月: 第3回神宮外苑ロードレース開催
- 1999年3月: 第11回IASIサイエンティフィックコンgres出席(アメリカ・ロサンゼルス)

### 1999(平成11)年度

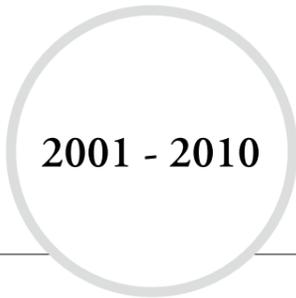
- 4月～3月: 世界スポーツフォトコンテスト'98展覧会(岩手県、鳥取県、青森県、東京都、島根県、北海道)
- 8月: ワールドゲームズフェア'99開催(秋田県)
- 11月: ASFAA理事会、総会出席および運営(キプロス・リマソル)
- 11月: 第16回TAFISAコンgres出席(キプロス・リマソル)
- 11月: スポーツ・フォア・オール国際フェア'99開催(東京・神宮外苑)
- 11月: SSFスポーツフォーラム'99開催(東京、大阪)「このままではスポーツクラブはできない」
- 12月: 第4回神宮外苑ロードレースの開催

### 2000(平成12)年度

- 5月: スポーツライフに関する全国調査 実施
- 5月: 第8回IOC世界スポーツ・フォー・オール コンgres出席(カナダ・ケベック)
- 6月: 第3回世界伝統スポーツ・ゲームズフェスティバル参加(ドイツ・ハノーバー)
- 6月: 「ヘルシーピープル2010とスポーツ」講演会開催(主催TAFISA-JAPAN)
- 7月: ASFAA理事会、総会出席(韓国・プサン)
- 7月: 第6回ASFAAコンgres出席・発表
- 7月: ワールドゲームズフェア2000開催(秋田県)
- 11月: スポーツ・フォア・オール国際フェア2000開催(東京・神宮外苑)
- 11月: SSFスポーツセミナー2000の開催「道路をスポーツに開放しよう」(大阪、東京)
- 12月: 第5回神宮外苑ロードレースの開催
- 2001年1月: 世界スポーツフォトコンテスト2000表彰式開催(東京・恵比寿)
- 1月～3月: 世界スポーツフォトコンテスト2000展覧会(東京、北海道、大阪)
- 1月: SSFネットワークミーティング開催(東京、静岡、大阪)「SSFネットワークについて」
- 3月: 国際スポーツ・フォア・オールシンポジウム参加、発表(韓国・プサン)

20年の歩み

# 第2章 スポーツ・フォー・オールから スポーツ・フォー・エブリワンへ



## 1. 新たな10年へ

設立後10年が経過した。SSFは今まで一気に走り抜いてきた10年を振り返り、今後進むべき道をしっかりと見据える作業を行った。

SSFは助成機能を兼ね備えたスポーツ情報センターを目指すこととして、それに向かって進むことになる。

また、スポーツ・フォー・オールからスポーツ・フォー・エブリワン\*へスローガンを移行し、アクティブスポーツライフの環境の充実を目指し、諸々の事業を実施した。

\*スポーツを行う「みんな」(all)を一つの固まりとして捉えるのではなく、一人ひとりの「個の集合体」(everyone)として考えるもの。

### ■スポーツ白書

1996(平成8)年に引き続き、第2版となる2001(平成13)年発行の「スポーツ白書2010」で、SSFは「アクティブ・スポーツ人口を2010年に30%に」という新たな目標を設定した。

そのためのプロモーションとして「スポーツ好きの子ども達を育てよう」「道路をスポーツに開放しよう」を提案した。

「スポーツの新たな価値の発見」のサブタイトルを付した2006(平成18)年発行のスポーツ白書は、スポーツが持つ本来の力を見直すことによって、世の中を変えてゆこうという決意を表すものであった。

2011(平成23)年2月には、スポーツ白書—スポーツが目指すべき未来—を発行した。スポーツの原点である「楽しむ」とは何かを考え、一人ひとりがスポーツの価値を見出し、個々の生活を豊かにするためにスポーツはどのようなべきかを追求する内容となっている。

## 2001～2010

### 2001(平成13)年度

- 4月: スポーツエイド・スポーツプログラム事業の助成開始
- 4月: 第11回IASIコンgres・総会出席(スイス・ローザンヌ)
- 8月: ワールドゲームズフェア2001開催(秋田県)
- 10月: 青少年のスポーツライフに関する調査 実施
- 10月: 第17回TAFISAコンgres・総会出席(南アフリカ・ケープタウン、ヨハネスブルグ) ASFAA理事会・総会出席(南アフリカ・ケープタウン、ヨハネスブルグ)
- 11月: スポーツ・フォー・オール国際フェア2001開催(東京・神宮外苑)
- 11月: SSFスポーツセミナー2001の開催「子どものスポーツライフを考える」(大阪、東京)
- 2002年1月: 総合スポーツサイト「スポーツ・フォー・エブリワン・ネットワーク(sfen)開設
- 3月: IASI年次会議・理事会出席(スペイン・バルセロナ)
- 3月: 第1回スポーツNPOサミットin Kobelに協力

### ■国際スポーツ機関との連携

国際スポーツ・フォー・オール推進機関との連携はさらに深まった。

精力的に、TAFISA、IASI、ASFAAの総会、理事会へ出席、IOCコンgresへの参加等、海外機関とのパイプを太くして情報の交換を密にすることで最新の国際情勢を的確に把握してきた。

### ■スポーツライフ調査

従来の成人対象のスポーツライフ調査に加えて、2001(平成13)年度からは、青少年(10歳から19歳)のスポーツライフに関する調査、さらに2009(平成21)年度からは、子ども(4歳から9歳)のスポーツライフ調査も実施して、子ども達のスポーツに対する取り組みについても把握した。子どものスポーツライフ調査では、スポーツ実施の二極化の分岐年齢とその背景を探ることができた。

### ■SSFスポーツエイド

2001(平成13)年度からは、「スポーツ好きの子ども達を育てよう」をテーマに、青少年に焦点を当ててスポーツプログラム事業やスポーツキャンプ事業への助成にも力を入れてきた。

また、2008(平成20)年度からは、スポーツエイド、ウォータースポーツエイドに制度を二分化して、陸のスポーツ、水のスポーツへの支援を強化した。

20年間で延べ8,400事業、約50億円の支援を行ってきたが、2010(平成22)年度末をもって終了した。

単にスポーツ団体の事業への資金援助というものでなく、自主運営、自立までの段階的援助という考え方に共鳴したスポーツ団体も多く、それらの団体に与えた影響は大きなものがあった。

### ■チャレンジデー

着々と実施個所が増え、2010(平成22)年には117カ所が実施して140万人あまりが参加するスポーツ・フォー・エブリワンを象徴するビッグイベントに成長した。

## 2002(平成14)年度

- 5月: 東京シティロードレース2002開催(東京・日比谷公園～国立競技場)
- 5月: スポーツライフに関する全国調査 実施
- 9月: ASFAA理事会、総会出席(中国・北京)
- 9月: 第7回ASFAAコンgres出席・発表(中国・北京)
- 10月: 第9回IOC世界スポーツ・フォー・オール コンgres出席(オランダ・アーネム)
- 11月: 第2回スポーツNPOサミット東京の開催「スポーツNPOとスポーツ振興」
- 11月: スポーツ・フォー・オール国際フェア2002開催(東京・神宮外苑)
- 12月: 世界スポーツフォトコンテスト2002表彰式開催(東京・恵比寿)
- 12月～2003年3月: 世界スポーツフォトコンテスト2002 展覧会(東京、北海道、新潟、兵庫)
- 2003年2月: SSFスポーツセミナー2003の開催「スポーツクラブ、さまざまな視点」(東京)
- 3月: IASI年次会議・理事会出席(キューバ・ハバナ)

## 2003(平成15)年度

- 9月: 第18回TAFISAコンgres出席(ドイツ・ミュンヘン)
- 9月: ASFAA理事会出席(ドイツ・ミュンヘン)
- 10月: 第3回スポーツNPOサミット東京の開催「実りある連携に向けて」
- 2004年1月: SSFネットワークミーティング開催(東京)「地域スポーツ事業の自立と発展」
- 2月: マリンスポーツの実態調査(オーストラリア・パース コテッスビーチ)
- 2月: SSFスポーツセミナーの開催「ロンドンマラソンのフィロソフィーとその経済効果」(東京)
- .....
- 国際スポーツ・ボランティア調査(106ヶ国、245機関)の実施

## 20年の歩み

### ■SSF世界スポーツフォトコンテスト

スポーツ文化の定着のため「世界スポーツフォトコンテスト」を引き続き開催。2002年、2004年の2回広く世界に呼びかけ募集を行った。1995年から都合6回のコンテストを実施して、毎回1万点以上の応募作品が集結した。優秀作品は表彰し、優秀作品写真展を全国展開した。

### ■神宮外苑ロードレース、東京シティロードレース

国立競技場をスタート・ゴールする外苑周回コースを使用していたが、日比谷公園をスタートし、国立競技場をゴールとするコースの道路使用の許可が出たことから、「東京シティロードレース」として2002(平成14)年5月に5,000人あまりの参加者を得て実施した。

### ■ワールドゲームズ

2001(平成13)年8月に秋田県で開催された第6回ワールドゲームズ大会には93の国と地域から選手・役員約4,000名が参加し、約30万人の観客が集まり大成功を収めた。

この、ワールドゲームズ秋田大会の成功をバネに、日本ワールドゲームズ大会を実施すべく、国内の開催地を募集したが、景気の低迷の影響もあり実現に至っていない。

また、2005年デュイスブルク大会(ドイツ)、2009年高雄大会(チャイニーズタイペイ)への選手団の派遣に対しては、事務局としてサポートしている。



東京シティロードレース 2002年

### 2004(平成16)年度

- 4月: ロンドンマラソン2004実態調査
- 4月: IASI年次会議・理事会出席(ポルトガル・リスボン)
- 5月: スポーツライフに関する全国調査 実施
- 6月: SSFスポーツセミナーの開催「都心における市民マラソンの実現を目指して～これがニューヨーク・シティマラソン」(東京)
- 8月: 第1回湘南オープンウォータースイミングの開催(神奈川県・湘南海岸)
- 9月: 第8回ASFAAコンgresおよび理事会出席(チャイニーズタイペイ・台北)
- 10月: 世界スポーツフォトコンテスト2004表彰式開催(東京・恵比寿)
- 10月～2005年3月: 世界スポーツフォトコンテスト2004 展覧会(東京、北海道)
- 10月: 第4回スポーツNPOサミット東京の開催「スポーツNPOの価値と使命」
- 11月: 第10回IOC世界スポーツ・フォー・オールコンgres出席(イタリア・ローマ)
- 11月: ニューヨーク・シティマラソン2004実態調査
- 2005年1月: SSFネットワークミーティング開催(東京)「地域スポーツ事業の自立と発展」
- 3月: SSFスポーツ・フォア・オール・ネットワーク 会員組織解消
- .....
- スポーツNPO実態調査実施

### ■スポーツ・フォア・オール ネットワーク

ネットワーク事業の一環として、引き続きスポーツセミナーを平成17年(2005年)まで、毎年開催した。また、第1回スポーツNPOサミットの開催に協力したのち、第2回から第5回までのスポーツNPOサミットを主催して、スポーツNPO団体間の連携強化に努めた。

### ■ウェブサイト

2001(平成13)年には、既設の笹川スポーツ財団ウェブサイトとは別に、『スポーツ・フォー・エブリワン・ネットワーク(sfen)』を開設し、スポーツ種目情報、自治体とスポーツに関する情報などの提供を開始した。様々な視点からのスポーツに関する問題提起などが好評を得た。

2009(平成21)年には、公式ウェブサイトとsfenの両サイトを合併し、SSFホームページをリニューアルオープンして現在に至っている。

### 2005(平成17)年度

- 5月: IASI年次会議・理事会およびスポーツ情報国際会議出席(中国・北京)
- 6月: 青少年のスポーツライフに関する調査 実施
- 6月～2006年3月: スポーツボランティア・リーダー養成研修会(東京) 4期13回実施
- 7月: 第7回ワールドゲームズ デュイスブルク大会の状況調査(ドイツ・デュイスブルク)
- 8月: 第13回EASM(European Association for Sport Management)会議出席
- 8月: 第2回湘南オープンウォータースイミングの開催(神奈川県・湘南海岸)
- 8月: 世界スポーツフォトコンテスト2004展覧会(兵庫)
- 9月: 第19回TAFISAコンgres出席(ポーランド・ワルシャワ)
- 9月: ASFAA理事会・総会出席(ポーランド・ワルシャワ)
- 11月: ニューヨーク・シティマラソン2005状況調査(アメリカ・ニューヨーク)
- 11月: 第5回スポーツNPOサミット東京の開催「スポーツNPOとまちづくり」
- 2006年3月: SSFスポーツセミナー2006の開催～スポーツ白書最新版刊行記念～「日本のスポーツを考える」(東京)
- 3月: ASFAA理事会およびTAFISAシンポジウム出席(韓国・プサン)



ウェブサイト sfen 開設案内はがき(2002年)

## 20年の歩み

### 2. 東京マラソン、湘南オープンウォータースイミング

#### ー 二大スポーツイベント開催 ー

#### ■東京マラソン

2006（平成18）年度～2008（平成20）年度

神宮外苑ロードレースから東京シティロードレースへと引き継がれた「道路をスポーツに開放しよう」という目標は、東京マラソンへと発展する。

2007（平成19）年、2008（平成20）年、2009（平成21）年の3年間、東京マラソンのボランティアの取りまとめの組織であるボランティアセンターの運営を行った。

SSFが養成認定した約600名のスポーツボランティア・リーダーが12,000名ものボランティア全体のまとめ役として機能したことで、円滑な大会運営が図られた。

なお、東京都知事からボランティア活動を賞賛されるなど、その活動は評価された。2010（平成22）年からはボランティアセンターを東京マラソン事務局へ移転し、その役割を終えた。

#### ■湘南オープンウォータースイミング

2004（平成16）年度～2008（平成20）年度

マリンスポーツの楽しさ、素晴らしさをより多くの人々に周知するために「オープンウォータースイミング」を湘南海岸で実施した。

2004年から2008年までの5年間毎年8月に開催した。マリンスポーツ団体の協力、一般ボランティアの協力によりレースが行われ、2008年の第5回目大会では、地元中心に約700名のボランティアの協力を得る中、小学生から成人まで約2,000名のスイマーが参加し盛大に開催され、湘南の風物詩として定着した。2009（平成21）年以降は地域のマリンスポーツ団体の連携により地元密着型イベントとして開催されている。

#### ■スポーツボランティア・リーダーの養成

2005（平成17）年度～

神宮外苑ロードレース、東京シティロードレースで培ったノウハウを生かして、東京マラソンへ向けたスポーツボランティア研修会を実施してきたが、2005年からはスポーツボランティアを全国に広げるためのスポーツボラ

#### 2006(平成18)年度

- 4月：IASI年次会議・理事会およびスポーツ情報国際会議出席(ブラジル・ブラジリア)
- 6月：スポーツライフに関する全国調査 実施
- 6月～11月：スポーツボランティア・リーダー養成研修会(東京) 2期4回実施
- 8月：第3回湘南オープンウォータースイミングの開催(神奈川県・湘南海岸)
- 10月：第11回IOC世界スポーツ・フォー・オールコンgres出席(キューバ・ハバナ)
- 11月：第9回ASFAAコンgresおよびASFAA理事会・総会出席(フィリピン・マニラ)
- 2007年2月：東京マラソン2007開催(運営ボランティアの体制構築およびコースの運営・管理)

#### 2007(平成19)年度

- 5月：IASI年次会議・理事会出席(東京・国立スポーツ科学センター)
- 5月：国際スポーツ情報セミナーの開催(東京)(主催：国立スポーツ科学センター、SSF共催)
- 8月：第4回湘南オープンウォータースイミングの開催(神奈川県・湘南海岸)
- 9月：第20回TAFISAコンgres出席(アルゼンチン・ブエノスアイレス)
- 9月：ASFAA理事会・総会出席(アルゼンチン・ブエノスアイレス)
- 10月：有識者懇談会「サロンミーティング」の開催(長期キャンプの可能性について)
- 11月：海外スポーツ政策調査の実施(オーストラリア・キャンベラ)
- 2008年2月：東京マラソン2008開催(運営ボランティアの体制構築およびコースの運営・管理)

#### 2008(平成20)年度

- 4月：日本ダブルダッチ協会 独立
- 5月：第50回 ICHIPER・SD世界学会出席(鹿児島県鹿屋市)
- 5月：スポーツライフに関する全国調査実施
- 8月：第5回湘南オープンウォータースイミングの開催(神奈川県・湘南海岸)
- 9月：第6回IOCフォーラム出席(韓国・プサン)
- 9月：第4回世界スポーツ・フォー・オールゲームズの視察(韓国・プサン)
- 9月：第10回ASFAAコンgresおよび理事会・総会出席(韓国・プサン)

ンティア・リーダー養成事業を実施している。

### 3. 新たな旅立ち

2009（平成21）年度は、「スポーツの価値」が問われた1年であった。

7月、国会に当時政権与党から提出された「スポーツ基本法案」は衆議院の解散により廃案となり、その後の政権交代に伴う事業仕分けにより、スポーツ関連予算は削減となった。一方社会では、経済不況や社会変化による企業スポーツの撤退が多く見られ、また、オリンピック選手強化の取り組み問題や東京オリンピック・パラリンピック招致の失敗による日本スポーツ界の外交力やロビー活動の限界など厳しい年となった。

このような中、SSFでは、「助成事業」「調査研究事業」「国際交流事業」「普及啓発事業」「広報事業」の均衡と事業間の連携を図り、スポーツの基盤強化を進めるべく、効率的な業務運営に努めた。

2010（平成22）年度からは、スポーツに関するシンクタンク機能の拡充強化を目的に、スポーツ振興に不可欠な統計データや政策情報の収集と発信を行うとともに、調査研究の充実を図っている。

そして、2011（平成23）年4月、行政やスポーツ振興機関等への政策提言、スポーツ団体への企画提案、自らの事業開発など「実践型スポーツシンクタンク機能」を財団運営の中心軸に据え、各種事業の有機連携を図りながら、スポーツの将来像を見据えた新たな旅立ちが始まった。

- 11月：第12回IOC世界スポーツ・フォー・オールコンgres出席(マレーシア・ゲンティンハイランド)
- 11月：海外スポーツ政策調査の実施(イギリス・ロンドン)
- 2009年3月：第13回IASIコンgresおよび理事会・年次会議出席(オーストラリア・キャンベラ)
- 3月：ASFAA理事会出席(中国・マカオ)
- 3月：東京マラソン2009開催(運営ボランティアの体制構築およびコースの運営・管理)

#### 2009(平成21)年度

- 7月：第8回ワールドゲームズ高雄大会の状況調査(チャイニーズタイペイ・高雄)
- 9月：第21回TAFISAコンgres出席(チャイニーズタイペイ・台北)
- 10月：TAFISA理事会出席(韓国・ソウル)
- 10月：SSFホームページリニューアルオープン(SSFホームページとsfenホームページが合体一本化)
- 12月：スポーツ政策調査(イギリス・ロンドン)
- 2010年3月：第11回ASFAAコンgres出席(イスラエル・テルアビブ)
- 3月：全国SSFスポーツボランティア・リーダーサミット2010の開催(東京)
- スポーツボランティア・リーダー養成研修会(東京)

#### 2010(平成22)年度

- 5月：TAFISA認定リーダーシップコースへの派遣(マレーシア・クアラルンプール)
- 6月：スポーツライフに関する全国調査実施
- 6月：第13回IOC世界スポーツ・フォー・オールコンgres出席(フィンランド・ユヴァスキュラ)
- 8月：TAFISA理事会出席(タンザニア・ダルエスサラーム)
- 11月：ASFAA・TAFISA理事会出席(中国・マカオ)
- 11月：sfen特別座談会「日本のスポーツ政策を考える」開催(東京)
- 2011年2月：笹川スポーツ研究助成制度創設 募集開始

#### 2011

#### 2011(平成23)年度

- 4月：SSF スポーツシンクタンクとして再スタート
- 6月：スポーツ振興に関する政策提言

スポーツシンクタンク記念シンポジウム  
「日本のスポーツのこれからを考える」開催予定(東京)

## 20年の歩み

## 笹川スポーツ財団設立20周年を祝って

岡野 俊一郎

国際オリンピック委員会 委員



笹川スポーツ財団の設立20周年を心からお祝い申し上げます。

設立以来理事を拝命して20年が過ぎたわけですが、この20年の間、財団の運営にたずさわってこられた小野清子会長の卓越したリーダーシップと事務局の皆さんの熱意溢れる努力を身近に見てきた私は、まずこれらの方々のスポーツを愛する心に深甚なる敬意を表したいと存じます。

同財団の活動は極めてユニークなものであり、設立以来「誰でも、何時でも、何処でもスポーツに親しめる社会の実現」を目標に、日本のスポーツの中心組織である(財)日本体育協会や(財)日本オリンピック委員会の手の届かない分野を開拓されてこられました。

即ち全国150ヵ所を目標として1日スポーツを楽しむ住民参加の「チャレンジデー」を展開したり、東京マラソンをサポートするボランティアの育成などの活動です。

一方、早くから“Sport for All”の世界組織に参加するのみならず、調査を海外に広げて『諸外国に学ぶスポーツ基本法』を、国内でも成人の運動・スポーツの実践状況を調べ『スポーツ・ライフ・データ2010』を出版するなど、その活動は誠にユニークなものがあります。

今回で終了したスポーツエイドも20年間で計8,400のスポーツ活動に約50億円の援助を行い、全国の草根スポーツを育ててきた功績は記録に残る素晴らしい活動でした。

このようなスポーツに関する自由な幅広い活動は正に笹川スポーツ財団ならではのものです。

20周年を機に、更に日本のスポーツを幅広く育てると同時に、その在り方を考える材料を提供して下さることを願うと共に、笹川スポーツ財団の益々の発展を心より祈念して、お祝いの言葉とさせていただきます。

## 笹川スポーツ財団設立20周年に思う

本間 政雄

立命館アジア太平洋大学副学長  
(元文部省生涯スポーツ課長)

このたび貴財団が、設立20周年の大きな節目を迎えられたこと、心からお祝い申し上げます。この間、生涯スポーツの振興に多大の貢献をされてこられたことに敬意を表したいと思います。

私が生涯スポーツ課長を務めた1989年から92年の3年間というのは、生涯スポーツ行政にとってはいわば黎明期であったと思います。それまでの文部省のスポーツ行政は、競技スポーツ志向が極めて強く、オリンピックや各種の世界選手権、国民体育大会といった世界レベル、全国レベルの大会でよい成績を挙げるといった目的に向かって色々な政策がとられていました。また、いわゆる商業スポーツや動力機を用いたスポーツは「スポーツの精神に反する」ということで行政の対象とはされていませんでした。

その結果、文部省のスポーツ行政は、スポーツを取り巻く環境の変化や人々のスポーツに対する意識の変化に全くついていくことができず、「スポーツの振興」を担うべき行政機関として機能していませんでした。そして健康づくり、仲間づくりといった観点からの施策は厚生省、地域振興や活性化の観点からの施策は自治省や通産省、建設省、運輸省、産業振興の観点からの施策は通産省や農林水産省、スポーツの場である道路や海洋、山岳、空域の利用調整を行う観点からは警察庁、環境庁、運輸省、農林水産省といった具合に、各省庁がばらばらにそれぞれの施策を展開するという状況になっていました。

スポーツの統括団体と呼ばれる各スポーツ分野の連

盟や協会、それらの連合組織としての日本体育協会にも、一部の例外を別として子供から高齢者まで様々な目的で行う多様なスポーツ活動を支援して行こうという姿勢に乏しく、いつの間にか国民の多くにとって文部省や統括団体の行う施策とは関係のないところでスポーツ活動を行うということになっていました。言い換えれば、文部省などの行政が、現実のニーズと乖離してしまっていたということです。スポーツの振興には、人(指導員)、資金、場・施設が必要ですが、文部省の施策はせいぜいが指導員の育成であり、資金の大半はトップレベルの選手の育成・強化と体育館やプールなどの学校体育施設建設に回っていて、一般の市民のスポーツ活動の振興には極めて無力でした。

文部省所管の学校の施設開放や公民館などの利用はありますが、多くの一般の市民にとって最も身近なスポーツの場は、建設省(自治体なら土木局)所管の河川敷の野球場やゴルフ場であり、厚生省所管のアスレチック・クラブであり、民間が経営するゴルフ(練習)場やテニス・クラブであり、各県に国体のために整備される総合運動施設すら建設省による都市公園整備事業の一環として行われていたのです。役所の運営するスポーツ施設が色々な部局にまたがっていることは、利用者の立場からは利用できる時間帯や申し込み手続きがばらばらで使い勝手が悪いということになり、民間経営ということは総じて利用料が高いということを意味します。また、民間企業が経営する施設では、青少年の健全育成といった公益目的という理屈

## 20年の歩み

にはならないので、税制上の優遇措置を受けるのにも具合が悪いのです。

こうした状況を踏まえて、文部省はそれまでの「競技スポーツ課」から「生涯スポーツ課」を分離・独立させ、本格的に生涯スポーツの振興に当たることになりました。初代の工藤智規課長は1年で交代してしまい、2代目の私が3年間課長を務めたわけですが、これまで書いてきたような状況を踏まえて、中央レベル、自治体レベルでのスポーツ行政の連携・協力と官民のスポーツ活動の連携に意を用いました。その際痛切に感じたのが、民間の立場から、国内だけでなくスポーツ先進国の状況や政策について調査・分析を行い、その結果を踏まえて機動的かつ柔軟にスポーツ政策について提言を行い、政策上の隘路になっている一般市民レベルのスポーツ活動やそれらを支えるスポーツ団体の支援を行う組織の必要性でした。ちょうど船舶振興会（当時、現日本財団）から、こうした構想にぴったりの財団法人設立のアイデアが出されており、1年ほどかけて事業内容や、既存の団体との事業の役割分

担を整理した上で認可に至ったのです。それが笹川スポーツ財団です。

当時は、まだスポーツ振興基金も構想段階であり、またサッカーくじによる生涯スポーツ振興も水面下で検討を始めていた段階でしたので、財団の設立は大きな画期でした。早速、生涯スポーツ活動の資金援助はもちろん、政府に対する政策提言を行うためのシンク・タンク機能の整備、生涯スポーツ白書の刊行、さらには国際的な生涯スポーツ運動に、体育協会、レクリエーション協会などとともに日本側の受け皿の一つになってもらいました。

いまやスポーツは、すべての市民にとって生活の不可欠の一部となりました。「する」スポーツ、「見る」スポーツ、「支援する」スポーツなど係わり合いは多様ですが、スポーツ抜きの生活はもはや考えられなくなっているのではないのでしょうか。笹川スポーツ財団も、設立20年を経てこうした環境の変化を踏まえて新しい1歩を踏み出してほしいと思います。

あらためて設立20周年、おめでとうございます！

しかし、貴財団は同じ思いを共有する熱意ある専門家達との協力の下、長年にわたる試行錯誤を重ね、日本のみならず世界の“Sport for All”のリーダー的存在に発展されました。その実績と指針は、同じミッションの下で活動する多くの団体のモデルとなっており、その点で貴財団は“Sport for All”の真の開拓者といえます。

貴財団とTAFISAの協力・提携関係の長い歴史の中で、もっとも特筆すべき協力事業の一つに2001年の“TAFISA World 2001”出版事業があげられます。同事業は、世界各国のSport for All推進団体に対する国際調査結果の出版であり、世界初の試みでした。この事業の提唱者であり、TAFISAの初代会長であった故ユルゲン・パルム氏と貴財団は人々の健康的な生活の確立に全力を挙げるという理念において盟友であり開拓者でした。

また、貴財団はTAFISAの提唱するいくつものプログラムを日本において実践しており、それら全てが大変

な成功を収めています。なかでも顕著な成功を収めている事業にチャレンジデーがあげられます。1993年に1参加自治体で始まった日本のチャレンジデーは、コーディネーターである貴財団のご尽力により、117の自治体・地域から140万人以上が参加する一大イベントに発展しました。（2010年度実績）

社会の環境が急激に変化し、生活スタイルも多様化する現代社会において、体力を維持し健康的な毎日を過ごすことの重要性に対する人々の関心は高まっています。貴財団がそうした人々の期待に応え、果たしていく責任もまたそれに比例して大きくなっていくことでしょう。しかし私は、貴財団はその責任感をむしろ楽しみ、喜んで自らの役割を果たしていけることを確信しています。

これまでの道のりに敬意を表するとともに、これからの20年間もまた共に歩んでいきましょう。

あらためて笹川スポーツ財団の20周年を心よりお慶び申し上げます。

It is an honor and great pleasure for me to congratulate The Sasakawa Sports Foundation on the occasion of the 20th Anniversary. This fills me with great pride and admiration since for all these years Sasakawa has always been a strong and reliable supporter of TAFISA.

I am sure that when The Sasakawa Sports Foundation was established in March 1991 as Japan's only organization to “promote the enjoyment of sports by anyone, anytime, anywhere”, it was not an easy task as it was a new concept for the people everywhere. However, through the many years of trials and errors, together with the passion and enthusiasm of those dedicated professionals, the Foundation has grown to become one of the leaders in Sport for All, to become a role model in leading by example and guiding those who need assistance not only in Japan but globally. Thus, Sasakawa can be truly named a “Pioneer in Sport for All”!

The Sasakawa Sports Foundation and TAFISA has had a very long history of cooperation and collaboration which as one of its highlights had the “TAFISA World 2001 Almanac”, a global survey of the Sport for All community, the first of its kind to be conducted worldwide. Sasakawa was a friend and partner to Prof.

Jürgen Palm, the founding president of TAFISA, as pioneers in the field you believed in establishing for the wellness of the people.

TAFISA has been represented in Japan through The Sasakawa Sports Foundation in a number of programs, and the events organized here have all been very successful. Worth mentioning is TAFISA's World Challenge Day, where communities try to get as many people to participate in physical activity or sports for a minimum of 15 minutes on a given day. As the Coordinator for Japan, The Sasakawa Sports Foundation has led the World Challenge Day from one city in 1993 to involve 117 cities and 1.4 million people annually.

As people become more aware of the benefits of being healthy and physically fit in today's rapidly changing society and diverse lifestyles, the role of The Sasakawa Foundation will also increase accordingly to accommodate these people. But I am very confident that you will be very comfortable in this role.

Congratulations on a job well done and let us march forward towards another active 20 years and beyond.

Happy 20th Birthday, Sasakawa!!!

## 祝辞

### Congratulatory Message for The Sasakawa Sports Foundation

ウォルフガング・バウマン Wolfgang Baumann  
TAFISA事務総長 TAFISA Secretary General



貴財団が20周年を迎えられるにあたり、この祝辞をお送りする機会を感謝するとともに、光栄に存じます。貴財団が長きにわたりTAFISAを支援してくださっていることは、我々にとって大変心強く誇りであり、これまでの歴史に対し称賛の思いでいっぱいです。

貴財団が設立された1991年3月当時、「スポーツの楽しさをいつでも、どこでも、誰にでも」は、新たなコンセプトであり、それを組織理念に掲げる団体は日本でも数少なく、具現化の道は容易なことではなかったでしょう。

## 20年の歩み

## 笹川スポーツ財団 初代会長として

坪内 嘉雄  
笹川スポーツ財団 前会長



私が常日頃から考えている理想の社会の条件として、誰もがいつでもやりたい時にスポーツやレクリエーションができるということがあります。その実現のため様々な団体の代表や顧問等を引受けてきましたが、ある時、日本財団が資金を拠出して生涯スポーツ振興を目的とした財団ができるので、初代会長を願いたいとの依頼がありました。

アメリカのPresident's Council on Physical Fitness and Sports (以下PCPFS：米国大統領体カスポーツ審議会、現在：President's Council on Fitness, Sports & Nutrition) は大統領直属の組織としてスポーツ活動を推進しています。日本でも政府（総理大臣）直属でスポーツ活動を支援・推進をすべきであると考えておりましたので、PCPFSとも提携する予定のSSFの会長職就任を喜んでお引き受けすることにいたしました。

笹川スポーツ財団の設立記念パーティーには、アーノルド・シュワルツェネッガー PCPFS会長（当時）も来日し、海部俊樹内閣総理大臣（当時）や笹川良一日本財団会長（当時）をはじめとする政財界各界の方々も多数参加され盛大な式典だったことを覚えています。

国際交流を積極的に推進したので、国際会議などに参加する海外出張も数多くありました。

当時はASFAA（アジアニア・スポーツ・フォア・オール協会）会長も兼任していたため、年に1～2回は海外に出張しています。今ではリゾート地として有名な

マレーシアのランカウイ島などは、当時まだ開発途中であったし、イスラエルのテルアビブ空港では入国審査が厳しく、ずいぶんと待たされた記憶があります。

また、ワールドゲームズ大会の視察で、オランダのハーグやフィンランドのラハティにも行きました。フィンランドの時はヘルシンキに立ち寄り、当時のフィンランド大使で元日本体育協会会長の高原須美子さんを表敬訪問し、スポーツ振興について語りながら一緒に食事した思い出があります。

初代会長ということで、藤本和延常務理事（当時）や笹川陽平日本財団理事長（当時）の協力のもと、多くのスポーツ関係者に理事や評議員に就任いただき、スポーツ文化の定着を目的に活動を行ってきました。後を引き継いだ小野清子会長は日本のスポーツの中心人物であると思っています。これからも、誰でも、どこでも、いつまでもスポーツに親しめる社会の実現を目指し、元気な日本をつくる一助となって活動することを期待しています。

新しく生まれ変わる  
笹川スポーツ財団に期待しています

横山 喬  
笹川スポーツ財団 前常務理事



スタート時は、まだ現在の事務所ではなく、このビルの4階だったか、その部屋のクーラーから出る水があふれて何度もバケツで捨てて行ったことをよく覚えています。2回くらいの移動を経て今の事務所に引っ越して来ました。事務所のレイアウトをしたり、人事や給与体系などの財団としての規定を作ることが最初の仕事でした。1991年の4月ごろですね。

当時は、5～6名でスタートしましたが、少しずつ人を増やそうということになり、各大学の就職部をまわり、1992年の4月に、4～5名の新入社員が入りました。その後は、定期採用はしませんでした。学生からの問い合わせがあるようになり、少しずつ『笹川スポーツ財団（SSF）』という名前が知られるようになってきたことも実感しました。

経理としての仕事は、民間企業と違い予算が確保されていますから、むしろ基本財産をどう運用していくか、ということを考える役目が業務の中心だったように思います。

人数の少ない小さな組織とはいえ、事業部があくまで中心であり、総務・人事・経理は最小限の人数で効率よく業務にあたるのが大切だったことは言うまでもありません。そんな中「チーム制」をとり、各事業に対してもっと責任を大きく感じるようにしたらいいのではないかと藤本常務（当時）から提案がありました。私は、これは「職階制の採用」であり、職階制を試す

ことができる、同じような年齢の多い職員のはげみになるのではないかと賛成し現在に至っていると思います。

また、管理部門で非常に難しいのは、「経理の仕事を経験させる」ことです。経理の業務は、全く知らない人には出来ないで、経理業務経験者が財団内に一人しかいないのでは困ります。2～3人の経理経験者が代わる代わる業務を担当することも今に引き継がれていることの大きな成果ではないでしょうか。

SSFのイベントで非常に思いだされるのは、ワールドゲームズを秋田県で開催したときのこと。国際大会など経験したことのない秋田県の企業が総動員し、秋田県民全員で汗をかけた「熱意」を感じる大会となり、私たちSSFもこのような情熱を持って取り組まなければいけないと考えさせられた大会でもありました。

来年度から、SSFは「シンクタンク」として再スタートするとうかがいました。設立からの20年で、「SSFオリジナルの色」が付き個性が出てくることを期待しております。「シンクタンク」と言うことですからさまざまなことを提言する頭脳集団として、ただ自己満足するのではなく、スポーツ界にとって価値のある集団として大きな花が咲くことを期待しています。知名度を上げて、世界中の人々がSSFを知っている団体になり、引退した私たちも自慢できる存在になっていただきたいと願っています。

## 20年の歩み

## 「得魚忘筌」

藤本 和延

笹川スポーツ財団 前常務理事



文部省（当時）体育局スポーツ課が、生涯スポーツ課と競技スポーツ課に分かれたのが1988年。それまで「スポーツ」と言えば、「オリンピック」であり、「プロ、実業団の競技」であり、また「学校体育、部活」でしたが、そこに「万民のスポーツを楽しむ権利」という新しい概念が加えられた時代でした。

1985年に『ワールドゲームズ大会』が開催され、日本体育協会に加盟している44競技（当時）以外に多種多様なスポーツがあることを認識させられました。しかも日本でも行われているのに誰も手をさしのべていない。日体協加盟種目だけがスポーツ扱いで国の支援を受けている。このままでいいのか。そのような時代背景の中で立ち上げたのがSSFの前身『日本スポーツ機構』です。

事務所にはいろいろな方々が入り出し、いっしょにビールを飲みながら「どこに問題があるのか、いま何をすべきか」と連日連夜話をしました。アメリカやヨーロッパへ赴き、どこかの部署がどのようなシステムでSport For Allを普及させているのか、根こそぎ視察しました。なんと日本は20年遅れていたのです。この現実にショックをうけました。

日本の競技種目団体は、アスリートの育成を学校や企業に任せ、スポーツや種目の普及という考え自体がないことにも気づきました。スポーツの国際交流とは国際試合をやることだと思っていたのです。

早く追いつかなければならぬ、日本の英知を結集してヨーロッパのゆたかなスポーツライフを我が物にしよう。「Sport For Allを実現する」という分かりやすいビジョンに行政や識者の賛同を得て『笹川スポーツ財団（SSF）』が誕生したのです。

まずは現状を知らなければならぬと、2000人を対象としたスポーツライフ調査を開始します。日本人のスポーツとの関わり方と現状を知れば、おのずと為すべきことが見えてきます。これで組織の基礎が出来上がったと実感しました。この調査は、行政の基礎データになるように、サンプル数を3000人に増やして2年ごとに継続しています。長く続けることで、比較・検討することも可能になりますし、我々の成果も確認でき、より正確なデータになっていくわけです。このSL調査は海外でも評価され、これをベースに数力国で実施されて、海外比較を容易にしています。

設立10年を期して準備し、出版したのが「スポーツ白書」です。SSFは年次報告書を出していません。この種目の目は通すだけできちっと読まれていないからです。その代わりとして海外比較も含めて、スポーツの全ての面、法律、政策までを5年毎にまとめSSFの提言を記して出版しています。これらは文部省（当時）の中教審の資料としても使われ、3版4版と増刷しSSFの収入源になりました。

「スポーツ・フォア・オール国際フェア」「ワールド

ゲーム秋田大会」「チャレンジデー」、「神宮外苑ロードレース」等の普及イベントは、それぞれビジョンと目的を明確に示して開催し、成果にたいして説明責任を全うできるようにしました。

調査、白書と普及イベントを車の両輪としてSSFは常に有ったのです。

SSFの経費の大半を占める「スポーツエイド」は直接市町村のスポーツ団体やクラブ、ニュースポーツ愛好者の背中を一押しすることで、スポーツの裾野を広げようという資金支援制度です。20年間で、成人の週2回以上のスポーツ実施率（レベル2以上）が50%に達した結果に貢献したと思います。また、支援先が会員や組織を持たないSSFの強力な支持団体としてビジョンの実現を推進してくれました。

3万人の市民ランナーが200万を超える沿道の応援の人々とエールを交わしながら走るNYマラソンやロンドンマラソン。3千のスイマーが海を埋めてゴールを目指すハワイやオーストラリアのオープンウォータースイミング。この鳥肌が立つような素晴らしいスポーツの光景や感動がどうして日本にないのか、無いのなら我々が実現するしかないと取り組んだのが「湘南オープンウォータースイミング」と「東京マラソン」です。第5回「東京マラソン」は応募者数30万人を超す巨大イベントとなり、8回を迎える「湘南オープンウォータースイミング」はすでに湘南の夏の風物

詩となっています。

こう記して行くと20年、順風満帆だったようですが、一つひとつの場面では挫折、憤りの連続でした。挫折がSSFを強くしたと思います。でも、楽しかった。支援いただいた皆さま、置いてきぼりにしないで一緒に乗り越えてくれたスタッフの皆さまにお礼申し上げます。

過去は過去、過去は振り返らず前に進むこと、為さなければならないことは無限と言っていいでしょう。夢中で取り組んでいけば未来は我が物です。でも過程を楽しむことを忘れないでください。

# 事業の 歩み

THE 20 YEAR HISTORY OF SASAKAWA SPORTS FOUNDATION

1991-2010

# SSF スポーツエイド

実施期間：1991(平成3)年度～2010(平成22)年度

運動やスポーツに参加し親しむ機会を提供することで、スポーツ愛好者層の拡大と様々なスポーツが多くの人たちに親しまれていくことを願い、主に地域で草の根的に活動するスポーツ団体が行うスポーツの大会、教室・講習会、国際交流事業を対象に、1991年、財団設立の年から実施された助成制度が、SSFスポーツエイドである。

「日本のスポーツを元気にしたい。」SSFスポーツエイドは、このテーマからスタートした。当時、スポーツ振興を目的とした助成には、「スポーツ振興基金助成金」をはじめ、(財)日本自転車振興会、(財)日本体育協会、(財)日本オリンピック委員会などの制度があったが、主に競技スポーツの普及、育成・強化を目的としており、対象はいずれも「法人格を有するスポーツ団体」としていた。

それに対してSSFスポーツエイドは、法人格の有無を問わず、大小さまざまな活動をサポートする制度として、他の助成制度との違いが際立っていた。

以降20年間にわたり、時代の流れとともに変化する地域のスポーツ環境と、スポーツ団体、スポーツに参加する人たちの多様なニーズに対応すべく、制度の充実を重ね運営してきた結果、延べ8,400事業もの地域スポーツ活動を元気にすることに貢献した。

## 草の根活動にフォーカスした助成制度

SSFスポーツエイドは、地域の草の根活動がより活発に行われ、より多くの人たちへ運動やスポーツに気軽に参加できる環境を提供するため、できるだけ多くのスポーツ団体に有効に活用される制度であることを常に心がけてきた。助成金を事業の実施前に交付する、いわゆる助成金前払い制もその表われである。

また当初は、スポーツ団体の活動スケジュールに柔軟に対応するために、年度を前期(4～9月)と後期(10～3月)に分けた2期制により運営していた。その後1995(平成7)年度からは、スポーツ団体が、年度のはじめに資金調達を含めた事業計画を作成することで、計画的な事業運営へと導くことも目的に、それまでの2期制から募集を事業実施前年度末の1回とする1期制へ制度を改めた。

スポーツエイドは、有識者によって構成された審査委員会で審査され採否が決定された。審査委員長は、井村正雄氏(日本財団)、大鋸順氏(電気通信大学教授)、青島健太氏(スポーツジャーナリスト)へと引き継がれた。

## スポーツ好きの子ども達を育てよう

子どもがスポーツに親しむ環境が悪化する中、子ども達は今後どういう形でスポーツに関わっていくのか、スポーツ好きの子どもを増やすにはどうしたらよいか問われていた。「スポーツ好きの子ども達を育てよう」を合言葉に、平成13年度から導入されたのが、小・中学生を対象にした「スポーツプログラム事業」である。

スポーツ団体が、その事業のために募集した30名程度の子ども達に、1年間を通して、シーズン制により複数のスポーツを、専門指導者の下で指導する新しいスポーツプログラムであった。週1回以上の定期練習に加え、体力テスト、栄養指導、夏期・冬期合宿を織り交ぜた、子ども達がスポーツが大好きになるような内容となっており、このプログラム事業を実施したいスポーツ団体を募集し、団体の特性、地域性に合わせた実施スポーツ種目や内容を盛り込んだ独自のプログラ

ムを求めた。2010(平成22)年度までの10年間で40事業が実施された。

また、プログラム事業のうちの合宿を切り取った形のキャンプ事業も同時に実施した。

## スポーツ団体の“自立”を促す助成金

スポーツエイドは、事業の自立、すなわち事業が自主運営できるようになることを一つの目標としている。この考え方をはっきりと打ち出したのは、2004(平成16)年度の募集からであった。助成金をより有効に活用してもらうためにはどうすればよいか検討した結果の表明である。スポーツエイドを、用具の購入、指導者の養成、広報の活発化などの初期投資的な部分で活用してもらうことに重点を置いた。3年から5年の間に、参加料の確保、支出の見直し等で事業の中身も充実させ、助成金が無くなった後も、その事業を継続して行えるようなサポートの方法がスポーツエイドのあるべき姿と考えている。「不足している予算の補填」ではなく、事業の「質の向上」「自主運営」につなげるための財源として制度を活用してもらいたいということを改めて強調した。

「事業の自立」は、その後もスポーツエイドを語る上で重要なキーワードとなっている。

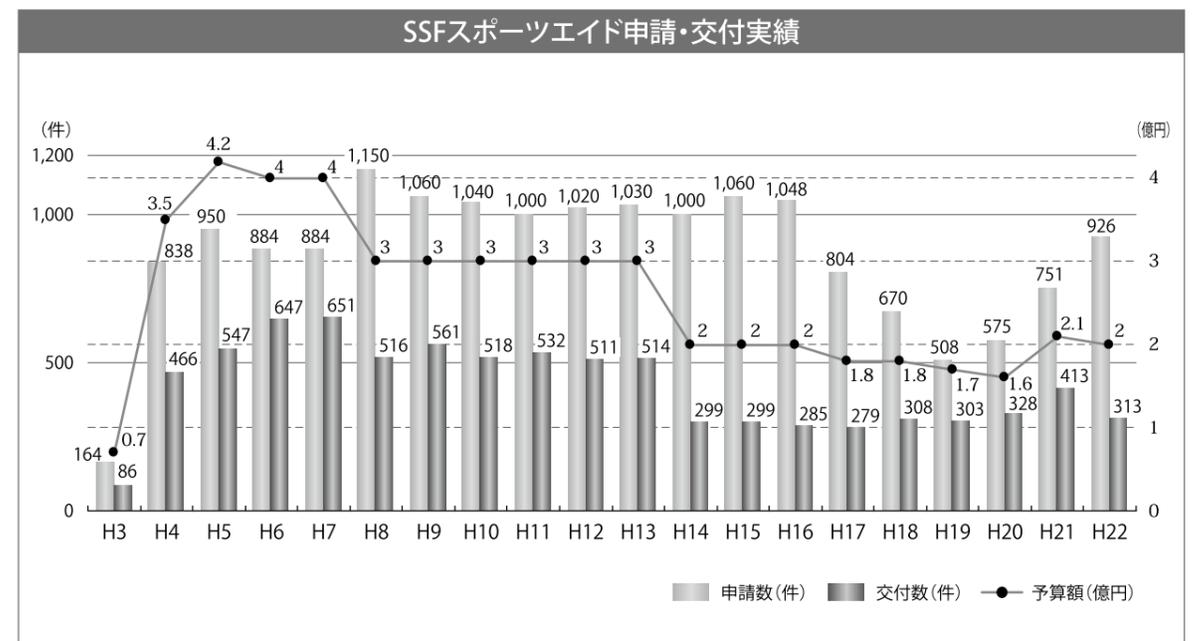
## 大幅な見直しによる制度の充実

時代の流れに合わせてスポーツに参加する人々のニーズも多様化し、地域では、スポーツを取り巻く環境が大きく変化してきた。それらに対応する助成制度として2007(平成19)年度、特殊性の高い水辺活動に特化した制度の新設を視野に入れた見直しを行った結果、『ウォータースポーツエイド』を新設した。

本制度のポイントは、参加者の安全性の確保や用具・備品整備経費、会場設営などの諸条件が、陸上種目と比較すると大きな違いがあるため、個々の種目特性に応じた基準を設定した点である。

わが国では、水辺活動に特化した助成制度が他に例を見ず、ウォータースポーツ活動の普及・振興に大きな期待が高まった。

ウォータースポーツエイドの新設により、陸上種目対応の「スポーツエイド」と、水辺活動対応の「ウォータースポーツエイド」という2つの制度となった。



2009(平成21)年度、地域スポーツ活動の普及・振興に一層の拍車が掛かることを期待して、スポーツエイドおよびウォータースポーツエイドの制度内容を大幅に改めることになった。

ポイントとしては、「子ども」と「地域」に影響のある事業に重点を置き、「次代を担う子ども達に、気軽に、そして楽しみながら運動やスポーツへ積極的に参加できる機会を提供するための助成」、「地域スポーツ団体の連携と、それを通じて実現される充実・自立した活動への発展、スポーツを通じた地域づくりとそれに関わる人づくりを促進するための助成」、そして、今までのSSFスポーツエイドではサポートを行っていなかった「スポーツ用具・備品の配備を行う助成」という三つの助成区分を設けたことにある。

これにより、「いま、地域のスポーツ活動には何が必要なのか」、「自分達の団体は地域に対して何をすべきか」について、スポーツ団体自身が考え実際に行動へと移す実践の機会を提供することになったと考えている。

SSFスポーツエイドは、スポーツ団体のニーズにできる限り対応し、より効果的な成果を導き出すための助成制度を目指し、幾多の制度の見直しを行ってきたが、制度の開始当初から一貫して変化していないことは、「地域スポーツの普及・振興と、地域スポーツ団体が活用しやすい助成制度であること」である。この方向性が揺るぎなく今日に至っていることは、SSFスポーツエイドを活用された多くのスポーツ団体関係者にも理解いただけることと考えている。

#### みなさんからのエール

### 武道 for all. 武道 for everyone.

松井 完太郎 さん 国際障害者武道協会 理事長

「SSFスポーツエイド」のすばらしさは、法人格を持つことが助成の条件となっていないところだった。任意団体の当協会も支援していただいた。

「SSFスポーツエイド事業」であるということで、私と学生達を中心に運営しているような協会も社会的信用を得ることができた。

「SSFスポーツエイド」にはサブタイトルがついていた。

Sport for all. Sport for everyone.

「スポーツ フォー オール」はよく言われる。みんなのスポーツ。

「スポーツ フォー エブリワン」が良い響きだった。それぞれのスポーツ。

「それぞれの」という表現に感銘を受けた。

障害者武道の活動を始めるに当たって、スウェーデンに調査に行った。本当に目が開かれる旅だった。当初は「身体障害者」武道協会の立ち上げを考えていたが、「障害者」武道協会になった。スウェーデンでの状況を表すのにぴったりだったのが、「みんなの武道、それぞれの武道」だった。笹川スポーツ財団にお願いして、「武道 for all. 武道 for everyone.」を使わせていただいた。快諾下さった事にも感謝している。

SSFスポーツエイドに育てられたことに責任を感じず。志を引き継がないといけない。

「みんなの武道、それぞれの武道」の実現に奔走しないといけない。恩返しを社会に対してしないといけない。(ブログより抜粋)

#### みなさんからのエール

### スポーツエイド

青島 健太 さん スポーツジャーナリスト(スポーツエイド審査委員長)

スポーツエイドのスタッフの方々には、大変お世話になりました。最後は選考委員長まで務めさせていただきましたが、委員になりたての頃は、みなさんが腰を抜かすようなことを言っていました(笑)。

「スポーツエイドなんて、考えてみたら大きなお世話ですよ。エイドに頼らなければできない活動なら最初からやらないほうがいい。そんなものに甘えてどうするんですか」

今思えば、SSFスタッフの日頃のご苦労も知らず、よくもそんなことを言ったな…と汗顔の思いです。

ただ、スポーツが誰の援助にも寄らず、自分たちの力で自立できることを目指すべきだ、という私見は変わっていません。そしてこの点については今もSSFと同じ思いを共有しているものと確信しています。SSFには、これからもスポーツの独立とそのあるべき姿を研究していただき、これを広くスポーツ界に報じていただきたいと思います。



### 地域での普及を目指して

風巻 陽子 さん 松戸市インラインスケート協会(MIA) 事務局

MIAではSSFスポーツエイドを受けいろいろな活動をしてきました。SSFスポーツエイドの趣旨は、スポーツクラブが自立するための資金援助です。ですから、同じ目的で次年度エイドを受けようとすると受理はされません。自立と程遠い結果を生むからです。

MIAの発展はSSFなしではありえませんでした。スタッフの私をはじめ何人かで、SSFの講演や勉強会に参加しました。地域スポーツの発展について意識を高めていこうと思ったからです。もとは選手強化しかなかった目的に、地域でインラインスケートというスポーツを拡大しようという、もうひとつの目的が加わったのはその頃からです。裾野を広げ、インラインスケートを当たり前スポーツとして認知させたいという思い…そのためにはスタッフの資質の向上と資金の確保が重要なポイントになりました。

SSF以外でも市体育協会からの補助金で国際スポーツ交流事業を行っていますが、次年度以降、この補助金がなくなったとしても、事業は継続していきます。なぜなら、私たちはインラインスケートに対する情熱があるからです。この情熱が一番大切です。全体がどこに向かっているかを再認識し、次世代につなげる活動を常に意識して行きたいと思っています。SSFから学んだ多くのことを、松戸という地域で生かし、更に、新しい展開につなげて行きたいと、強く感じました。すべての人が心からスポーツとして楽しむことができるインラインスケートの定着に向け一層の努力していきます。(ブログより抜粋)

# スポーツライフ調査

実施期間：1991（平成3）年度～現在

SSFの設立当時、1年間に1回でも運動・スポーツを行っている者は「スポーツ実施者」として報告されていることに疑問を持ち、わが国のスポーツ実施の現状をよりの確に把握する必要があると考え、独自の調査指標を開発した。その際、イギリス、オーストラリア、カナダ等の調査を参考にし、「実施頻度（回数）」「実施時間」「運動強度」の3つの観点からスポーツ実施率を把握する質問紙を作成した。その結果、量および質の両面からスポーツの実施状況を把握することができるようになり、さらに諸外国の調査結果との比較も可能にし、SSFを代表する調査となった。

1992年から隔年で20歳以上の成人を対象とした全国調査を実施している。加えて2002年には青少年のスポーツライフの実態を把握するために、10～19歳を対象にした全国調査を実施し、その後4年毎に調査を行っている。さらに、10代で明らかになった運動・スポーツ実施の二極化がいつから始まっているのかを検証するために、2010年には4～9歳を対象とした全国調査を実施した。

## スポーツライフ調査の概要

この調査は、故 池田勝氏（大阪体育大学教授）を委員長とする7名の委員からなる調査研究委員会により、調査の設計、調査項目の検討、調査票の作成、全国実査後の分析、報告書の作成等を行った。2000（平成12）年以降、委員長は海老原修氏（横浜国立大学教授）に引き継がれ現在に至っている。

設立当初から、本調査の結果はSSFが進むべき方向、なすべき事業の指針となっている。また、わが国のスポーツの現状を把握する全国調査の一つとして、行政、研究者、マスコミ等でも、その結果は広く引用・活用されており、参議院文教委員会での答弁資料、中学校の保健体育の教科書、文部科学省発行の競技スポーツに関するパンフレット等にも引用された。

## スポーツライフ調査の概要

	4～9歳の スポーツライフに 関する調査	10代の スポーツライフに 関する調査	スポーツライフに 関する調査
調査時期	該当年 6月中旬～7月上旬		該当年 5月下旬～6月下旬
調査年	4年毎→2010年刊行から隔年		隔年
対象	4～9歳の 全国1,650人	10～19歳の 全国3,000人	20歳以上 全国2,000人
地点数	市部 155地点 郡部 20地点 計 175地点	市部 199地点 郡部 21地点 計 210地点	
抽出方法	層化二段無作為抽出法		割当法
調査方法	訪問留置法による質問紙調査 (4～9歳は個別聴取法*併用)		
有効回収 (2010年の例)	1,196 (72.5%)	1,989 (66.3%)	2,000人
運動・スポーツの範囲	幼稚園・学校の休み時間の活動・部活動は含めるが、園・学校の授業や行事(マラソン大会等)は含めない。		学校の授業は除くが、学校や職場のクラブ活動は含む

※個別聴取法：回答者・保護者・調査員の三者面談による聞き取り法のこと。

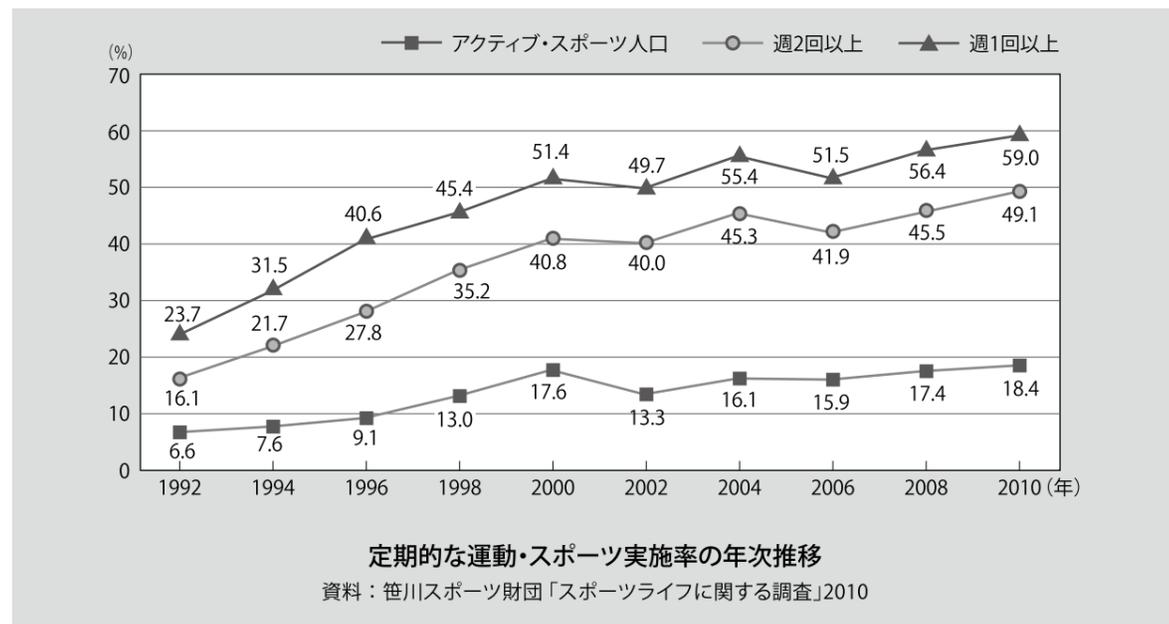
## スポーツライフ調査の変遷

年度	調査報告書名	特記事項
1990年 (平成2年)	全国スポーツ関連機関・団体リスト調査	文献調査で、わが国に「556種目」の運動・スポーツ種目の存在を把握
1991年 (平成3年)	全調査スポーツ1 スポーツライフに関する調査報告書	全国の15歳以上、2,000人を対象に実施。スポーツ・レクリエーションと明記して実施。
	全調査スポーツ2 スポーツ・レクリエーション団体実情調査報告書	全国のスポーツ・レクリエーション団体327団体の活動状況や課題をまとめる。
1992年 (平成4年)	スポーツライフ・データ1993 ～スポーツライフに関する調査報告書～	全国の20歳以上、2,000人を対象に実施。カナダ・キャンベルフィットネス調査(フィットネスカナダ 1988)等を参考に、「頻度・時間・強度」を把握する調査票を作成。「アクティブ・スポーツ人口」の条件を、アメリカ・スポーツ医学会(ACSM: American College of Sports Medicine)ガイドライン、厚生省の健康づくりのための運動所要量等を参考に設定。アクティブ・スポーツ人口:週2回以上、1回30分以上、運動強度「ややきつい」以上の運動・スポーツを行う人の割合
1994年 (平成6年)	スポーツライフ・データ1994 ～スポーツライフに関する調査報告書～	「スポーツボランティア」の項目を調査票に追加。
1996年 (平成8年)	スポーツライフ・データ1996 ～スポーツライフに関する調査報告書～	現調査票の問1・問2の形式を確立。以降、この内容で調査を継続実施。「マリンスポーツ」の認知・実施・実施希望を把握。
1998年 (平成10年)	スポーツライフ・データ1998 ～スポーツライフに関する調査報告書～	調査対象数を、これまでの2,000人から3,000人に変更。
2000年 (平成12年)	スポーツライフ・データ2000 ～スポーツライフに関する調査報告書～	アクティブ・スポーツ人口を4カ国、実施種目を5カ国と比較報告。週1回以上の実施率が51.4%と5割を超える。
2002年 (平成14年)	スポーツライフ・データ2002 ～スポーツライフに関する調査報告書～	「ウォーキング」「散歩(ぶらぶら歩き)」を分けて調査を実施。実態が明らかになる。
	青少年のスポーツライフ・データ2002 ～10代のスポーツライフに関する調査報告書～	全国の10歳代(10歳～19歳)、1,800人を対象に実施。10代の運動・スポーツ実施の二極化を確認。
2004年 (平成16年)	スポーツライフ・データ2004 ～スポーツライフに関する調査報告書～	「マリンスポーツ」の認知・実施・実施希望を再度調査。
2006年 (平成18年)	スポーツライフ・データ2006 ～スポーツライフに関する調査報告書～	シニア(50歳以上)のスポーツ実施の推移を報告。
	青少年のスポーツライフ・データ2006 ～10代のスポーツライフに関する調査報告書～	全国の10歳代(10歳～19歳)、2,500人を対象に実施。10代の運動・スポーツ実施の上昇を確認。
2008年 (平成20年)	スポーツライフ・データ2008 ～スポーツライフに関する調査報告書～	2005年4月1日の個人情報保護法の全面施行を受けて、住民基本台帳の閲覧が厳しくなり、抽出方法を層化二段無作為抽出法から割当法(標本数2,000)に変更する。
2010年 (平成22年)	スポーツライフ・データ2010 ～スポーツライフに関する調査報告書～	ヨーロッパ27カ国との国際比較を実施。「年収」の項目ををはじめ調査票に加える。
	青少年のスポーツライフ・データ2010 ～10代のスポーツライフに関する調査報告書～	全国の10歳代(10歳～19歳)、3,000人を対象に実施。10代の運動・スポーツ実施の二極化が進展。
	子どものスポーツライフ・データ2010 ～4～9歳のスポーツライフに関する調査報告書～	全国の4歳～9歳、1,650人を対象に実施。男女の「スポーツ格差」は8歳にはじまり、中学・高校進学時に加速することを確認。

## 調査結果の概要・引用事例

### 1. 成人の「スポーツライフ・データ—スポーツライフに関する調査報告書—」

1992年に始まる本調査は、2010年調査で10回目の実施となる。アクティブ・スポーツ人口をはじめとする運動・スポーツ実施率は着実に伸びていることがわかる。



### 2. 「青少年のスポーツライフ・データ—10代のスポーツライフに関する調査報告書—」

2009(平成21)年9月28日、コペンハーゲンで開催された、2016年五輪開催国決定会議の会場において、日本の招致委員会からの要望を受けて、本調査の「日本の青少年のオリンピック開催支持率」の結果を和文・英文のリーフレットにまとめて配布した。



### 3. 「子どものスポーツライフ・データ—4～9歳のスポーツライフに関する調査報告書—」

10代で明らかになっていた運動・スポーツ実施の二極化が、8歳にはじまり、中学・高校進学時に加速することが確認できた。特に男子より女子に顕著であることもわかった。



## 今後のスポーツライフ調査

今後は、2011年度に「10代および4～9歳」調査、2012年度は「成人」調査と、それぞれ隔年で調査を実施する予定である。「実施頻度(回数)」「実施時間」「運動強度」の3つの観点からスポーツ実施率を把握する方法は変えずに、現状の質問紙調査にWeb調査を組み合わせるなど、調査の継続性を維持しつつ、工夫を重ねていく予定である。



## みなさんからのエール

### スポーツライフ調査

海老原 修 さん 横浜国立大学教育人間科学部教授(SSFスポーツライフ調査委員会委員長)

文部科学省「スポーツ立国戦略～すべての人々のスポーツ機会の確保、安全・公正にスポーツを行うことのできる環境の整備～」は「新たなスポーツ文化の確立」を宣言し、5つの重点戦略をあげる(2010年8月26日)。戦略の第1となる「ライフステージに応じたスポーツ機会の創造」とはすなわち、どれくらいの人々がスポーツを行っているのか、が指標となろう。だからこそ、具体的な数値目標として、できるかぎり早期に、成人の週1回以上のスポーツ実施率が3人に2人(65パーセント程度)、成人の週3回以上のスポーツ実施率が3人に1人(30パーセント程度)となることと説明する。最新の「スポーツライフデータ2010」(2010年12月21日)では59.0%である。全国規模のスポーツ人口に関して、成人調査では内閣府「体力・スポーツに関する世論調査」を、子ども調査では文部科学省「体力・運動能力調査報告書」を逆算して活用した。また平成20年度からは文部科学省「全国体力・運動能力、運動習慣等調査」が加わった。しかし、これらの生データを容易に処理できる状況にはない。笹川スポーツ財団「スポーツライフ調査」の特徴はデータの使用申請にある。申請すれば生データを入手し、自由自在に独自の視点で分析できる。多くの研究者や行政担当者などが申請する。このスタンスは不変である。ライフステージに応じたスポーツ機会を的確に把握する。だから「スポーツライフ調査」はその対象を、成人にとどまらず、10代を経て、4歳から9歳の子どもへと範囲を広げた。古い手帳を紐解くと1992年2月14日(金)13:00～15:00に「SSF会議」が初出する。折しも19年前のバレンタインデーである。

(2011年2月14日記す)

# スポーツ・フォア・オール 国際フェア

実施期間：1992(平成4)年度～2002(平成14)年度

本事業の始まりは1991年9月、日本ではほとんど知られていない4種目のスポーツを紹介するために開催した「ニュースポーツ国際フェア」がきっかけである。

翌1992年、これを発展・拡大させた形で、第1回「スポーツ・フォア・オール 国際フェア」として、国営昭和記念公園での開催となった。

日常的にスポーツを行っている人は勿論のこと、普段スポーツに親しんでいない人達にも、様々なスポーツを紹介し体験してもらうことで、スポーツを身近なものとして感じてもらえるようなイベントを目指したものである。

参加者は、好きな種目に参加する毎に、スタンプをもらえる「チャレンジラリー」に挑戦し、決められた種目数をクリアすると達成賞や抽選券を獲得する仕組みでスポーツを楽しめるようになっていた。

1998年からは、熱気球の体験乗船会等、さらに盛り沢山のプログラムが展開された。

まさにスポーツ・フォア・オールを具現化したこのフェアは、2002年までの11年の間に19回開催された。



## スポーツを身近なものに

いつでも、どこでも、だれにでも楽しめるスポーツを身近なものにしようと、15種目のスポーツを一堂に会したスポーツ・フォア・オール国際フェア'92を1992(平成4)年秋に、東京と大阪で開催した。SSFと、SSFの呼び掛けで集まった15スポーツ団体の中からの数団体で実行委員会(実行委員長：池田勝氏【日本クロッケー協会】、実行副委員長：師岡文男氏【日本フライングディスク協会】)を組織して、企画・運営を行った。

東京大会は、10月24日、25日に立川市の国営昭和記念公園で開催した。記念すべき初日は、あいにくの雨天により途中で中止となったが、2日目の日曜日は、秋晴れに恵まれ絶好のスポーツ日和となり、延べ約11,000人もの人々が様々なスポーツを楽しんだ。

大阪大会は、大阪城公園太陽の広場で11月1日、一日のみの開催となったが、延べで約7,400人の来場者が思い思いにスポーツを楽しんだ。

この年には、5種目の世界チャンピオンを招聘した。クロッケー、ホースシューズ、フライングディスク、ロウンボウルス、ダブルダッチの各種目で、チャンピオンたちは、それぞれ妙技を披露した。さらにチャンピオンが自ら手ほどきもしてくれることで大いに来場者の人気を集めた。この5種目以外にも、一輪車、インディアカ、カバディ、コーフボール、シャフルボード、セパ・タクロー、チュックボール、トランポビクス、フットバッグ、ペタンクの10種目も紹介された。



マスメディアにも取り上げられ大きな反響を呼んだことや、当日行ったアンケートでも「これらの種目を行う機会を作って欲しい」との意見が多く、色々なスポーツを身近なものに普及させるために、継続して開催することとなった。

## フェアの発展、拡大

新しいスポーツ、日本ではまだ知られていないスポーツの普及の場を提供するという、SSFの呼びかけに応じ、このフェアの趣旨に賛同するスポーツ団体は、翌年の1993(平成5)年には32種目におよび、その後、最終回の2002(平成14)年まで30種目以上が参画する賑わいを見せた。

第2回目以降は、スポーツをやってみようという気分を盛り上げるために毎回キャッチフレーズを作りPRに努めた。

プログラムとして、メインのスポーツ体験講習会、チャレンジラリーをはじめ、体力測定、マウンテンバイクなどが当たる抽選会(チャレンジラリー達成者対象)、ステージでの各種目デモンストレーションを実施した。1998(平成10)年から神宮外苑では熱気球体験乗船会も行われ、満員札止めの盛況となった。

すべてのプログラムは、種目の普及を目的としているため無料とした。

- 世界チャンピオンの招聘は4年間にわたり行われた。
- 1992年/5種目 クロッケー、ホースシューズ、フライングディスク、ロウンボウルス、ダブルダッチ
  - 1993年/5種目 クロッケー、ホースシューズ、フライングディスク、ロウンボウルス、キャスティング
  - 1994年/7種目 クロッケー、ホースシューズ、ダブルダッチ、キャスティング、クリケツ

## スポーツ・フォア・オール 国際フェア 開催の歴史

年度	開催期間	場所	来場者	種目数	キャッチフレーズ	備考
1992年	10/24～10/25	東京 国営昭和記念公園	11,000	15	—	—
	11/1	大阪 大阪城公園	7,400			
1993年	10/16～10/17	東京 国営昭和記念公園	3,000	32	世界のスポーツ、世界一の技を体験しよう	講習会 チャレンジラリー チャリティウォーク
	10/23～10/24	兵庫 県立明石公園	15,000			
1994年	10/1～10/2	東京 辰巳の森海浜公園	12,000	32	キャッホー! 世界にはいろんなスポーツがあるんだな。	講習会 チャレンジラリー 体力測定
	10/8～10/9	東京 国営昭和記念公園	28,000			
1995年	10/14～10/15	千葉 浦安市総合運動公園	23,000	37	生きて、愛して、もっとスポーツ	
	10/21～10/22	兵庫 西宮市武庫川女子大学総合グラウンド	18,000			
1997年	10/4～10/5	秋田 県立中央公園	1,000	35	生きて、愛して、もっとスポーツ	11/22は雨天中止
	11/22～11/23	東京 神宮外苑軟式野球場	20,000			
1998年	10/3～10/4	秋田 八橋運動公園	15,000	41	お腹いっぱいスポーツ	熱気球体験乗船会 スタート
	11/21～11/23	東京 神宮外苑軟式野球場	41,000			
1999年	11/20～11/21	東京 神宮外苑軟式野球場	30,000	34	スポーツ食べ放題!	
	8/21～8/22	秋田 八橋運動公園	9,000			
2000年	11/25～11/26	東京 神宮外苑軟式野球場	65,000	36	秋・お腹いっぱいスポーツを!	
	7/22～7/23	秋田 県立中央公園	12,000			
2001年	11/23～11/24	東京 神宮外苑軟式野球場	90,000	33	旬のスポーツよりどりみどり!	ワールドゲームズ 秋田大会
	8/25～8/26	秋田 ワールドゲームズプラザ	2,500			
2002年	11/23～11/24	東京 神宮外苑軟式野球場	47,000	31	旬のスポーツよりどりみどり!	

ト、フットバッグ、ユニバーサルホッケー

この年からチャンピオンの招聘およびアテンドを各団体に任せたことで、7種目のチャンピオンを招聘することが出来た。それにより団体と招聘者の交流が深まった。(ダブルダッチは受け皿の団体がないので、SSFが招聘した。)

1995年/8種目 アームレスリング、スポールボール、セパ・タクロー、フットバッグ、フライングディスク、ブーメラン、ホースシューズ、ユニホッケー

東京での開催は国営昭和記念公園から始まったが、より多くの人に楽しんでもらえるイベントとして1997(平成9)年からは明治神宮外苑軟式野球場で「いちよう祭り」の季節に合わせての開催となった。またその他の地域としては、関西の大阪城公園での開催に始まり、途中、阪神淡路大震災後の復興支援の意味もこめて兵庫県西宮市での開催を経て、1997年からはワールドゲームズ大会に向けた秋田県での開催となった。

## 大きな成果

千葉県浦安市では、従来から市主催の市民運動会を毎例年開催していたが、内容のマンネリ化、出場者の固定化等で行き詰っていた。SSFからの強力な勧めにより1995(平成7)年にフェアを開催したところ、市民および市長双方から高い評価を受け、翌年度からは予算化して市独自のスポーツフェアとして開催、毎年5

万人が参加する人気イベントに成長して現在に至っている。

また、スポーツ・フォア・オール国際フェアは、一般の人々に自分に合ったスポーツを見つけてもらえるイベントであると同時に、このフェアを通じて、参加スポーツ団体の連携が図られるようになったのは大いなる収穫であった。

## スポーツ・フォア・オール 国際フェアとは

フェアの運営に関わった方から以下の言葉を得ている。スポーツ・フォア・オール国際フェアを的確に表す言葉として紹介したい。

「『こんなスポーツイベントなんて』と言う人に私はいつもこう尋ね返します。30数種目以上の新しい個性と色合いのあるスポーツのイベントが他にありますか。子どもから大人まで、どのゲームでも好きな時に好きなだけ楽しめる、しかも一流の熟達者から直接教われるスポーツイベントが他にありますか。ステージ以外、統一的な進行の規制がなく、各種目団体の裁量で時間まで目一杯参加者が楽しめるスポーツイベントは他にありますか。国際フェアは、スポーツ大会にありがちな「ねばならないもの」を極力排したネバーランド。ここでは、子どもは大人として、大人は子どもの気持ちで楽しむことが唯一のルールです。このような楽しみ方も体験し、新しいライフスタイルをつくる場でもあるのです、と。」



## みなさんからのエール

### SSFの看板事業「スポーツ・フォア・オール 国際フェア」

師岡 文男 さん 上智大学教授(日本フライングディスク協会 会長)

1992年～2002年まで11年間毎年開催されたこのイベントは、「スポーツエイド」「チャレンジデー」と共に笹川スポーツ財団(SSF)の看板事業であり、SSFが推進するSport for Allを具体的な形として展開する実験場であった。私は、このイベントの実行委員長・副実行委員長・委員・参加種目団体の立場で毎回参加させていただいた。

普段あまりスポーツを実践していない多種多様な方々にどうやって短時間でスポーツの面白さを感じていただくかを考え、試す場として貴重であった。同時に、世界チャンピオンや創始者を海外から招へいすることにより、ニュースポーツと呼ばれて手軽さだけが強調されてきた種目にも歴史と、競技としての奥深さがあり、競技スポーツ・生涯スポーツ・レクリエーションスポーツなどと種目を分類することがナンセンスであることを示したことは、日本人の狭いスポーツ観を変えるのに大いに役立った。また、SSFと種目団体が一緒に汗をかける素晴らしい企画であった。

### スポーツ・フォア・オール 国際フェア

内藤 拓也 さん 元職員

スポーツ参加の選択肢を増やすというコンセプトのもとに行われた参加型スポーツイベントとしては先駆的なイベントであったという印象を持っています。

聞きなれないスポーツを取り入れ、その世界チャンピオンを海外から招いて一般の方々に紹介をするといった点でも“センセーショナル”ではなかったでしょうか。この国際フェアをきっかけに、全国の数個所ではロウンボウルスやクロッケー専用の常設コートが設置され、クラブも設立されたというエピソードも覚えています。一定の成果を取めたのではなかったでしょうか。

多様なスポーツが普及され、多くの人々が自分のスタイルでスポーツを楽しむようになった今、トップを極めることへのチャレンジ精神をもってスポーツに取り組み、多くの人々に感動を与えて、その真摯な姿に憧れて自発的にスポーツに参加する人々を増やすようなムーブメントが今は求められているのかもしれませんが。1990年代に国際フェアでセンセーショナルなムーブメントを起こしたように、今度は人々に感動を与えるスポーツの分野で、SSFがセンセーショナルなプロジェクトに取り組む時期にあるのではないのでしょうか。

# チャレンジデー

実施期間：1993(平成5)年度～現在

チャレンジデーとは、毎年5月の最終水曜日に人口規模がほぼ同じ自治体間で、午前0時から午後9時までの間に、15分以上継続して運動やスポーツを行った住民の『参加率(%)』を競い合う住民総参加型のスポーツイベントである。人口カテゴリー別に参加率に応じて金、銀、銅のメダル認定証が授与されるが、対戦に敗れた場合は、対戦相手の自治体の旗を庁舎のメインホールに1週間掲揚し健闘を称えるというユニークなルールがある。チャレンジデーは1983年にカナダで発祥し、その後、世界に広がる国際的なビッグスポーツイベントに成長した。わが国では、SSFが中心となり1993年から普及活動を行い、2011年で実施19回を数える。近年、150万人もの老若男女が参加する、まさにSSFが提唱する“Sport for Everyone”を象徴、具現化するスポーツ振興プログラムとして成熟しつつある。

今後も、人々の健康づくりや、元気で活力あるまちづくり、更なる“Sport for Everyone”の実現を目指したイベントとして更なる広がりを期待したい。



## カナダ生まれのチャレンジデー

チャレンジデーは、カナダ連邦政府と民間団体の共同出資で設立されたスポーツ振興機関パティシパクション(ParticipACTION)(本部：カナダ・トロント)により、1983年、サスカチュワン州サスカトゥーン市を中心とした50市町村で初めて実施された。その後、カナダ全土に広がり、約600の自治体を実施し、国民の5人に1人が参加するカナダ最大の市民スポーツイベントに成長した。

また、1990年代からは国際的にも広がり、1992年、TAFISA(国際スポーツ・フォア・オール協議会、本部：ドイツ)が世界各国のコミュニティを結ぶスポーツ交流プログラムとして、『国際チャレンジデー(以下、「World Challenge Day」)』を主催するようになった。現在では、40ヶ国3,300地域(TAFISA発表)が実施している。

## 日本での初実施は島根県・加茂町

SSFはカナダでのチャレンジデーの実施効果に着目し、パティシパクションから運営方法を学び、1993年に日本に導入、普及活動を始めた。同年、地域スポーツの振興に積極的な島根県・加茂町(現：雲南市)に話を持ちかけ、日本で初めてチャレンジデーが実施された。この年、日本では加茂町の実施で対戦相手がいなかったことから、国際チャレンジデー(当時はInternational Challenge Dayという名称)に参加、ドイツ・ノルデンハムと対戦し、71.7%の参加率で初参加を金メダル獲得と勝利で飾った。

一方、北海道・名寄市も1988年から1993年まで海外姉妹都市であるカナダ・リンゼイ市と「名寄・リンゼイ・ヘルシーコンペ」という独自の交流イベントを実施していたが、SSFが日本のチャレンジデーを運営するようになった翌年の1994年から参加し、現在も実施している。

## 300カ所以上で実施

1993年、歴史の幕が開いた日本のチャレンジデー。2010年までの18年間で全国300以上の自治体や地域が実施し、参加者は延べ11,995,738名[参考：平均参

## メダル授与基準表

カテゴリー	人口規模(人)	金メダル	銀メダル	銅メダル
1	4,999以下	65%以上	40~65%未満	40%未満
2	5,000~9,999	61%以上	35~61%未満	35%未満
3	10,000~29,999	55%以上	31~55%未満	31%未満
4	30,000~69,999	50%以上	29~50%未満	29%未満
5	70,000~249,999	50%以上	25~50%未満	25%未満
6	250,000以上	40%以上	20~40%未満	20%未満

## わが国のチャレンジデーの推移

実施日	実施数	人口(人)	参加者(人)	平均参加率(%)
1993年5月26日	1(1町)	6,873	4,925	71.7
1994年5月25日	7(2市5町)	151,305	70,279	46.4
1995年5月31日	12(2市10町)	173,155	94,329	54.5
1996年5月29日	16(4市12町)	318,301	186,638	58.6
1997年5月28日	26(2市24町)	355,461	249,392	70.2
1998年5月27日	35(6市27町2村)	626,573	395,558	63.1
1999年5月26日	45(7市32町6村)	759,919	449,724	59.2
2000年5月31日	58(9市37町12村)	880,394	565,043	64.2
2001年5月30日	62(11市37町14村)	1,030,512	657,441	63.8
2002年5月29日	82(14市49町19村)	1,421,384	873,543	61.5
2003年5月28日	91(14市57町19村1地域)	1,534,518	946,019	61.6
2004年5月26日	97(14市62町16村5地域)	1,548,279	983,737	63.5
2005年5月25日	77(12市36町7村22地域)	1,399,173	792,748	56.7
2006年5月31日	93(17市28町7村41地域)	2,203,299	957,011	43.4
2007年5月30日	92(16市25町5村46地域)	1,693,383	871,816	51.5
2008年5月28日	109(23市28町6村52地域)	2,336,853	1,212,450	51.9
2009年5月27日	102(25市28町5村44地域)	2,382,899	1,259,719	52.9
2010年5月26日	117(32市25町6村54地域)	2,729,399	1,425,366	52.2

## Winners of World Challenge Day Cup 2010 (TAFISA)

Category	City	Country	Population	Participants	%
1 < 20,000	Kita-Hiroshima town in Toyohira area	Japan	4,098	2,539	62.0
2 20,000 - 100,000	Veliko Tarnovo	Bulgaria	65,000	27,950	43.0
3 100,000 - 250,000	Cienfuegos	Cuba	167,552	117,189	69.94
4 250,000 - 1million	Varna	Bulgaria	377,000	241,280	64.0
5 > 1 million	Monterrey	Mexico	1,133,814	536,638	47.33

TAFISA が運営するWorld Challenge Dayには、毎年日本からも幾つかの自治体が参加しているが、2010年には広島県・北広島町が参加カテゴリー 1で最も高い参加率(62.0%)を獲得し、“World Challenge Day Cup\*”を受賞した。

\* World Challenge Day Cup・・・2010年度から新設された表彰制度

加率58.2%]にのぼる。当初は、年間100カ所での実施と、100万人以上の参加を数値的な目標としてきたが、それが達成できたのは16回目の2008年(109カ所、1,212,450名)であった。途中、2000年以降に加速した市町村合併(平成の大合併)という社会的な動きもあり、2003年からはチャレンジデーの実施対象を自治体以外に、地域(原則旧町村)単位も対象とした。特に2005年からは地域での実施が急増した。(SSFでは、地域単位からスタートした取り組みを数年間で自治体(市町村)単位での実施に移行できるよう地域及び当該地域の自治体と対策を講じている。)

一方、過去18年間で、最も人口が多い自治体は、兵庫県・姫路市で482,000名(2006年)、反対に最も少ない自治体は、岡山県・新庄村で1,000名(2006年～2010年)である。

また、最も実施回数が多い自治体は、北海道・名寄市の17回(1994年～2010年)である。島根県・旧加茂町は1993年から合併前の2004年まで12回の実施であるが、合併して雲南市となった後も、引き続き、旧加茂町地域でも実施されており、合算すると18回(18年)連続の“フル出場”である。同様に、岩手県・葛巻町、水沢市(現:奥州市)、秋田県・琴丘町(現:三種町)、島根県・木次町(現:雲南市)も15年以上実施しており、まさに日本のチャレンジデーを牽引してきたパイオニアである。

### 多彩なイベントプログラム

実施自治体や地域では、毎年、工夫を凝らした多彩なイベントプログラムが行われている。午前0時に始まる「ナイトウォーク大会(島根県・加茂町)」や、「21時間マラソンソフトボール大会(岐阜県・揖斐川町)」、対戦自治体(島根県・三刀屋町)までを往復する「21時間耐久200kmリレーマラソン大会(鳥取県・北条町)」、地域内の造船所の社員数百人が一斉参加する「エアロビクス教室(香川県・多度津町)」、市内のうどん屋をウォーキングして食べ歩く「讃岐うどん耐久レース(香川県・丸亀市)」、商店街の道路を通行止めにして行う「大綱引き大会(秋田県・琴丘町)」や地元の踊り大会(各所)、南部鉄器を使った体操教室(岩手県・水沢市)等々、地域の特色や名産品、名所

などを活用した話題性に富んだユニークなプログラムが実施されるのもチャレンジデーの魅力のひとつである。海外では空港の一部を開放し、ジャンボ機と綱引きを行うようなイベントなどを行う自治体もある。その他、同名市町村同士の対戦などもあり、1996年には茨城県・鹿嶋市と佐賀県・鹿島市の「カシマ対決」が広く話題を呼び、新聞やテレビに大きく取り上げられ、大いに盛り上がったことは印象深く残っている。

### 日本の「スポーツ・デー」を目指して

近年、チャレンジデーが、それぞれの地域に深く溶け込んでいる状況が見受けられる。例えば、大分県・中津市、山梨県・甲斐市、広島県・北広島町、京都府・綾部市などでは、行政のスポーツ振興計画にチャレンジデーが盛り込まれている。徳島県・三好市では毎月第4水曜日をチャレンジデーの日に設定しており、大分県・豊後高田市では毎年10月の1カ月間、自治会対抗形式で毎日チャレンジデーを実施するなど、チャレンジデーの日常化を図る自治体が増えてきている。

SSFでは、このチャレンジデーを日本の全国民を対象とした、国を挙げた「スポーツ・デー」となることを目指し、更なる事業の普及・振興にあたる。チャレンジデーを通じて、より多くの自治体や団体と連携・協働し、そこで得た情報や成果を、日本のスポーツ政策に提言や企画提案という形で活かしていくような循環や仕組みをつくっていきたい。



### みなさんからのエール

#### 「チャレンジデーとともに18年」

土江 博昭 さん 島根県雲南市 教育長

1993年、5月26日、水曜日、ドイツのノルデンハムを対戦相手に日本の「チャレンジデー」は始まりました。その歴史的担当者が私でした。

旧加茂町の教育長に就任と同時に、本番まで20日余りしかない中、「大変だけど、とにかく頑張ろう!」を合言葉にスタッフ一同、準備を進めていきました。

笹川スポーツ財団から送られたビデオを見て、「これは大変なスポーツイベントだ! ラジオ体操で終わるようなものではない。」「目玉になるものを。」ということで15分間の「ラーメン延ばしリレー」や「80馬力のトラクターとの綱引き」などメイン行事に、町民が一体となって取り組みました。

当日は、爽やかな五月晴れとなり、参加率71.7%という素晴らしい結果となりました。

初参加から18年経った今、あの当時に懐かしく思い出しております。

今や日本の代表的な市民スポーツイベントに成長した「チャレンジデー」は、まさにスポーツ文化創造の立役者だと思います。

「継続は力なり」と申しますが、笹川スポーツ財団のこれまでのご指導、ご支援に心から感謝申し上げます、併せて創立20周年をお祝い申し上げます。

#### チャレンジデーの思い出

久野 洋美 さん 元職員

私は笹川スポーツ財団立ち上げ当初から10年間にわたりお世話になりました。

当時のSSFは職員も若く、活気に溢れ、華やかな財団でした。

総務課に所属していた私のチャレンジデーの仕事は、SSF事務局で集計作業を行うことでした。毎回、集計は夜10時から始まるので、いつも帰宅は深夜となりましたが、上がってくる集計データに一喜一憂しながら上司、同僚と夜遅くまで行った作業は、全く苦にならない雰囲気がありました。

また、私が視察に行った、元ロッテ監督の金田正一さんを招いてのチャレンジデーは、小さな町を想像以上に盛り上げ、町の一大イベントになったことを今でも覚えています。

この20年を節目とし、今後は、創立初期からの精神を大切にしながら『常に新しい事を実践するSSF!』更なる発展と繁栄を心から期待しています。

**CHALLENGEDAY**

# SSF 世界スポーツフォト コンテスト

実施期間：1994(平成6)年度～2004(平成16)年度

1枚の写真が…人をスポーツへ導く。瞬間を切り取ったスポーツ写真を見ることでスポーツに対する関心を高め、スポーツ実施の動機づけとする間接的なスポーツへのアプローチ。スポーツ写真をきっかけとしてスポーツ・フォア・オールの下辺の拡大を図ること、さらには、スポーツ写真を文化として定着させることを目的に、1994年(平成6年)のプレ写真展に引き続き世界スポーツフォトコンテストを実施した。'95年、'96年、'98年、'00年、'02年、'04年とほぼ隔年で6回実施したが、高額賞金も話題となり、各回50カ国以上から1万点におよぶ応募があり、稀に見る裾野の広いグローバルなスポーツフォトコンテストとなった。



## フォトコンテスト開催記念スポーツ写真展

第1回コンテスト実施に先立ち、1994(平成6)年4月に、写真誕生から現在まで150年間に残された優れたスポーツ写真を一堂に集めた、フォトコンテスト開催記念スポーツ写真展「One Moment in Time」を渋谷・西武百貨店で開催した。12日間の期間中に約5000名が来場する大盛況で、訪れた人々は照明の中に浮かび上がる160点の作品の数々に見入っていた。

写真展の初日には、高円宮憲仁親王殿下、同妃殿下をお招きしてオープニングレセプションが開催された。ご夫妻は、写真展企画委員の篠山紀信氏らの説明で、熱心に観賞された後、パーティーに臨まれた。殿下は、この写真展が日本や世界に対して大きな影響を与えると思うこと、1枚の写真ではあるが、その影には何千枚もの写真やカメラマンの努力があり、その熱意が伝わってくること、などをお話しになられた。

## SSF世界スポーツフォトコンテスト

記念写真展を機に、世界へ向けてスポーツに関するあらゆる写真を公募したところ、世界の一流カメラマンから町のアマチュアカメラマンまで、躍動する肉体の美、ヒューマニズムあふれる感動のシーン、ゲームの決定的瞬間、思わず笑みがこぼれるほのぼのとした作品等、55カ国から7,000点あまりの応募があった。

写真家、スポーツ関係者、文化人、海外スポーツ関係者等で構成された審査員による厳選な審査の結果、入賞、入選作品が決定した。

世界スポーツフォトコンテスト'95の表彰式および写真展は、1995(平成7)年8月、東京・恵比寿の東京都写真美術館(表彰式はウエスティンホテル東京)で開催された。

栄えあるゴールドプライズには、イギリスのChris Cole氏の「Double Exposure」が選ばれ、賞金1000万円が授与された。

ゴールドプライズ以外にも協賛企業賞が複数授与された。キヤノン株式会社、日本アムウェイ株式会社、富士フイルム株式会社、在京スポーツ6紙会、アディダスジャパン株式会社、夕刊フジ、各社にはあらためて

心よりお礼を申し上げたい。

その後、1996(平成8)年から2004(平成16)年まで隔年で5回、合わせて6回のフォトコンテストが開催された。第2回から第6回までは、すべて世界50カ国以上から12,000点以上の作品が応募され、賞金額の高さもさることながら、質の高さでも類を見ない世界最高峰のスポーツフォトコンテストとしての評価が確立した。

また、後援団体として、外務省、文部科学省、国際オリンピック委員会(IOC)、国連教育科学文化機関(UNESCO)、日本オリンピック委員会(JOC)、日本体育協会、日本ユニセフ協会、東京都歴史文化財団、日本財団、その他が名を連ねたことも特筆すべきことであった。



## 歴代審査員一覧

氏名	職業(役職)
伊東 順二	美術評論家
岡野 俊一郎	国際オリンピック委員会 委員
岸本 健	スポーツ写真家
篠山 紀信	写真家
長友 啓典	アートディレクター
山際 淳司	作家
Detlef Schlottmann	Sport Life 誌アートディレクター(ドイツ)
Rich Clarkson	全米報道写真家協会 会長
伊達 公子	プロテニスプレーヤー
柴田 倫世	元日本テレビ放送網 アナウンサー
西木 正明	作家
鈴木 文彦	株式会社 文藝春秋「Number」 局長
井上 進一郎	株式会社 文藝春秋「Number」 局長
平井 元	キヤノン株式会社 広報宣伝部 本部長
平澤 哲男	キヤノン株式会社 広報宣伝部長
岩城 淳子	日本アムウェイ株式会社 広報部長
Christophe Bezu	アディダス ジャパン株式会社 代表取締役社長
Rob Langstaff	アディダス ジャパン株式会社 代表取締役社長
金子 隆一	東京都写真美術館 専門調査員
神保 京子	東京都写真美術館 専門調査員
鈴木 清昭	サンケイスポーツ 写真部長
三原 立美	スポーツニッポン 写真部長
高野 憲作	日刊スポーツ 写真部長
樋口 景章	報知新聞 写真部長
上松 忠夫	デイリースポーツ 写真部長
鈴木 博和	スポーツニッポン 写真部長
武久 成之	夕刊フジ 編集局
山崎 康生	富士写真フイルム株式会社 プロフェッショナル写真部

※敬称略・順不同

## SSF世界スポーツフォトコンテスト開催一覧

実施年	名称	ゴールドプライズ受賞者	賞金
1994(平成6年度)	SSF世界スポーツフォトコンテスト開催記念写真展	—	—
1995(平成7年度)	SSF世界スポーツフォトコンテスト'95	Chris Cole(イギリス)	1,000万円
1996(平成8年度)	SSF世界スポーツフォトコンテスト'96	Lui Kit Wong(アメリカ)	1,000万円
1998(平成10年度)	SSF世界スポーツフォトコンテスト'98	Phil Hillyard(オーストラリア)	1,000万円
2000(平成12年度)	SSF世界スポーツフォトコンテスト2000	Kathia Maria Tamanaha(ブラジル)	500万円
2002(平成14年度)	SSF世界スポーツフォトコンテスト2002	Craig Golding(オーストラリア)	500万円
2004(平成16年度)	SSF世界スポーツフォトコンテスト2004	Lene Esthave(デンマーク)	500万円

## 入賞・入選作品展 「One Moment in Time」

入賞・入選作品展「One Moment in Time」は、コンテスト実施の都度、東京都内を皮切りに北海道、横浜、大阪、兵庫、福岡、スペイン・バルセロナ、オーストラリア・キャンベラなど国内外で巡回展を開催し、万国共通語である「スポーツ」の魅力を多くの人々へ伝えてきた。

写真展開催地を広く募集したことで、全国各地から希望が集まり、一時期は1年中どこかで、この写真展が開催されているという状況だった。

2002年度のコンテストから新たな試みとして、写真展の映像展示化と写真集をDVDで制作するというスポーツ写真の新たな形を創造して、スポーツ写真界に

新風を吹き込んだことも記録にとどめたい。

スポーツフォトコンテストは、スポーツ写真を文化として定着することにとどまらず、国際オリンピック委員会をはじめとする世界各国のスポーツ関連組織やスポーツ写真業界に大きなインパクトを与えるとともに、世界各国に笹川スポーツ財団の存在をアピールした事業であった。

### みなさんからのエール

## SSF世界スポーツフォトコンテスト

長友 啓典 さん アートディレクター

このフォトコンテストの原点は、平成4年に発行した雑誌「ALL」です。

当時、スポーツ写真といえば、わが国では新聞に載る報道写真という程度しか一般の人には認識されていなかったと思います。

「ALL」を制作する中で、なにげない1枚のスポーツフォトから人間が見えてくることを実感しました。

様々なスポーツシーンを通して人間を捉えた写真を世界に求めることが、間接的にスポーツ・フォア・オールにつながるのではないかと、そんなことがこのフォトコンテストのきっかけになったと思います。

実際に世界中から応募された写真は、報道では見落とされていた視点が多く、素晴らしいものでした。一人ぼつんとベンチに座っているプレーヤーの写真からは、その人間の人生まで垣間見えるようでした。また、競技者もいない、観客もいない広場に置かれたサッカーゴールのみの写真は、新鮮な感動を与えてくれました。

コンセプト、賞金額どれをとっても、世界に稀なるコンペティションであり、スポーツ写真に対する考え方を根底から変えたことは大いに評価できるでしょう。

企画から審査まで関わった者として、このスポーツフォトコンテストが終わったことはとても残念なことです。また、やってほしいなあ。



## 世界スポーツフォトコンテストの審査

篠山 紀信 さん 写真家

審査は、毎回難航を極めた。当然である。人間のあらゆる身体的動作を含み、かつすべての写真表現がゆるされるという状況下での、一瞬を切り取ったスポーツ写真の数々を審査すること、言い換えれば、人間が行う森羅万象を見渡して賞を授けるという仕事は、まさに異種格闘技戦の審判のごとき心境であった。さらには、審査員それぞれの個性のぶつかり合いも華々しいものだった。

時代は移り、今やカメラはデジタル化して、特に、スポーツ写真は飛躍的な進化を遂げた。新しい表現のスポーツ写真の可能性は、見ることが出来なかった視覚の世界へわれわれを導いてくれる。

しかし、一枚一枚の写真の裏側や片隅から、人間が生きていることの可笑しさや苦しさ、喜怒&哀楽、道徳&観念などを人々に伝えることの根本は何ら変わっていない。

新しいスタイルのスポーツフォトコンテストを再開してもらいたいものだ。

## スポーツは世界の言葉

岸本 健 さん フォト・キシモト代表

東京オリンピック金メダリストのアメリカのスイマーに当時の写真をお送りしたところ「1枚の写真は1000の文字に匹敵します。この写真はたくさんの良き思い出を蘇らせてくれました。感謝します。」という過分の御礼の手紙を頂いた。

SSF世界スポーツフォトコンテストには、世界中の老若男女から本当に様々な作品が送られて来た。「人生いろいろ」ではないが、写真もいろいろ、文章もいろいろ、表現方法も。コンテストなので、賞は金賞、特別賞、SSF賞…と絞られたが、参加した人の側から見ればそれぞれが自慢の作品であり、固有の文化、民族を表現したものであったのだろう。まさに“写心(真)の祭り、オリンピック”であったということが出来る。

このコンテストが一つの区切りをつけて終了してからもう5年になる。その間、撮影手段も含め全てがデジタル化し、誰でもが手軽に、身近に活写する時代を迎えた。もし、今またあのコンテストを実施したら、応募写真の作風も大きく変わってくることだろう。われわれプロフェッショナルも含め、カメラ機材の急速な進歩に戸惑う部分もあるが、要は今生きている人たちの感性がいかん表現できているかで全てが決まってくる。

プロアマ関係なく、自らがエントリーフィーを出し参加するといった地球規模のフォトコンテストが出来れば、と夢は膨らむ。冒頭の例にもあるように一人の人に感動を与えることもあるが、写真はやはり多くの人に見てもらってこそ価値があると思うからだ。

# 国際スポーツ機関との連携

実施期間：1991（平成3）年度～現在

わが国のスポーツの実情を海外へ発信するとともに、諸外国のスポーツの現状・問題点やスポーツ政策の動向など、様々なスポーツ情報の収集を行っている。

国際会議では、スポーツ白書英訳版やスポーツライフ・データの調査結果等、SSFの事業成果およびわが国のスポーツの現状を報告し、SSFの国際的な認知度を高めている。また、世界各国のスポーツの現状や問題点等に関する理解を深めている。

さらに、有益な資料やデータを集積するため、海外スポーツ主要機関との連携を強化し、定期的な情報交換を行っている。集積した情報を調査報告としてまとめ、ウェブサイトを通して国内外へ広く発信し、スポーツ・フォー・エブリワン推進の一翼を担っている。

## 国際機関との関係構築

SSFの国際交流事業は、前身の日本スポーツ機構時代に端を発する。1990（平成2）年、スポーツ・フォー・オール先進国の米国とカナダを訪問し、各国のスポーツ行政、振興組織の体制を視察することにより、生涯スポーツの振興策を図る基礎資料とした。訪問先は、アメリカの米国大統領体カスポーツ審議会（President's Council on Physical Fitness and Sports：略称PCPFS、現在は、President's Council on Fitness, Sports & Nutrition）、全米公園レクリエーション協会、全米健康フィットネスセンター、アメリカ・スポーツ医学協会、全米フィットネス・スポーツ研究所、インディアナ州立大学、インディアナ・スポーツ・コーポレーション、ニューヨークシティー・スポーツ・コミッション、カナダのフィットネス・カナダ、国立フィットネス・ライフスタイル研究所、スポーツ情報センター、パティシパクション等であった。

翌1991（平成3）年にSSFが設立され、国際交流はより活発となっていく。

国際会議への出席をはじめ、フランス、西ドイツ、イギリス、スペイン、ベルギー等のスポーツ振興組織を次々と訪問して各国の現状についての理解を深めると共に各振興組織との連携を深めていった。

1992（平成4）年6月には、PCPFSと、スポーツ・フォー・オール推進についての業務提携を取り交わしている。また、少し下って1995（平成7）年3月には、ヨーロッパにおける生涯スポーツ情報提供機関のクリアリングハウス（ベルギー・ブリュッセル）とも業務提携を交わしている。



## TAFISAへの加盟

1991（平成3）年6月、フランス・ポルドーで開催された、国際トリム・フィットネス生涯スポーツ協議会（略称TAFISA）（事務局ドイツ・ボン）が主催する第12回国際トリム・フィットネス生涯スポーツ会議へ参加したSSFは、1カ国1団体の加盟という条件を満たすために、文部省からの要請もあり、SSF、日本体育協会、日本レクリエーション協会、健康体づくり事業財団の4団体で、日本トリム・フィットネス生涯スポーツ協議会（略称TAFISA-JAPAN）を1992（平成4）年に組織して、TAFISAに加盟した。

1993（平成5）年にはTAFISA総会および第13回国際トリム・フィットネス生涯スポーツ会議をTAFISA-JAPANとして千葉県幕張メッセで共催した。

TAFISAは、国際会議のほか国際チャレンジデーの推進、世界伝統スポーツ・ゲームズフェスティバルの開催などを行っている。

## ASFAA会長就任、事務局運営

アジアニア・スポーツ・フォー・オール協会（略称ASFAA）は、1991（平成3）年4月にソウル（韓国）で開



催されたアジア・オセアニア地域スポーツ・フォー・オール国際会議で正式に発足した。TAFISAのアジア・オセアニア地区のリージョナル組織として位置づけられ、1992（平成4）年の第2回総会でSSF坪内嘉雄会長が会長に就任し、事務局も2000（平成12）年3月までSSF内に設置されていた。坪内会長が退任後、藤本常務理事がASFAA副会長に就任、さらに藤本氏退任ののちは、山口泰雄氏が理事に就任し現在に至っている。

## 国際会議への出席

IOC主催の世界スポーツ・フォー・オール・コンGRESSへは、第7回目の1998（平成10）年のバルセロナ会議以来毎回（隔年開催）出席して、情報の収集、SSFの認知度を高めるための発表等を行ってきた。

国際スポーツ情報協会（IASI）の年次会議へは、1994（平成6）年以来、継続して出席し情報の交換を図ってきた。同協会理事は故 池田勝氏、山口泰雄氏、長ヶ原誠氏へと引き継がれたが、2009（平成21）年3月、キャンベラ（オーストラリア）で開催された第13回IASIコンGRESSに合わせて開かれた総会で、各国理事の呼びかけにより、個別の情報分野に特化した研究を深めることで合意し、発展的解消を迎えた。



## TAFISA Almanac 2001/2011

TAFISA会長(当時)である故 ユルゲン・パルム氏からの強い要望により、TAFISA全加盟団体に対しての調査が実現した。それまで、地域を限定した類書は存在したが、世界規模での調査が実施されたのは初めてのことであった。調査はTAFISA加盟団体の協力のもと、調査票の回収に困難を極めたものの、65カ国79団体から回答を得た。TAFISA Almanac「TAFISA World 2001」は、各国のスポーツ担当省庁、関連法規、国家予算といったスポーツに関する全般的な情報と、加盟団体の組織体制が把握できる貴重な資料となっている。

TAFISA World 2001を刊行してから10年後の2011(平成23)年、TAFISA自身の組織拡大が進んだことに後押しされ、TAFISA Almanac 最新版「TAFISA Active World 2011」を刊行した。調査項目は前回を踏襲しつつ精査し、各国のスポーツ振興状況がより詳細にわたり把握できるものとなり、非常に価値の高い資料として世界のスポーツ振興に貢献している。

その他の海外レポート関係としては、Sport for All

in Japan、ASFAA(1997/2000)、TAFISA Volunteer Survey等を発行している。

また、諸外国のレポートを翻訳し、わが国のスポーツ・フォー・オール推進の一助としている。

## スポーツ政策調査

スポーツ専門シンクタンクを目指すSSFにおいて、これまで以上に諸外国のスポーツ振興情報や、スポーツ関連組織とのつながりの質と量の向上が必要となっている。

2007(平成19)年からは、国際会議への出席に加え、スポーツ先進諸国のスポーツ政策に関する調査をスタートさせた。これまで、オーストラリア、英国、アメリカを対象に、各国の子どものスポーツ参加奨励施策を中心に進めている。また、この事業は、SSFが将来的に諸外国のスポーツ情報のわが国におけるプラットフォームとなるべく、各関係組織との人脈構築・強化を目的としている。



## みなさんからのエール

### SSF国際交流の20年の歩み

山口 泰雄 さん 神戸大学大学院人間発達環境学研究科教授

笹川スポーツ財団との出会いは、財団設立年の1991年秋、国営昭和記念公園におけるニュースポーツ国際フェアでした。池田勝先生から、藤本さんを紹介されました。以来、特に、国際交流事業でお付き合いさせていただきました。

最初の事業は、ドイツのボンで開催された1992年第1回世界伝統スポーツ・ゲームズフェスティバルで、TAFISAが主催しました。日本から派遣した流鏝馬の鎧が武器として、フランクフルト税関でストップしてしまいました。しかし、藤本さんが日本大使館を動かし、事なきを得ました。

海外へは、国際交流担当の島ちゃん、古坂さん、植田さん、加藤さん、吉田さん、玉澤さんに大変お世話になりました。残念だったのは植田さんが突然亡くなったことです。語学力が優秀でTAFISA Global Almanacを完成させ、これから論文の書き方を学び、飛躍しようとしていた矢先でした。

これまでTAFISA、ASFAA、IASIを中心に国際交流が進められましたが、今後、シンクタンクとして成長するためには、海外のスポーツ団体や政府関係者とのヒューマン・ネットワークが特に重要です。また、役員として国内だけでなく国際会議や学会で発表し、日本からのスポーツ情報の発信を大いに期待しています。

### 国際交流事業

島 美紀 さん 元職員

SSFには設立当初から11年間お世話になり、主にスポーツに関する国際交流の仕事に携わらせていただきました。当時PCPFS会長のアーノルド・シュワルツェネガー氏を設立式典に招く、という交渉をいきなり任せられる緊張のスタートでした。その後、TAFISAやASFAAの活動に大いに関わり、総会等の運営の他、ドイツで行われた伝統スポーツフェスティバルには、日本の流鏝馬を披露するために、馬選びのために先発隊で現地入りしたこともありました。携わった仕事は全て、誰もやったことがないイベントをする、今できる最高のものを準備する、結びつきのない関係を作り上げるということだったなあ、と感じています。当時の常務理事の藤本さんはいつも理想が高く、毎度無理難題を突きつけられましたが、結果的には常に常識の枠を越えて仕事のおもしろさを実感させてもらうことばかりだったと今は感謝しています。SSFは、これからも常に新しいことを、本物を追求して欲しいと思っています。

# スポーツ白書

実施期間：1995（平成7）年度～現在

スポーツ振興に関する国内外のデータや先進事例を集成した「スポーツ白書」は、1996年の刊行以来、5年に1度のサイクルでデータをリニューアルしている。2011年2月には、第4版となる「スポーツ白書～スポーツが目指すべき未来～」が発行された。

内容は、以下のデータ編10章に加え、発行時期の旬なテーマに沿ったトピックス、巻頭特集、提言などを掲載している。

- データ編 (10章)
1. 日本人のスポーツ参加動向
  2. スポーツ施設
  3. スポーツクラブ
  4. スポーツの人的資源
  5. 子どものスポーツ
  6. プロスポーツと企業スポーツ
  7. スポーツの発展と資金
  8. スポーツに関する情報とメディア
  9. スポーツイベントと振興プログラム
  10. スポーツの行政機構と施策

スポーツ振興機関や行政機関の担当者、体育・スポーツの研究者や学生、ならびにスポーツを報じる各種メディア関係者のための必携資料として、幅広く活用されている。



## わが国初のスポーツ白書

「スポーツライフに関する調査」の立ち上げと発展にも尽力された故 池田勝氏（大阪体育大学教授）を中心とした学識者やスポーツ関係者の指導・協力を得て、それまでわが国になかったスポーツの白書として、「スポーツ白書～2001年のスポーツ・フォア・オールに向けて～」を1996（平成8）年に刊行した。政府が出す従来の白書と同様に、スポーツに関する各種データや最新情報を集約するとともに、スポーツ界への提言となるメッセージを巻頭特集や巻末に掲載しているのが特長である。これらのメッセージは、その後のSSFの活動方針や事業内容に反映されてきた。

## スポーツ界の変化とともに進化する白書

スポーツ白書はこれまで、右記のとおり5年周期で4回刊行されている。（頒布部数は2011年3月現在）

スポーツ白書の構成や執筆内容は、学識者とSSF役員で構成される編集委員会で決められる。第3版以降は、章ごとの第一人者に委員を委嘱し、委員が中心となって章に盛り込む内容や執筆者を選定している。当初は生涯スポーツに関するデータや事例に重点が置かれていたが、スポーツ振興の全体像へのアプローチから、プロスポーツや競技力向上に関する内容も盛り込まれるようになってきた。

スポーツ白書の最大の特長は、スポーツ界に散在する「ファクト」を集約、整理して掲載していることである。国によるスポーツや運動に関する統計だけでも、文部科学省、内閣府、総務省、経済産業省、厚生労働省などにまたがって存在しており、スポーツが多岐にわたる領域に関係していることがわかる。21世紀に入り、スポーツを取り巻く環境の変化のスピードが速くなっていることから、スポーツ白書のニーズは今後さらに高まることが予想される。

### 初版

スポーツ白書  
～2001年のスポーツ・フォア・オールに向けて～

- 1996（平成8）年8月発行
- 累計発行部数4,600部  
（うち有料頒布部数3,300部）



### 第3版

スポーツ白書  
～スポーツの新たな価値の発見～

- 2006（平成18）年3月発行
- 累計発行部数5,100部  
（うち有料頒布部数3,250部）



### 第2版

スポーツ白書  
～スポーツ・フォー・オールから  
スポーツ・フォー・エブリワンへ～

- 2001（平成13）年3月発行
- 累計発行部数4,300部  
（うち有料頒布部数3,110部）



### 第4版

スポーツ白書  
～スポーツが目指すべき未来～

- 2011（平成23）年2月発行
- 初版発行部数1,000部
- 増刷（3月）1,000部



## みなさんからのエール

### スポーツ白書

間野 義之 さん 早稲田大学スポーツ科学学術院教授（スポーツ白書編集委員）

「スポーツ白書」というネーミングは1994年の蒸し暑い夏の夜に生まれたと記憶している。初代編集委員長であった故 池田勝先生を中心に、編集委員とSSFのスタッフが都内で行った合宿の夜であった。出版目的、想定読者、コンセプト、目次構成、図表、レイアウト、執筆者、版のサイズ、印刷部数、宣伝、販売などありとあらゆる事を、本気で話し合った。

そこには、まだ駆け出しだった私でも自由に意見を言える環境があり、これまでに世の中に無かった新しい価値を創り出すために、みんなが夢中だった。この20年間で4回目の出版を終えた今も、陳腐化せずに初版と同じように作られているのは、とても嬉しい事である。

しかし、活版印刷の発明以来の情報革命が急速に進むなか、いつまでもこれまでと同様に進む訳にはいかないだろう。少子高齢化や経済成長の鈍化など我が国のスポーツを取り巻く環境にも様々な変化が起きてきている。

スポーツ白書の役割が、社会に問題を提示し、解決の道筋をつけて行くのであれば、これからのスポーツを熱く語る事が出来る、若くて優秀な人たちの出番が必要であろう。

# 財団広報

実施期間：1991（平成3）年度～現在

SSFは設立以来、一貫してスポーツ・フォア・オール（後にスポーツ・フォー・エブリワン）の実現を目指して事業を実施してきたが、設立して、まず始めに行ったことは、笹川スポーツ財団という組織の存在を知ってもらうための活動であった。何を目的として存在しているのかをまず知ってもらうこと、さらに正しく理解してもらうことが重要で、そのために必要な情報を発信し続けてきた。スポーツの素晴らしさ、楽しさを人々にさまざまな方法で伝えていく、その姿勢は現在でも何ら変わっていない。



## 知名度ゼロからの出発

設立初年度の1991（平成3）年度は、財団紹介ビデオと財団概要パンフレット2種類（公式概要、写真図表入り）を作成した。

1992（平成4）年度からは、全職員が地域ごとに手分けして全国の都道府県教育委員会等を訪問し、財団紹介およびスポーツエイドを中心とした事業紹介を行った。

また、文部省等が主催する生涯スポーツコンベンションではPRブースを設置して、財団の紹介、実施事業のPRに務めた。

文部省主催の生涯スポーツ担当係長会議や生涯スポーツ推進市町村担当者会議、さらにB&G地域海洋センター責任者連絡会議へ出向き、複数の事業の説明を通してSSFをPRした。

その当時の制作物として、パンフレット、ビデオ以外に、スポーツ・フォア・オール推進ポスター 5種類、スポーツ・フォア・オール普及グッズ（バンダナ、ポスティング等）を作成し配布した。

## 雑誌 sports for ALL

1992（平成4）年1月、雑誌sports for ALL Vol.0を発行した。

その中で、スポーツすることの楽しさ、喜び、心の持ち方などをわかりやすく表現した「スポーツ・フォア・オール宣言」を発表した。

- (1) スポーツは、人類がもらった宝ものなんだ。
- (2) なによりもエンジョイを大切にす。
- (3) 誰にでも、夢中になれるスポーツがある。
- (4) スポーツはカラダの栄養だ。
- (5) 勝つことを覚える。負けることを覚える。

これらは、今でもまったく色あせない内容となっている。

引き続き、同年6月には、篠山紀信氏が20数年にわたり撮り続けて来たスポーツ選手のスポーツする瞬間を切り取った「篠山紀信・ニッポンスポーツ大鑑」をメインとしたVol.2を発行した。書評で高い評価を得たが、雑誌sports for ALLは諸般の事情で2号をもって終了した。

## 新聞～ウェブサイトへ

「面白くてためになるニュース」を目指してsports for ALL NEWSを1993春号（Vol.1）から2001.3月号（Vol.41）まで8年間にわたり発行した。

紙面では、SSFの事業紹介、海外のスポーツ事情、中央官庁のスポーツ振興政策、スポーツ団体の活動等を掲載した。発行部数は、Vol.1～4までが各号6,000部だったが、徐々に数を増し、Vol.30～35時には各号13,000部と、当初の倍以上の発行部数となった。スポーツ・フォア・ネットワーク会員、各種スポーツ団体、地方自治体のスポーツ行政担当者、学識経験者、新聞社、通信社、関係省庁の関係者等へ幅広く配付した。

1996（平成8）年には、公式ウェブサイトを開設して、スポーツ・フォア・オールニュースと合わせて財団概要、活動の一部などの情報提供を開始した。

2001（平成13）年には、既設の笹川スポーツ財団ウェブサイトとは別に、『スポーツ・フォー・エブリワン・ネットワーク（sfen）』を開設し、スポーツ種目情報、自治体とスポーツに関する情報などの提供を開始した。様々な視点からのスポーツに関する問題提起や、各部門の研究者、著名人が鋭い視点でスポーツを読み解くコラムなどをタイムリーに公開した。

中でも、200種目以上のスポーツのルールや歴史を紹介したスポーツ辞典は、常にアクセスランクの上位に位置する人気コーナーである。

2009年には、公式ウェブサイトとsfenの両サイトを合併し、SSFホームページをリニューアルオープンして現在に至っている。



リニューアル後は、トップページの「スポーツエイド」「チャレンジデー」「リサーチ」「書籍」「国際情報」を通してSSFの周知に努めると同時に、スポーツを考えるウェブマガジンsfenで、「日本のスポーツ政策を考える」「あなたにとってスポーツの価値とは？」などの特別企画ページを公開している。

また、2003年からメールマガジンを発行している。加入者数は、当初の108人から8年後の2011年2月には、5,799人に増加した。

## 記者発表

主に東京運動記者クラブ（通称：体協記者クラブ）（東京・原宿 岸記念体育会館内）において、スポーツエイド、スポーツライフ調査、チャレンジデー、SSF紹介等を目的とした記者発表を実施している。合わせて記者クラブ加盟の新聞社、通信社の運動部長、キャップを訪問して情報の提供、収集を行っている。

また、世界スポーツフォトコンテスト作品募集などの国際的な事業の実施の際には、東京・有楽町の外国人特派員協会でも記者発表を行った。

## その他

21世紀に入ってからは、IOC主催の世界スポーツ・フォー・オール・コンGRESSでのSSFの事業成果発表を始め、国際的なスポーツ・フォー・オール・シンポジウムで日本の現状についての発表等を行ってきた。

また、国内の学会では、機会のあるごとにSSFの事業成果を発表している。



# 湘南オープンウォータースイミング

実施期間：2004(平成16)年度～2008(平成20)年度

SSFが行ったスポーツ・ライフ調査では、わが国はウォータースポーツ関連種目の普及が遅れているという結果が出ており、それを改善すべく、関連するスポーツ団体等による懇談会を実施するなど普及に関する協議を行っていた。

SSF小野清子会長から「大きなイベントを皆で協力して開催し、それを多くの人に見てもらってはどうか」との提案もあり、当時、日本ではあまり馴染みがなかった海のマラソンと呼ばれる「オープンウォータースイミング」大会を関連スポーツ団体との連携により開催することとなった。2004(平成16)年8月に第1回大会を開催し、2008(平成20)年まで5回開催した。



## 難産の末開催

オープンウォータースイミング開催へ向けての道のりは平坦ではなかった。多くの人々に見てもらうことも考慮して、盛夏の旧盆の時期に湘南海岸での開催を計画し、関係者との折衝に入った。

行政(文部科学省、国土交通省、海上保安庁、神奈川県、逗子市、鎌倉市、藤沢市他)、警察、消防、地元商工組合、海の家、漁業協同組合など多種多様な関係者や関係団体等との折衝や調整は困難を極めた。担当部署では連日の時間外労働と徹夜による不眠不休の状況が続き、海というフィールドでの事業の厳しさをあらためて思い知らされた。

記念すべき第1回大会は2004(平成16)年8月14日(土)、15日(日)に開催した。荒天により残念ながら15日の10kmの部は中止となった。実施に先立ち参加者説明や参加登録を8月13日、14日に鎌倉体育館で行ったが、盛夏に空調設備のない体育館での開催は問題が多く、翌年以降は、交通至便で空調設備のある藤沢市民会館や藤沢市秩父宮体育館に会場が変更となった。

## 安全確保のための改良

レースの運営面では、スタートとゴールの人数確認を記録計測用チップと手動カウンターによる方法に加えて、スタート地点に敷いた格子シートによる人数把握により正確性を高めるなど、回を重ねるごとに改良された。海上ではカヌーやライフセーバーを配置、さらに大型ヨットを停泊させることで参加泳者を見る目を増やし、海上無線機の増備や水上バイクによるレスキュー体制の構築など、安全面の配慮に最重点を置いた。

実施内容とコース取りについても、スタート地点の砂浜の立地条件やコース上の安全面等の配慮から見直しを重ね、2007(平成19)年に、10km、2.5kmのオープンウォータースイミングと集団泳の「江の島スイムツアー(約0.8km)」の3種目実施態勢をスタンダードとして一応の完成を見た。

水温、気温、風など気象状況に左右されやすい事業であったが、第2回目以降は天候にも恵まれ、無事故で事業を終了することができた。当初あった利害関係者との摩擦も回を重ねるごとに円滑になったのは、本

事業の目的が理解され受け入れられた結果であると確信している。

また、関連事業として2005(平成17)年と2006(平成18)年には材木座海岸で、カヌー、ウィンドサーフィン、ボディボード、ビーチバレー、小型ヨットなどの体験イベント「マリンスポーツフェア」を行政や地元関係団体等の協力を得て開催し、地元ははじめ多くの人々にウォータースポーツの良さを知ってもらう機会となった。

## 参加者の自己責任

自然と海をステージとした同様の事業は諸外国でも

行われており、安全面への配慮はもちろんのこと、参加者に自己責任の意識が徹底されている。本事業では、これにない参加者の責任と義務について参加者の意識の向上に努めた。日本では事故等問題があった場合、とかく主催者責任のみを問われることが多いが、スポーツ大会への参加者の自己責任について一石を投じることができたのではないかと自負している。

湘南オープンウォータースイミングは2009(平成21)年度から地元のNPO法人「湘南マリナーズ」に引き継がれ開催されており、湘南の夏の風物詩として定着しつつある。

## 実施種目と出場者数の推移

(人)

開催年	1.5km	2.5km サーフィンパドル	2.5km フィン	2.5km OWS	3.0km	5.0km	6.0km	10.0km	10.0km リレー	江の島 スイムツアー	合計
2004年	345	—	—	—	380	234	—	中止	中止	—	959
2005年	—	9	55	601	—	—	423	214	—	282	1,584
2006年	—	—	79	584	—	—	573	232	—	289	1,757
2007年	—	—	110	1,004	—	—	—	335	—	502	1,951
2008年	—	—	108	903	—	—	—	345	—	570	1,926

## みなさんからのエール

### 湘南オープンウォータースイミング

加藤 道夫 さん 湘南オープンウォータースイミング 実行委員長

笹川スポーツ財団(SSF)設立20周年に際し、湘南オープンウォータースイミング(SOWS)関係者を代表して、衷心よりお祝い申し上げます。

今年8回目を迎えるSOWSですが、規模的に世界的な大会でありつづけているのは、第1回大会からの大会助成とともに、SSF職員の並々ならぬご支援とご協力の賜です。この場をお借りして、改めてお礼申し上げます。

過去のSOWSにおいて、毎回悲喜こもごものドラマがありました。そうした中で、富士山と江ノ島に向けて大海原を泳ぎきる1Way方式の10kmと2.5km、そして体験型の0.8kmスイムを継続できたのは、関係者のチームワークと献身的な協力があったからこそで、関わってきた者の一人として誇りに思います。

湘南の海の仲間たちが力を合わせているからこそ継続できるSOWS。このような例は稀有であり、今後の湘南チャリティーマラソンの開催や渚の交番の設置に引き継がれると確信しています。

SSFのさらなる発展を祈念しつつ、公私を問わず、湘南の海の活動を見守り頂ければ幸いです。

# 東京マラソン

## 神宮外苑ロードレース～ 東京シティロードレース

実施期間：1996(平成8)年度～2008(平成20)年度

今や日本を代表する市民マラソンに成長した「東京マラソン」、その実現に向けてSSFが活動し始めたのは1996(平成8)年からである。きっかけとなったのは、その1年前の1995年12月、日本財団の会長に就任した曾野綾子氏の就任会見での、「車いすの障害者と健常者が同時に走るマラソン大会を実施したい。一般の人が走っているところを車いすのランナーが追い抜いていく、盲人のランナーがすぐ早く走る姿、それを皆さんに見て頂きたい。そういうことを知ることで普通の感覚が生まれてくるのですから。」との発言であった。

ここからSSFが「マラソン」(ロードレース)イベントに関わることになったが、曾野会長の発言から、神宮外苑ロードレース、東京シティロードレースを経て東京マラソンの実現までには、11年あまりの歳月を要することとなった。

## 神宮外苑ロードレース～ 東京シティロードレース

第1回目の試みとして、1996(平成8)年12月5日、障害の有無に関わらず誰でも走れる10kmレース「第1回神宮外苑ロードレース(東京ふれあいマラソン)」を、SSFを含む実行委員会の主催で実施した。一般参加者2,111名、車いすランナー41名、盲人ランナー32名が、国立競技場をスタート・ゴールとする神宮外苑の1周2kmの周回コースを5周するコースで開催されたが、SSFが提案した車いすの部への健常者の参加、仮装ランナーの参加を認めるなどの提案は通らず、誰もが楽しく走ることができる「ファンラン」を実現することは出来なかった。

翌1997(平成9)年の第2回大会からは、一般の部、車いすの部に加えて知的障害者の部門を新設した。第4回大会(1999年)以降は、参加者数が3,000名を超え、従来の神宮外苑周回コースの3ウェーブ方式では、これ以上ランナー数を増やすことは困難となった。参加者数を増やすためには、神宮外苑の外へ出て公道を走るコースの実現が不可欠であるとの結論に至り、それへ向けた活動を開始した。警視庁から公道使用の許可を得るために2000(平成12)年11月には「道路をスポーツに開放しよう」というテーマでセミナーを開催し、さらに「夢のコースを実現しよう」というチラシを作り、キャンペーンを展開した。

その甲斐あって、道路開放の第一歩として2002(平成14)年5月19日、日比谷公園をスタートとし国立競技場をゴールとする片道10kmの「第1回東京シティロードレース」の開催が現実となった。都心の公道を使用したコースにより、一般、車いす、視覚障害者、知的障害者、臓器移植者、各ランナーを合わせ、5,284名が参加し、初大会でありながら大きな盛り上がりを見せ、その後の市民ロードレースの新たな幕開けとなるイベントとなった。

## 東京マラソン

海外の主要な大都市においては、20～30年以上も前から、大勢のボランティアに支えられた、一般市民のためのフルマラソン大会が毎年開催されているが、国内においては、アスリートでなければ参加することができない大会のみであった。スポーツ・フォー・エブリワンを具現するために、市民のためのフルマラソンを日本でも開催したいという思いが募り、2003(平成15)年に海外の代表的都市型市民マラソンであるニューヨーク・シティマラソンや、ロンドンマラソンの運営体制等について現地調査を実施した。

翌2004(平成16)年には、ロンドンマラソン、ニューヨーク・シティマラソンの関係者を日本に招き、セミナー「都心における市民マラソンの実現を目指して～これがニューヨーク・シティマラソン」を開催し、都心

での3万人規模の市民マラソン実現のための啓発に努めた。

これら海外の市民マラソン大会の調査結果等を石原東京都知事に報告したこともあってか、その後、石原知事自身がニューヨーク・シティマラソンを視察し、トップランナーから一般ランナー、障害者ランナーまで、3万人が参加する「東京大都市マラソン」を2005年度中に開催したいと発表した。

その後、日本財団の曾野綾子会長が警視總監に開催の要請をするなど、都庁や日本陸上競技連盟等関係各所との調整の結果、2007(平成19)年2月、ついに第1回目の「東京マラソン」が開催されることとなった。

3万人規模の大会を実施するためには、1万人を超えるボランティアが必要であるということ海外のマラソン大会を調査した中で学び、SSFは2002(平成14)年からスポーツボランティア研修会、さらにそのボランティアをまとめる、スポーツボランティア・リーダー養成研修会を開催してきたが、東京マラソンの実現により、それらが実を結びこととなった。2007(平成19)年の第1回大会から2009(平成21)年の第3回大会までの3年間、SSFはボランティアの募集から運営まで、ボランティアに関するすべてを担うこととなり、その結果、日本におけるスポーツボランティア文化の創造・発展に大きな役割を果たすこととなった。



マラソン関連年表

実施年月	実施内容	参加者数(人)
1996年 12月	第1回 神宮外苑ロードレース	2,184 ※1
1997年 12月	第2回 神宮外苑ロードレース	2,922 ※1
1998年 12月	第3回 神宮外苑ロードレース	3,164 ※1
1999年 12月	第4回 神宮外苑ロードレース	3,608 ※1
2000年 12月	第5回 神宮外苑ロードレース	3,844 ※1
2002年 4月	ボランティア研修会	—
2002年 5月	第1回 東京シティロードレース	5,284 ※1
2005年 6月	ボランティアリーダー養成研修会 スタート	—
2007年 2月	東京マラソン2007	30,870 ※2
2008年 2月	東京マラソン2008	32,426 ※2
2009年 3月	東京マラソン2009	34,972 ※2

※1 登録者数 ※2 出走者数

## みなさんからのエール

## 東京マラソン

増田 明美 さん スポーツジャーナリスト

全国各地のスポーツイベントでボランティアの活動が広がりをみせています。その礎を作ったのが笹川スポーツ財団であることは言うまでもありません。2007年に始まった東京マラソンに向け、2005年にスポーツボランティア・リーダーの研修を開始。第1回東京マラソンを走った私の夫は「雨の中、沿道のボランティアの皆さん全員がチアリーダーのようだった」と花のような笑顔に感服し、第2回大会は環境ボランティアで参加。リーダーからの指示は的確で動き易かったそうです。ただ当日来なかった人や持ち場を離れる人もいて「ボランティアもいろいろ」と笑い話として語りました。

都市部でのリーダー育成は大変成果を上げていると思います。今後はリーダーの下、いかにボランティア参加者がその精神を共有し、足並みを揃えるかでしょう。またその波をどんどん地方へ広げていく必要があります。地方での研修会を増やすなど、これからも先頭で風を切って欲しいと思います。

## みなさんからのエール

## 神宮外苑ロードレース

佐藤 武士 さん 元職員

「藤本さんが、赤穂浪士の衣装を着て走ってさ。」

「……ええっ? マジっ?」

開催日が12月14日だから、討ち入り装束で走れという業務命令です。突飛な指示には慣れっこでしたが、よもやコスプレとは……。今でこそコスプレランナーはロードレースの花ですが、当時、おフザケはご法度だったのです。当然、実行委員会で反対されます。結局、当日の出番は一般ランナーがスタートした後。やおら出て行って「エイエイオー!」とやってから走り始め、競技場を出て人目のつかないところで消えるという行程。観客からすれば変な人たちの登場です。ああ、恥ずかしい。

ある意味つらい仕事でしたが、今思えば、わが国のスポーツに絡みつ়固定観念を打ち破ろうとする試みだったのでしょね。世の中を変えるのは、ヨソモノ、ワカモノ、バカモノなのだそうですが、当時のSSFは、まさにそういう存在でした。成人したSSFはナニモノになるんでしょうか。楽しみです。

## 東京マラソンボランティア

土田 一見 さん 北海道「チームじゃがポックル会」代表

東京マラソンボランティアには第2回大会以来毎年参加し、今年で4回目になりました。

何故、遠方から毎年参加するのかと問われたら、東京マラソンには「選手との一体感」「応援者との一体感」だけでなく、「主催者側との一体感」そして「ボランティア仲間との一体感」が強く感じられるからだと答えます。

この東京マラソンのボランティア組織をここまで作り上げてきたのは、SSFであることは誰も認めることです。そのSSFが築き上げた東京マラソンボランティアのノウハウを、北海道マラソンにおいても受け継ぐべく、SSFスポーツボランティア・リーダー養成研修会を計3回開催しました。その結果、北海道にもスポーツボランティアに関わる多くの人材が育ってきていると確信しています。

「支える」ことの素晴らしさを、ランナーや応援する人からだけではなく、主催する側からも伝わる、だから東京マラソンには多くのボランティアが集まってくるのだと思います。

東京マラソンありがとう! そしてSSFありがとう!

# スポーツ団体の ネットワーク化

## (スポーツ・フォア・オールネットワーク)

実施期間：1995(平成7)年度～2004(平成16)年度

どこの組織・団体にも所属せず、法人格も持たない小さなクラブやスポーツ団体にとって、公営のスポーツ施設を借りることやスポーツに関する情報を得ることが困難な実情があった。SSFは、団体規模の大小、大きな組織への加盟の有無、従来からの既得権益等に関わりなく、平等に情報を収集し、誰もが気軽にスポーツを楽しめる環境づくりが必要と判断した。

そのための第一歩として、SSFと団体、また団体間の有機的なつながりによる大きな輪を形成するため、1995(平成7)年に「SSF スポーツ・フォア・オールネットワーク」の設立を計画し、東京などでのスポーツセミナー開催を通して、広くスポーツ団体に呼びかけた。それに対して500団体が賛同し、翌1996(平成8)年より本格的な活動を開始した。

年会費は1団体5,000円で、会員特典として、SSF主催セミナー・ミーティングへの優先案内、FAX情報サービス“SSFax”(のちSSFan)の発信、SSF刊行物の割引販売、助成金(SSFスポーツエイド)申請書類の簡略化、会員名簿の配付、ホテル割引宿泊の斡旋などを行った。

その後、本事業が終了する2005(平成17)年までの10年間で、会員数は726団体まで増加した。



### 事業内容

SSFスポーツ・フォア・オールネットワークの主な事業として、スポーツ界の新たな情報を提供するための「スポーツセミナー」「スポーツフォーラム」、地域のニーズや課題を把握し、今後のネットワークの方向性を検討するための「SSFネットワークミーティング」、スポーツNPO団体等のネットワークを構築するための「スポーツNPOサミット」の開催や、スポーツ関係NPO法人に関する調査を実施した。

#### ●SSFスポーツセミナー・SSFネットワークミーティング・SSFスポーツフォーラム

時期に合ったテーマで、SSFネットワーク会員をはじめ、スポーツ団体や行政担当者などを対象に情報提供の場として開催した。(詳細は次ページの表の通り)

#### ●スポーツNPOサミット

1998(平成10)年に特定非営利活動促進法が制定されて以来、NPO法人を中心とした市民活動が活発に動き始めた。スポーツの分野も例外ではなく、それまで行政・学校・企業を中心に進められてきたスポーツ振興も、既存の枠組みにとらわれず、新しい手法で、多様なニーズに合ったサービスを行おうと様々なアプローチがなされた。スポーツ施設の管理運営、スポーツプログラムのサービス、スポーツイベントのサポートなど、その活躍の可能性は確実に増していった。

2002(平成14)年3月に神戸で開催された第1回スポーツNPOサミットin Kobe(主催：同実行委員会ほか)を引き継ぎ、2002(平成14)年11月から4年にわたり、東京でスポーツNPOサミットを開催した。増えつづけるスポーツ関係のNPO法人や活発に活動する任意のスポーツ団体、その協働者となりえる行政や企業、ボランティア、アスリートが一堂に会して、語り合う場となった。また、東京での開催を機に、本サミットは、SSFとNPO法人クラブネッツ、NPO法人神戸アスリートタウンクラブで構成するスポーツNPO活動推進ネットワークによる共催事業となっている。その後、スポーツNPO活動推進ネットワークは、NPO法人MIPスポーツ・プロジェクト(第4回)、NPO法人阿見アスリートクラブ、

NPO法人Japan Sports Revolution(以上第5回)が加わり、会を追う毎に連携の輪は拡大した。

#### ●スポーツNPO調査

スポーツNPOサミットにおけるスポーツ関係のNPO法人の盛り上がりを受け、その実態や支援策を探るため、2005(平成17)年4月に、SSF、NPO法人クラブネッツ、NPO法人NPO推進ネットの三者で構成するスポーツNPO調査委員会で「スポーツ関係のNPO法人に関する調査」を実施した。この結果、法人の目的、活動などが把握でき、その後の発展・展開に向けて、行政や中間支援組織が取り組むべき支援策の参考資料となった。

### SSFスポーツ・フォア・オールネットワークの休止

特定非営利活動促進法の制定により、市民活動団体が法人として活動できるようになったことや、インターネットの急速な普及により、情報の伝達速度も一段と増したことなど、社会は大きく変化した。その間、会員組織も成長し、団体運営に必要な情報収集や、スポーツ団体間の連携が促進された。これは、各種セミナー・ミーティングの開催による情報提供を継続的に実施したことや、スポーツNPOサミットにおける団体相互のネットワーク構築が実を結んだものと受け、SSFネットワークの当初目的が達成されたと判断し、2005(平成17)年3月末日をもって会員組織を解消した。

### スポーツ・フォア・オールネットワーク関連会議一覧

	開催年度	テーマ	開催都市	参加者数(人)
■SSFスポーツセミナー	1995年	ネットワーク入会説明会兼スポーツ講演会	東京、名古屋、大阪	—
	1996年	ネットワーク入会説明会兼スポーツ講演会	福岡	—
	1998年	NPO法とスポーツ団体	東京、大阪	128 117
	2000年	道路をスポーツに開放しよう	東京、大阪	110 98
	2001年	子どものスポーツライフを考える	東京、大阪	120 120
	2002年	スポーツクラブ、様々な視点	東京	181
	2003年	ロンドンマラソンのフィロソフィーとその経済効果	東京	105
	2004年	都心における市民マラソンの実現をめざして	東京	93
	2005年	日本のスポーツを考える	東京	176
	■SSFネットワークミーティング	1997年	スポーツ・フォア・オールの実現について	大宮、福島、名古屋
1998年		スポーツクラブってどんなところ?	福井	31
1998年		スポーツクラブへ行こう!	神戸、横浜	36 23
2000年		SSFネットワークについて	東京、静岡、大阪	16 15 19
2003年		地域スポーツ事業の自立と発展	東京、大阪	68 65
■SSFスポーツフォーラム	1996年	ゼロからのスタート	東京	—
	1997年	スポーツクラブをつくりましょう	東京、大阪	169 158
	1999年	このままではスポーツクラブはできない	東京、大阪	145 185

	開催年度	回数	テーマ	参加者数(人)
■スポーツNPOサミット	2002年	第2回	スポーツNPOとスポーツ振興	344
	2003年	第3回	実りある連携に向けて	311
	2004年	第4回	スポーツNPOの価値と使命	294
	2005年	第5回	スポーツNPOとまちづくり	264

# ワールドゲームズ

実施期間：1991年(平成3年度)～現在

ワールドゲームズは、国際ワールドゲームズ協会(IWGA:International World Games Association)主催、国際オリンピック委員会(IOC)後援で4年に1度、夏季オリンピック競技大会の翌年に開催される国際的トップアスリートによる総合競技大会である。

参加競技種目は、Sport Accord(旧GAISF:国際スポーツ団体総連合)と国際ワールドゲームズ協会(IWGA)加盟競技の中で、オリンピック競技種目に採用されていない種目で、世界の4大陸40カ国以上に協会があり、かつ、3回以上の世界選手権等が行なわれていることが条件となる。

ワールドゲームズ大会は、世界最高レベルという基準で各競技の国際スポーツ連盟(IF)によって選ばれた選手たちによっておなじみのスポーツから目新しいスポーツまで、およそ10日間にわたって熱戦が繰り広げられる。大会の特徴は、巨額の費用がかかるオリンピックの反省から、既存の施設のみで開催できる競技種目で実施するため、低費用(秋田大会では約23億円)で実施されることである。また表彰式に金・銀・銅のメダルは授与されるが、行き過ぎた国威発揚や勝利主義は排除されている。



## 30年の歴史をもつワールドゲームズ

ワールドゲームズは、もともとオリンピックが巨大化し、新しい競技種目が参入することが極めて難しくなってきたことから、オリンピック競技種目以外のスポーツにも人々の関心を向けてもらうためにボウリング・ボディビルディング・空手道・綱引・バドミントン・野球など当時のオリンピック競技に入っていない12団体が集まり、1980年にワールドゲームズ協議会(WGC)を設立、翌年の1981年から大会をスタートさせた。WGCはその後国際ワールドゲームズ協会(IWGA)と改称され現在に至っている。

日本では、1985年に日本のワールドゲームズ関連競技団体が集まり、日本ワールドゲームズ委員会を設立した。1991年には日本ワールドゲームズ協会(JWGA)に改組し、2001年の第6回大会を秋田県に招致する原動力となった。この大会の様子は、NHKをはじめとするTVの全国放送、新聞・雑誌も連日報道し、海外でも133カ国で放送され、その認知度は一挙に高まった。ワールドゲームズは開催経費の負担も少なく地方都市での開催も可能な新しい形の国際競技大会として注目を集めている。

## 日本ワールドゲームズ協会

SSFでは、JWGA発足以来事務局を運営し、秋田の大会招致や法人化等を進めてきた。

秋田大会の開催に当たっては、事前の大会調査や「ワールドゲームズフェア」の開催等、ワールドゲームズの周知活動を担い、大会の成功へ向けて側面から協力した。また、日本ワールドゲームズ大会の開催を目指し、全国の自治体等への紹介と交渉も実施している。

現在JWGAには40競技団体、2支援団体の計42団体が加盟している。第9回カリ大会まで、あと2年となったが、JWGAは国内でのワールドゲームズの周知と認知度の向上のため、加盟団体とともに普及と競技力の向上を図り、広報活動を実施することで、第9回大会への参加に向けて支援していく。

## ワールドゲームズ大会の変遷

開催年	開催地	実施競技(公式・公開)	参加選手数(地域数)
第1回 1981(昭和56)年	サンタクララ(アメリカ)	16(16・0)	1,265人(9)
第2回 1985(昭和60)年	ロンドン(イギリス)	21(21・0)	1,550人(57)
第3回 1989(平成元)年	カールスルーエ(旧西ドイツ)	19(17・2)	1,965人(49)
第4回 1993(平成5)年	ハーグ(オランダ)	26(22・4)	2,275人(49)
第5回 1997(平成9)年	ラハティ(フィンランド)	29(24・5)	1,725人(75)
第6回 2001(平成13)年	秋田(日本)	31(26・5)	2,193人(93)
第7回 2005(平成17)年	デュイスブルク(ドイツ)	38(32・6)	3,205人(93)
第8回 2009(平成21)年	高雄(チャイニーズタイペイ)	31(26・5)	2,908人(84)
第9回 2013(平成25)年	カリ(コロンビア)	—	—

## みなさんからのエール

### 2001年ワールドゲームズ秋田大会

三浦 廣巳 さん 秋田ワールドゲームズ組織委員会 事務総長

次世代を担う子供たちに、自信と誇りを持ってもらいたいという願いで、21世紀の幕開けにふさわしい国際スポーツイベントとして、秋田から世界に発信しようという目的をもって取り組んだイベントでした。

秋田県と各市町村、民間が一体となって1994年後半から招致にむけてスタートしました。笹川スポーツ財団の中に日本ワールドゲームズ協会があり、坪内前会長、小野清子会長はじめ多くの皆さんに、ご指導ご支援していただきました。心より感謝申し上げます。

海外でのIWGA(国際ワールドゲームズ協会)の会議、秋田での幹部ミーティング、さまざまな困難を経て迎えた2001年8月16日、晴天の秋田で開会式が始まりました。パラシューティングの選手30名による空中3000メートルからのパフォーマンスが満員の観客の度肝を抜きました。この開会式の成功で大会は盛り上がり、世界の90の国と地域からの参加者に大きな感動を与えた素晴らしい大会であったと感謝しております。

一地方で、国際スポーツ大会WGが開催できたことが、秋田県民にとっても、子供たちにとっても「地方から世界に発信できるんだ。」という、大きな自信を持たたと確信しております。ともに開催にご尽力いただきました笹川スポーツ財団の皆様、20周年を迎えられた祝意とともに、心より御礼申し上げます。おめでとうございます。

### ワールドゲームズ

吉澤 俊治 さん 特定非営利活動法人 日本水中スポーツ連盟 専務理事(JWGA執行理事)

私が、ワールドゲームズに参加したのは1993年笹川スポーツ財団の呼びかけにより、ハーグで開催された第4回大会である。世界第2の国際総合スポーツ競技会らしい開会式の模様や夜のビーチでの大花火は今も忘れられない。そして、この時第2回ロンドン大会の名誉会長が笹川良一氏であったことを知り、大変驚いたと共に日本人の国際スポーツ界での影響力に国民として誇りを感じたことを思い出す。

この後ワールドゲームズは、日本開催で大成功した第6回秋田大会はもちろんのこと、1昨年の第8回高雄大会では、105ヶ国5,000人の選手参加、観客動員数150万人、正に長野五輪の観客動員数に並ぶほどの規模に成長した。この20年間、笹川スポーツ財団のサポートで、日本ワールドゲームズ協会が現在まで運営出来たことを心より感謝申し上げ、今後も国際大事業に更なるご支援をお願いしたいと希望する次第です。

# 雲仙普賢岳 チャリティマラソン

実施期間：1992(平成4)年度

1990(平成2)年11月17日に長崎県・雲仙普賢岳が噴火し、火砕流と堆積した火山灰が大雨により流出する土石流が周辺市町村に甚大な被害をもたらした。

特に大規模な人的被害をもたらしたのは、1991(平成3)年6月3日に発生した火砕流で、死者行方不明者43名と9名の負傷者を出す大惨事となった。

火砕流と土石流の自然災害の恐怖をまざまざと実感させられた出来事であり、その後、噴火活動は、1995(平成7)年に至るまで約4年半続き、島原市と深江町(現南島原市)は度重なる火砕流災害、土石流災害に見舞われ、多くの人々が被害を受けた。

SSFでは、1992(平成4)年11月15日に長崎県・小浜町(現雲仙市)で雲仙普賢岳噴火災害の被災者支援の願いを込めて「雲仙普賢岳チャリティマラソン」(主催・小浜町他、共催・日本財団、B&G財団、笹川スポーツ財団)を開催した。



チャリティマラソン大会当日は、ハーフマラソンと5キロの部に2,300名の選手が参加し、さわやかな汗を流した。ハーフマラソンは、標高約700mの雲仙温泉をスタートとして、島原半島西岸にある小浜温泉をゴールとする下りの急傾斜のコースであった。大会には、ミュンヘンオリンピック金メダリストであるアメリカのフランク・ショーター選手、ソウルオリンピック金メダリスト、ポルトガルのロザ・モタ選手、1991年世界陸上金メダリスト谷口浩美選手や往年の名ランナー山田敬蔵さん、山梨学院大学箱根駅伝ランナー広瀬諭史選手らが招待され、復興支援に熱いエールが送られた。また、開催前夜の11月14日には、小浜町の体育館で「前夜祭・がんばろう!フォーラム」が開催された。

チャリティとして、日本財団、B&G財団、笹川スポーツ財団の3団体から、大会参加料・記念Tシャツの販売収入等1,000万円が地元の青少年のスポーツ振興のため、島原半島スポーツ振興協議会に寄付された。



# 日本・サハリン親善 少年サッカー交流

実施期間：1992(平成4)年度～1993年(平成5)年度

1992(平成4)年、民間の日露交流の発展を目的に、ロシア連邦サハリン州の少年サッカーチームを招聘し、初めて交流事業を行った。その2年目は、交流をさらに深めるため、SSF城倉英人常務理事を団長とする総勢63名の交流団がサハリンを訪問し、スポーツ交流(主催・日本財団、笹川スポーツ財団)を図った。

当時直便もない時代に、民間大使として9日間交流してきたことは、参加した子ども達の生涯にとって、とても有益な体験であった。

この交流は、サハリン州政府と交わした協定書により、その後相互交流を継続し、10回目をもってその役割を成功裡に終えることができた。



1993(平成5)年8月3日早朝、羽田の東京国際空港に東京と静岡県清水市(現静岡市清水区)から選抜された少年達30名が集まった。前年から日露民間交流として始まったサッカー交流に参加する子ども達である。

一行は、函館空港経由でロシア連邦サハリン州ユジノサハリンスク市等を訪問した。当時は定期便がなく、エアロフロート国際航空のチャーター機によるものであった。

訪れた選抜チームは、東京少年サッカーリーグの加盟チームから選抜された小学6年生15名と清水サッカー協会からの選抜による15名(唯一の女性・三森裕子選手を含む)である。

8月6日にドリンスク市ブイコバ地区を皮切りに各場で試合を行った。各会場はすべて天然芝であった。試合は白熱し、最終戦は日本代表と全サハリンの対戦となったが、両者一歩も引かず引き分けという結果になった。

現地では、移動のバスを警備のパトカーが先導し、各会場では地元市民の大きな歓迎を受けた。特に現地での生活水準が決して高くない在留邦人の高齢者の方々が、孫のような日本の子ども達に声援を送り、貴重な食材を使いおにぎり等の差し入れをしてくれたことに、子どもは勿論同行した大人達も大きな感激を味わった。

9日間という日程ではあったが、近くて遠い異文化を実際に体験し、子ども達は一回り成長して帰国することができた。

あれから18年、参加した少年達は三十路を迎える。



これからの

THE 20 YEAR HISTORY OF SASAKAWA SPORTS FOUNDATION

1991-2010

SSF

## 進むべき道 — 「未来に夢を描き、行動する」シンクタンクへ。

笹川スポーツ財団常務理事 渡邊 一利



20周年を迎えた笹川スポーツ財団(SSF)、いま、新しい夢の実現へと歩み始めたところです。そのことを象徴する固有名詞が2つあります。

ひとつは「公益財団法人」です。110年の時を経て公益法人制度が抜本的に改革され、2011年4月1日、SSFは「財団法人」から「公益財団法人」に変わりました。これにより、税制優遇を受けることはもちろん、寄付金が集めやすく、社会的な信頼性がより一層高まることとなります。

もうひとつは「スポーツ分野の実践型シンクタンク」です。長年にわたり、スポーツの実態調査を行って参りましたが、これからは一歩、二歩、三歩と踏み出し、調査結果をきめ細かく分析・研究したうえで、日本のスポーツ振興に対して積極的に政策提言を行います。また、行政やスポーツ組織と協働しながら、提言内容を具現化するための活動も充実させていきます。

この2つの固有名詞は、SSFがより公益性の高い組織として、新たな事業を展開する環境が整ったことを意味します。あとは、行動して成果を示すことが社会的説明責任へと繋がります。まさに、それこそが私の責務だと考えています。

20分の6。私は大きな可能性を秘めたこの組織の常務理事として、業務運営を6年間担ってきました。就任

後4年間は「スポーツエイド」「調査研究」「国際業務」などの従来事業をバランス良く育て成長させることに尽力しましたが、夏の「湘南オープンウォータースイミング」と冬の「東京マラソン」という「2大スポーツイベント」に相当な経営資源を費やす結果となったのです。個々の事業には一定の評価をだせませんが、全体を俯瞰した場合に、役員として適正な業務運営を図れたものが、些か疑問と不安が残りました。

一方でこの4年間、東京オリンピック招致活動を契機にスポーツ界がにわかに慌ただしくなり、国会議員を中心にスポーツ振興のあり方について議論が活発化し、2009年7月にはスポーツ基本法案が国会に提出されました。法案はスポーツ庁の設置にも言及しています。法律の成立は未だですが、スポーツ界を取り巻く環境は風雲急を告げる情勢なのです。

2009年4月、常務理事1人体制となったことを機に、以前から構想していた「提言を具現化する機能を備えたシンクタンク」として、組織を再構築することがSSFの社会的な存在価値を高めるとともに、日本のスポーツ政策の充実とスポーツ界の活性化につながると考え、小野清子会長に説明し決断していただきました。

そして、SSFの業務運営を第三者的視点により客観的に分析し、選択と集中により事業を特化しました。

多少の紆余曲折を経ましたが、結論は2011年度の事業計画に集約されています。そこには「スポーツエイド」や「スポーツイベント」はなく、新たに「政策提言事業」や「人材育成事業」などが明記されています。

SSFの常務理事とは、「たすき」を受けて走り続ける駅伝ランナーに似ています。ただし駅伝はコースが設定されていますが、常務理事は「進むべき新たな道」を拓きながら走り続けなければなりません。道を拓けなければ組織は路頭に迷い、果ては存続の危機を招きます。だからこそ、覚悟をもち、熟慮断行し、最後は責任をとること、これが常務理事の仕事だと信じて疑いません。

黎明期、成長期の20年間、多くの先達がSSFの組織基盤づくりに尽力され、日本のスポーツ振興に貢献されたことに、あらためて敬意を表します。

運命なのでしょうが、私は組織の転換期に「たすき」を引き継ぐことになりました。先達の方々の足跡を大事にしなが、スポーツを通じて日本を元気にするために、新たな道を開拓し走り続けたいと思います。そして、転換期から成熟期への道筋をしっかりと築きます。

この20年史をご覧いただく皆様、どうか未永く、笹川スポーツ財団を応援し、ご指導賜るようお願いいたします。

## SSFへの期待

### 武藤 泰明

早稲田大学スポーツ科学学術院 教授  
(SSF研究調査委員長)



笹川スポーツ財団設立20周年おめでとうございます。心よりお祝い申し上げます。

SSFは平成22年度から、その中心となる事業を政策研究・提言に定めました。23年度からは政策研究助成、そして大学生による政策研究・提言の場であるSport Policy for Japanも始まる予定です。これまでの事業の中心はスポーツ活動に対する助成でしたので、事業方針の大きな転換であると言えるでしょう。SSFのこのあらたな事業は、日本のスポーツにとって、大きな助けになるように思います。以下、このことについて私見を申し上げます。

政策とは政府(中央・地方)が立案・実施するものですが、最近になって、その形成過程では、非政府部門(NGO)の創意工夫や試行錯誤の蓄積が参考にされ、制度設計やガバナンスに一定の役割を果たし始めています。

スポーツは国の枠組みを超えた普遍性と、国の枠組みでは本来律することのできない文化性を持っています。その意味では、スポーツ政策の形成に非政府部門が積極的に関与することが必要、有効なのでしょう。しかしながら、日本のスポーツについては、これまで非政

府部門が政策形成に関与・貢献することはあまり多くなかった、というより、スポーツ政策に関与する主体がそもそも少なかったように思います。

外国人から見ると、日本はとて中央集権的な国のようです。たしかにそうなのでしょう。しかし第1回の国民体育大会は1946年に開催されています。粗雑な立論であることを承知の上でいえば、憲法より前に国体というのは中央集権ではできないことのはずで、関係者の発意と熱意のおかげだと言えるでしょう。そして現在でも、スポーツが盛んになることを願う人の数はとても多いと思います。そのような人々の意志や熱意を、これからの政策形成に生かしていくことが求められているように思います。そしてその役割を果たす主体の一つがNGOです。SSFは国内法では公益法人に区分されますが、世界的には典型的なNGOに該当します。

このような状況を考えるなら、SSFの新たな事業方針は、時宜を得たものであると思います。そして願わくは、ひとりSSFだけが政策研究や提言を実施するのではなく、SSFに対して意見を述べ、議論や協力をしてくれる方々や組織団体が増えてほしいと思います。

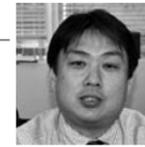
## 私の決意表明 — これからのSSFを創る

### 職員のひとこと

#### 有田 孝行

私のマニフェスト—

- 「逃げない」、「甘えない」、「妥協しない」、「あきらめない」の「4ない運動」を継続する。
- 考え込むことよりも、まず行動してみる。
- 決断できる勇気を持つ。
- 公私のけじめ、仕事も遊び(プライベート)も全力で。
- 個人の判断だけでなく、組織としての判断を常に心がけて動くこと。以上を私の決意表明とします。

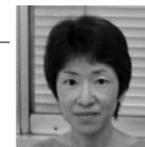


#### 板橋 あずさ

人は未来を語る時に「過去にこだわることなく…」という言葉をよく口にします。

今回、年史を作るにあたり私が原稿の担当となった事業1つをとっても11年もの歴史があり、そこで学んだ経験は、私の「こだわり」として今を築いているという事に改めて気づきました。

設立20年を迎え、未来を語る時、私には過去のこだわりも必要な要素となっています。今まではとにかく前だけを見つめて走ってきたイメージですが、これからは過去と現在と未来をじっくり見つけて、考えながら事業に取り組みたいと思っています。



#### 小淵 和也

SSFがスポーツシンクタンクとして歩み始めたこの時期に、スタッフとして立ち会うことができ、非常に嬉しく思います。世界をHappyにできるのは、いつの時代もスポーツです。近い将来、日本のスポーツ政策ならSSFだと、国会議員からも一目置かれるような存在になると信じております。微力ながら、そのお手伝いができるように、日々、情報収集、自己研鑽に努めていこうと思います。



#### 工藤 保子

平成3年4月1日、SSFの職員となり早や20年。人生の約半分をこの財団と共に過ごしてきた。一貫して調査研究事業に携わってきたが、イベントの運営や広報の仕事など、非常に興味深い経験や機会も得てきた。今後は、もう一度初心に戻り、丁寧に調査研究事業に向き合っていきたいと思う。足りない部分は大いに学び、「知的好奇心」旺盛に歩んでいきたい。



#### 黒田 真理子

「スポーツ・フォー・エブリワン」の思いにある「国民一人ひとりのスポーツライフを豊かにし、明るく健康に満ちた社会づくりを目指すと共に、すべての人にスポーツの楽しさを伝える」ためには、他のどこよりもだれよりもスポーツを愛し、スポーツを知り、スポーツについて考え、スポーツにアツイ組織でないといけない。大切にしたいのは「国民一人ひとり」。一番身近な存在となるように、私もその一翼を担えるようになりたい。



#### 佐藤 紫朗

さまざまな社会問題を抱え、混沌とした状況が続いている今の日本の社会を、復活させる起爆剤の一つがスポーツであると思います。したがって、スポーツの発展と共に、スポーツが果たす役割が大変重要となりSSFの存在意義は益々高くなっていくと思います。メダルの数だけに捉われることなく、日本のスポーツの目指すべき方向を見定め「スポーツ・フォー・エブリワン」の実現に向け前進していきましょう。



#### 渋谷 茂樹

各種目、そして大小さまざまな規模のスポーツ団体・クラブ、学校体育・運動部活動、および国、都道府県、市区町村のスポーツ振興部局の地道な活動によって、スポーツの普及・振興ははかられている。これらスポーツ現場の主役をひきかたせる名脇役としてSSFがなくてはならない存在であり続けるために、自分自身の能力を高め、SSFのパフォーマンスの向上を通じて「スポーツ・フォー・エブリワン」の推進に貢献したい。



#### 竹下 克彦

私が入った当時は第1回東京マラソンの準備真っ只中!いきなり業務の嵐に巻き込まれ。あれから5年。今は広報担当として、笹川スポーツ財団を売り込む毎日。中には知らない人もいます。たくさんイイコトをやっているのになあ。

“知る人ぞ知る”笹川スポーツ財団を「みんな知ってる笹川スポーツ財団」にしたい。

でも笹川スポーツ財団のことは知らなくても、「スポーツの楽しさ」を知ってもらうことができたらそれだけでうれしい。



#### 武長 理栄

1985以降、子どもの体力は低下し続けている。スポーツ政策分野を専門とする研究機関は少なく、SSFが今後シンクタンクとして果たすべき役割は大きいと感じている。国内外の様々なデータを収集し、そのデータを基に人々にとっての望ましいスポーツ環境のあり方を提言していかなければならない。特に30年後の未来を担っていく子どもたちのスポーツ環境の充実に貢献できるよう、使命感を持って仕事をしていきたい。



#### 但野 秀信

2004年に開催された「湘南オープンウォータースイミング」の安全管理スタッフとしての活動がきっかけで、職員として6年が経ちました。以前から、秋田ワールドゲームズやSSFスポーツエイドなどの事業に参加し、SSFをはじめとするスポーツ関係機関の仕組みに支えられていました。私の人生を豊かにしている「スポーツ」に感謝し、この素晴らしさを多くの人に伝えたく、これからも「スポーツ・フォー・エブリワン」の定着に向けて邁進します。



私の決意表明—これからのSSFを創る

職員のひとこと

玉澤 正徳



仕事で失敗して暗い気持ちで帰宅したある晩、当時3歳の娘がどこかでもらってきた風船をもってきて、下に落とさず何回パスを続けられるかやってみよう、とやってきた。

私は気持ちも減入っているし、疲れているので適当につきあつて終わりにしようと思ったのだが、数を数えているうちにだんだん夢中になり、最後は娘と大汗をかいていた。すると気持ちもすっきりして、仕事の失敗にも前向きに向き合えるようになっていた。何かに夢中になることで、嫌なことを忘れられるのはスポーツに限らない。しかしスポーツに限らないが、スポーツにもその力があるということを知ってもらうことに全力を尽くしたい。

津田 伸幸



日本スポーツ機構からスタートし、1991年3月の財団設立。手探りの草創期、財団の周知を図った各種イベント。この20年はイベントへの助成と開催が主たる活動であった。

そして節目を迎え、SSFは「知」の集団となる。知恵・知徳・知悉(ちしつ)等、知を活かし日本のスポーツ界に切り込んでいく。5年後そんな知勇の集団になっている。

中島 光



設立から20年、時代の流れとともに社会環境や個々の思考も変わりますが、先人の足跡を汚す事無く、SSF設立当初からの目標である「sport for all」「sport for everyone」の実現に向け、スポーツシンクタンクとして常に時代をリードし、スポーツで日本を変えることができる政策組織となるべく、日々研鑽を積み事業を推進していきます。

成瀬 小太郎



数え切れぬ方々との出会いを通じ、様々なご指導ご支援の上に、私自身を含め、今日のSSFがあることを痛切に感じています。刻々と変化する社会情勢や生活環境の中で、一人でも多くの人々がスポーツや運動というものに関わり、心も体も健康で豊かな人生を送れるような社会づくりを行うこと、そのために「個々」の人々や地域、国全体が抱える諸問題をスポーツによって改善していくことが私たちの使命です。今の世の中に何ができるか、これからの未来に何を残せるか、常に自問自答し、行動に移し、形にしていきたいと思ひます。

長谷 公人



20周年おめでとうございます。この記念すべき時に、皆様と一緒に仕事できたことを嬉しく思います。現代の日本社会が抱える「人間関係の希薄化」、「地域社会の衰退」などの諸問題を解くヒントの一つにスポーツがあると思ひます。

スポーツの振興とより良い社会作りの為、笹川スポーツ財団の更なる発展を心より祈念しております。

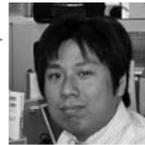
東 英司



財団の一員になって20年近くが経過する。

今まで担当した事業を通じて、「スポーツで地域を元気にする仕掛け人」とでも言うべき人たちのたくさんの出会いがあり、「スポーツ振興」について本当に多くの事を学ばせていただいた。この今まで築いてきた多くの人たちとの繋がりと、蓄積した現場の知識を大切に、これからも多くの「現場」を学ばせていただきながら、SSFが目指す「スポーツ・フォー・エブリワン」の実現に向けて、貢献していきたいと思っている。

藤原 直幸



SSFに初めて訪れたのが2006年の夏、当時は早稲田大学のインターン生だった。それから4年余り。オープンウォータースイミング、東京マラソンといったイベントから、スポーツライフ・データ、スポーツ白書といった調査研究までさまざまな事業を経験した。成人を迎えたSSFは「スポーツシンクタンク」としての歩みを始めるが、組織と共に成長し、貢献できる人間でありたいと思う。

古坂 具巳



設立から20年を迎え、SSFも人間に例えると成人となりました。これからは、スポーツシンクタンクとして、社会情勢の変化に柔軟に対応しつつ、日本の将来像を考え、スポーツを通じて「日本を元気にする」をテーマに、一人ひとりのスポーツライフを豊かに、明るく健康に満ちた社会づくりの形成を目指し、SSFがなくてはならない存在になるために自分自身も初心に戻り、全身全霊で立ち向かっていきたいと思ひます。

吉田 智彦



国や地方自治体などのスポーツ振興政策への提言や問題提起を発信する組織として、質・量ともに深い情報を備えることが重要となるが、常に世界に目を向け、他分野の知見を吸収することで幅を広げバランスを取り、社会におけるスポーツの立ち位置を意識しながら、大きく構えて強く立てるようにありたい。

また、スポーツの価値や力を信じ、共鳴する者が手を取り合う、“Solidarity”による社会づくりを目指したい。

坂井 宣夫



年齢、役職に関係なく各個人の意見が自由に言い合える風通しの良い組織であるならば、SSFは成長し続けると思ひます。

みなさんの活躍を祈っております。

THE 20 YEAR HISTORY OF SASAKAWA SPORTS FOUNDATION

1991-2010

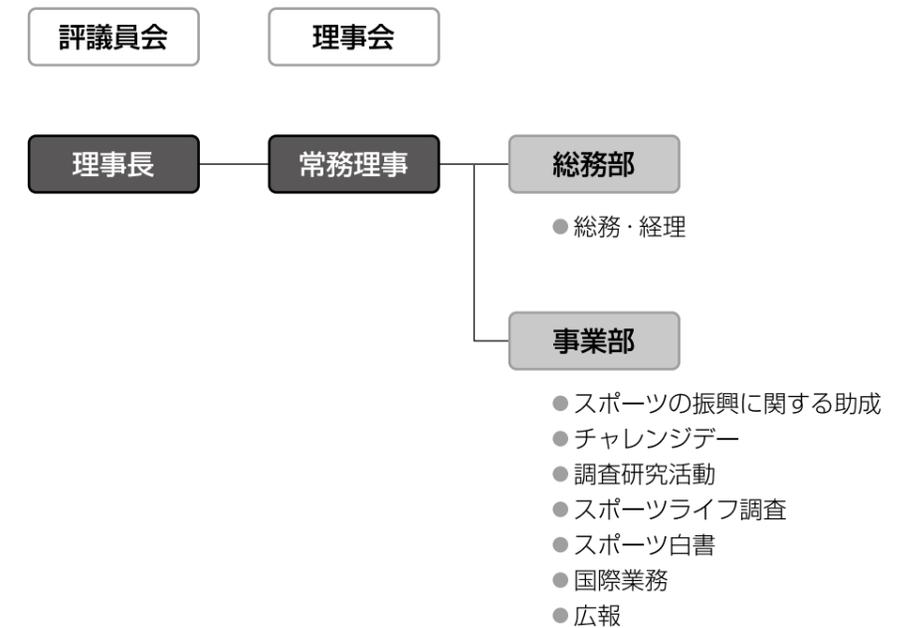
資料

## 財団概要

## ■ 組織

名称	公益財団法人 笹川スポーツ財団 (SASAKAWA SPORTS FOUNDATION 略称: SSF)	
所在地	〒105-0001 東京都港区虎ノ門1-15-16 TEL: 03-3580-5965 FAX: 03-3580-5968 E-MAIL: info@ssf.or.jp	
設立年月	1991年(平成3年)3月 (公益財団法人への移行 2011年4月)	
基本財産	55億円	
目的	スポーツ・フォー・エブリワンの推進	
行政庁	内閣府	
理事長	小野 清子(独立行政法人 日本スポーツ振興センター 理事長)	
スタッフ	20名(常勤役員1名、職員19名) 総務部・事業部	
提携機関	アメリカ合衆国大統領体カスポーツ審議会(PCPFS) 国際ヘルスプロモーション研究所(IHHP)	
加盟機関	国際スポーツ・フォア・オール協議会(TAFISA) 国際スポーツ・フォー・オール連盟(FISpT) アジアニア・スポーツ・フォー・オール協会(ASFAA) 日本スポーツ・フォア・オール協議会(TAFISA-JAPAN)	
理事	渡邊 一利	公益財団法人 笹川スポーツ財団 常務理事
	青島 健太	スポーツジャーナリスト
	荒木田 裕子	公益財団法人 日本オリンピック委員会 理事
	茶野 順子	笹川平和財団 常務理事
監査	西本 克己	株式会社東京ビー・エム・シー 代表取締役社長
	三浦 雅生	弁護士
評議員	今 義男	海洋政策研究財団 理事長
	竹田 恆和	公益財団法人 日本オリンピック委員会 会長
	長崎 宏子	有限会社ゲンキなアトリエ 取締役
	前田 晃	公益財団法人 日本財団 常務理事
	三ッ谷 洋子	株式会社スポーツ21エンタープライズ 代表取締役

## ■ 組織図



## ■ 事業

## 1. スポーツ政策に関する研究調査

スポーツ界の実践型スポーツシンクタンクとして、研究・調査・データ収集および分析に裏打ちされた国や地方行政への政策提言、スポーツ関係団体やスポーツ関係者への企画・提案を積極的に行います。特に、長期的視野に立ったスポーツ政策の立案を求め、十分なデータや根拠の集積を行い提言・提案活動につなげていきます。

また、当財団の事業展開の基礎資料として、スポーツライフ調査を定期的実施し「スポーツライフ・データ」で広く周知するとともに、国内外のスポーツに関する最新データを集大成した「スポーツ白書」を刊行し、広く頒布いたします。

## 2. スポーツ振興を図る助成

スポーツ振興プログラムとして「まちづくり」や「地域コミュニティの活性化」につながり、子どもや住民など誰もがスポーツ参加することができ、スポーツの持つ価値を実感できる事業への助成を行います。

また、スポーツ政策のあり方に関する研究として、日本のスポーツの普及・振興に寄与する優れた研究活動に対し助成を行い、将来を担うスポーツ研究者の人材育成を図ります。

## 3. 地域スポーツの活性化支援

100万人を超える市民スポーツの祭典である「チャレンジデー」を全国に周知し、地方自治体・地域等とのコミュニケーションを深め、住民一人ひとりが地域社会の中でスポーツライフを楽しめるようなシステムの構築を図ります。

また、地域コミュニティの創成と世代間交流に「チャレンジデー」が有益であることを実証するとともに、地方自治体が策定するスポーツ振興計画の立案から評価までのサイクルに関することにより、一人ひとりのスポーツライフの充実を図ります。

## 歴代役員・評議員

敬称略

会長																				
年度 (4/1～3/31)	1991 (平成3)	1992 (平成4)	1993 (平成5)	1994 (平成6)	1995 (平成7)	1996 (平成8)	1997 (平成9)	1998 (平成10)	1999 (平成11)	2000 (平成12)	2001 (平成13)	2002 (平成14)	2003 (平成15)	2004 (平成16)	2005 (平成17)	2006 (平成18)	2007 (平成19)	2008 (平成20)	2009 (平成21)	2010 (平成22)
坪内嘉雄	1991.4.1～1997.3.31																			
小野清子							1997.4.1～													

理事																					
年度 (4/1～3/31)	1991 (平成3)	1992 (平成4)	1993 (平成5)	1994 (平成6)	1995 (平成7)	1996 (平成8)	1997 (平成9)	1998 (平成10)	1999 (平成11)	2000 (平成12)	2001 (平成13)	2002 (平成14)	2003 (平成15)	2004 (平成16)	2005 (平成17)	2006 (平成18)	2007 (平成19)	2008 (平成20)	2009 (平成21)	2010 (平成22)	
青木半治	1991.4.1～2005.3.31																				
赤木恭平	1991.4.1～2011.3.31																				
雨宮忠													2002.10.3～2007.9.30								
安西孝之													2003.4.1～2005.3.31								
池田勝							1997.4.1～2000.11.14														
犬飼基昭																		2009.4.1～2011.3.31			
衛藤藩吉	1991.4.1～2001.3.31																				
王貞治	1991.4.1～1995.3.31																				
岡野俊一郎							1997.4.1～2011.3.31														
小野清子					1995.4.1～																
神山榮一	1993.1.20～2007.3.31																				
川淵三郎													2003.4.1～2009.3.31								
小掛照二					1995.4.1～2010.5.9																
木原光知子													2005.4.1～2007.12.7								
増田明美													2005.4.1～2011.3.31								
小峯力													2005.4.1～2011.3.31								
笹川陽平	1991.4.1～1993.10.14																				
佐野和夫																		2009.4.1～2011.3.31			
城倉英人	1991.4.1～1999.3.31																				
杉尾榮俊					1995.4.1～2001.3.31																
鈴木祐一	1991.4.1～2005.3.31																				
竹田恆和													2002.4.1～2011.3.31								
玉利齊	1991.4.1～2011.3.31																				
堤義明	1991.9.12～1997.3.31																				
坪内嘉雄	1991.4.1～1997.3.31																				
長沼健					1995.4.1～2003.3.31																
林利博													2005.4.1～2009.3.31								
藤本和延	1991.4.1～2009.3.31																				
藤本秀朗					1995.4.1～1997.3.31																
古橋廣之進	1991.4.1～2005.3.31																				
古村澄一	1991.4.1～1997.6.30																				
逸見博昌							1997.7.1～2002.7.25														
三屋裕子													2005.4.1～2011.3.31								
三ッ谷洋子													2001.4.1～2011.3.31								
森喜朗													2005.6.8～2011.3.31								
森田文憲																		2007.4.1～2010.3.31 評議員へ			
八木祐四郎									1999.4.1～2001.9.9												
横山喬									1999.4.1～2005.3.31												
渡邊一利													2005.4.1～								

## 監事

年度 (4/1～3/31)	1991 (平成3)	1992 (平成4)	1993 (平成5)	1994 (平成6)	1995 (平成7)	1996 (平成8)	1997 (平成9)	1998 (平成10)	1999 (平成11)	2000 (平成12)	2001 (平成13)	2002 (平成14)	2003 (平成15)	2004 (平成16)	2005 (平成17)	2006 (平成18)	2007 (平成19)	2008 (平成20)	2009 (平成21)	2010 (平成22)	
西本克巳	1991.4.1～1993.10.14																				
船越眞													2001.4.1～2011.3.31								
三浦雅生							1995.4.1～														
宮地眞澄					1994.3.24～1995.3.31																
若松亮任	1991.4.1～2001.3.31																				

## 評議員

年度 (4/1～3/31)	1991 (平成3)	1992 (平成4)	1993 (平成5)	1994 (平成6)	1995 (平成7)	1996 (平成8)	1997 (平成9)	1998 (平成10)	1999 (平成11)	2000 (平成12)	2001 (平成13)	2002 (平成14)	2003 (平成15)	2004 (平成16)	2005 (平成17)	2006 (平成18)	2007 (平成19)	2008 (平成20)	2009 (平成21)	2010 (平成22)
青島健太													1999.4.1～2011.3.31							
朝吹誠	1991.4.1～1993.11.12			1995.4.1～1999.3.31																
荒木田裕子													2005.4.1～2011.3.31							
有森裕子													2002.10.3～2009.3.31							
池田勝	1991.4.1～1997.3.31																			
伊藤修	1991.4.1～2002.2.21																			
海老原修							1997.4.1～2011.3.31													
大西一平							1997.4.1～2001.3.31													
大森修平	1991.4.1～1995.3.31																			
奥村廣重													2004.6.2～2008.3.31							
長崎宏子							1997.4.1～													
狩野薫敏	1991.4.1～1995.3.31																			
神山榮一	1991.4.1～1993.1.20			理事へ																
川西正志													2005.4.1～2011.3.31							
菊地陸	1991.4.1～2003.3.31																			
北村博史													2001.10.1～2004.5.31							
木原光知子	1991.4.1～2005.3.31			理事へ																
小島文雄													1999.4.1～2001.3.31							
後藤忠治							1995.4.1～1997.3.31													
坂井利郎							1997.4.1～2011.3.31													
ジャックK坂崎	1991.4.1～1995.3.31																			
其川武							1997.6.1～2001.9.30													
武田敏章							1995.4.1～2001.10.7													
田中ウルヴェ京													2005.4.1～2011.3.31							
鳥井啓一							1995.4.1～2005.3.31													
鳥海又五郎							1995.4.1～2011.3.31													
中原康隆	1991.4.1～1995.3.31																			
成田真由美													2005.4.1～2011.3.31							
西木正明													1999.4.1～2011.3.31							
野上助							1995.4.1～1999.3.31													
藤田昌武	1991.4.1～1995.3.31																			
船越眞							1995.4.1～2001.3.31 監事へ													
増田明美													1999.4.1～2005.3.31			理事へ				
間野義之													2003.4.1～2011.3.31							
三浦雄一郎	1991.4.1～1995.3.31																			
三ッ谷洋子	1991.4.1～2001.3.31			理事へ																
宮地眞澄	1991.4.1～2008.3.31			監事 1994.3.24～1995.3.31																
望月紀美子							1997.4.1～2003.3.31													
森田文憲													2010.4.1～2011.3.31							
師岡文男							1995.4.1～2005.3.31													
山口泰雄													2001.4.1～2011.3.31							
遊佐雅美													2005.4.1～2011.3.31							
吉田正志	1991.4.1～1997.5.31																			
吉松昌彦	1991.4.1～1994.8.23																			

## 主な刊行物

全調査スポーツ1「スポーツライフに関する調査報告書」. 1991  
 全調査スポーツ2「スポーツ・レクリエーション団体実情調査報告書」. 1991  
 スポーツライフ・データ1993—スポーツライフに関する調査報告書. 1993  
 スポーツライフ・データ1994—スポーツライフに関する調査報告書. 1994  
 スポーツライフ・データ1996—スポーツライフに関する調査報告書. 1996  
 スポーツライフ・データ1998—スポーツライフに関する調査報告書. 1998  
 スポーツライフ・データ2000—スポーツライフに関する調査報告書. 2000  
 スポーツライフ・データ2002—スポーツライフに関する調査報告書. 2002  
 スポーツライフ・データ2004—スポーツライフに関する調査報告書. 2004  
 スポーツライフ・データ2006—スポーツライフに関する調査報告書. 2006  
 スポーツライフ・データ2008—スポーツライフに関する調査報告書. 2009  
 スポーツライフ・データ2010—スポーツライフに関する調査報告書. 2010  
 青少年のスポーツライフ・データ2002  
 —10代のスポーツライフに関する調査報告書. 2002  
 青少年のスポーツライフ・データ2006  
 —10代のスポーツライフに関する調査報告書. 2006  
 青少年のスポーツライフ・データ2010  
 —10代のスポーツライフに関する調査報告書. 2010  
 子どものスポーツライフ・データ2010  
 —4～9歳のスポーツライフに関する調査報告書. 2010  
 スポーツ白書—2001年のスポーツ・フォア・オールに向けて. 1996  
 スポーツ白書2010  
 —スポーツ・フォア・オールからスポーツ・フォー・エブリワンへ. 2001  
 スポーツ白書—スポーツの新たな価値の発見. 2006  
 スポーツ白書—スポーツが目指すべき未来. 2011  
 SSF海外レポート No.1  
 英国スポーツ・カウンシル「1990年代に向けての地域スポーツ」. 1992  
 SSF海外レポート No.2  
 英国スポーツ・カウンシル「実績報告(1989—1990)」. 1992  
 SSF海外レポート No.3  
 英国スポーツ・カウンシル「年次報告書(1989—1990)」. 1992  
 SSF海外レポート No.4  
 英国CCPR「英国のスポーツ・レクリエーション関係組織」. 1992  
 SSF海外レポート No.5 英国CCPR「年次報告書(1989—1990)」. 1992  
 SSF海外レポート No.6  
 英国CCPR「野外におけるスポーツ・レクリエーション」. 1992  
 SSF海外レポート No.7 ドイツ連邦共和国のスポーツ. 1995  
 SSF海外レポート No.8  
 ドイツスポーツ連盟(DSB)のマーケティング戦略. 1995  
 SSF海外レポート No.9  
 ドイツ スポーツ技能検定の集いに関する指導書. 1995  
 SSF海外レポートNo.10  
 イタリアCONI「2000年に向けてのスポーツ提言」. 1996  
 SSF海外レポートNo.11  
 英国スポーツ・カウンシル「21世紀へ、英国スポーツの展望」. 1997  
 SSF海外レポートNo.12 英国CCPR「スポーツクラブをつくらう」. 1997  
 SSF海外レポートNo.13 イタリアCONI「イタリアスポーツ白書」. 1998

SSF海外レポートNo.14  
 USOC米国オリンピック委員会97—98ファクトブック. 1999  
 ASFAA Booklet 1997(Sport for All Structures in Asian and Oceanian Countries). 1997  
 英文ブックレット「Sport for All in Japan」. 2000  
 ASFAA2000(Sport for All Structures in Asian and Oceanian Countries). 2000  
 TAFISA World 2001(The Global almanac on Sport for All). 2001  
 英文ブックレット「Sport for All in Japan」(SECOND EDITION). 2001  
 スポーツボランティア調査結果の英語版小冊子「International Comparative Survey of Volunteers in Sport for All (pre-survey)」. 2003  
 国際スポーツボランティア調査報告書(英語版)  
 「International Comparative Survey of Volunteers in Sport」. 2004  
 スポーツ白書英語版 「Sport White Paper in Japan Digest」. 2006  
 TAFISA Active World 2011-The Global Almanac on Sport for All-(TAFISA加盟組織総覧). 2010  
 文部省委託事業「諸外国におけるスポーツ振興政策についての調査」. 1998  
 文科省委託事業「諸外国におけるスポーツ振興政策についての調査研究」. 2004  
 ニュージーランド・オーストラリアのマリンスポーツ報告書「陽は南から昇る」. 1992  
 「SSFが考えるスポーツクラブ」. 1999  
 スポーツNPO法人に関する調査報告. 2000  
 スポーツ関係のNPO法人に関する調査. 2005  
 「クラブハウス・ガイドブック～Community of Sports Life」. 2003  
 海外ロードレース大会の実態調査報告書「ロンドンマラソンのフィロソフィー」. 2004  
 スポーツ・ボランティア・データブック. 2004  
 感動は心の報酬～長期スポーツキャンプ～. 2008  
 諸外国から学ぶスポーツ基本法. 2010  
 肉体の瞬間「One Moment in Time」. 1994  
 SSF世界スポーツフォトコンテスト'95写真集「One Moment in Time」. 1995  
 SSF世界スポーツフォトコンテスト'96写真集「One Moment in Time」. 1996  
 SSF世界スポーツフォトコンテスト'98写真集「One Moment in Time」. 1998  
 SSF世界スポーツフォトコンテスト2001写真集「One Moment in Time」. 2000  
 SSF世界スポーツフォトコンテスト2002DVD写真集「One Moment in Time」. 2002  
 SSF世界スポーツフォトコンテスト2004DVD写真集「One Moment in Time」. 2004  
 スポーツ・フォア・オールニュース(Vol.1～41). 1993～2000  
 1992 SSF スポーツセミナー報告書. 1992  
 SSFスポーツフォーラム「ゼロからのスタート」報告書. 1996  
 SSFスポーツフォーラム「スポーツクラブをつくりましょう」報告書. 1997  
 SSFスポーツフォーラム99報告書「このままではスポーツクラブはできない」. 1999  
 SSFスポーツセミナー2000報告書「道路をスポーツに開放しよう」. 2000  
 SSFスポーツセミナー2001報告書「子どものスポーツライフを考える」. 2001  
 第2回スポーツNPOサミット東京報告書「スポーツNPOとスポーツ振興」. 2002  
 第3回スポーツNPOサミット東京報告書「実りある連携に向けて」. 2003  
 第4回スポーツNPOサミット東京報告書「スポーツNPOのネットワーク化」. 2004  
 第5回スポーツNPOサミット東京報告書「スポーツNPOとまちづくり」. 2005

## あとがき

20年の歴史をどう語るか。

今回の20年史を編纂するに当り考えました。

出た結論は、ただ単に設立からの20年間を切り取って記録するのではない、いわゆる儲け仕事ではないが、その仕事により世の中を活気づかせる、楽しくすることで社会に役立つ仕事をしてきた組織の活動(スポーツは文化であるという認識の醸成や、スポーツは単なる手段ではない、スポーツが本来持っている価値を再認識することなど)という視点で20年間を振り返りたいということでした。

20世紀後半の、国際的なスポーツの潮流の変化(sport for all)、国内のスポーツ界の変化(文部省生涯スポーツ課設置、toto新設)、国内での経済状況の変化(バブル絶頂期～バブル崩壊)による人の考え方の変化等の歴史の流れの中で、どのようにして笹川スポーツ財団が誕生して発展していったのかを、浮き彫りにすることを目指したい。時代の要請の中で生まれるべくして生まれた組織の成長として捉えたい、という思いです。

そうすることでSSFが存在していることの意義がはっきりするのではないかと考えました。

また、事実を正確に記録することの重要性を身に沁みて感じています。

この20年史に活字として残された記録が、笹川スポーツ財団の正史として後々まで引き継がれてゆくことを思うと、一字一句までおろそかに出来ない思いで制作に取り組みました。

周年史は、とすれば内容より見た目の立派さ、厚みなどに重点が置かれ、せっかく作ってもほとんど人の目にふれることのないものが多いと思われます。

前述の考えに沿った内容本位の20年史作りに最重点を置き、かつビジュアルにも充分耐えるものを作ることを意識しました。

また、PDF化してHPでの公開も視野に入れて制作しています。

出来るだけ大勢の人に20年史づくりに参加していただくと考え、関わりのあった方々に失礼を省みず様々なお願いをいたしました。快くご協力くださいました皆様方にこの場をお借りして心より厚くお礼申し上げます。また、制作会社の日本パブリシティさん、特に編集の野村博子さんのお力なしには、この仕事は出来ませんでした。心より感謝申し上げます。

スポーツは、人類がもらった宝ものなんだ。

神様が、地球が、人類にスポーツをくれた。

走る。泳ぐ。跳ぶ。投げる。蹴る。笑う。

生きている喜びを、カラダいっぱいを感じる。

スポーツをしている人の表情が、とても美しいのはきっとそのためだ。

設立初期に発行した雑誌「sports for ALL」の中に出てくる言葉です。

わくわく感じっぱいのSSFになって貰いたいと願っております。

編集担当 坂井宣夫

---

---

## 笹川スポーツ財団20年史

**発行** 2011年4月30日  
**発行者** 小野 清子  
**発行所** 笹川スポーツ財団  
〒105-0001 東京都港区虎ノ門1-15-16  
Tel. 03-3580-5965 Fax. 03-3580-5968  
URL <http://www.ssf.or.jp/> Email [info@ssf.or.jp](mailto:info@ssf.or.jp)  
**印刷／製本** 株式会社 日本パブリシティ  
**カバーデザイン** 三本木 敦彦(株式会社 日本パブリシティ)

---

## The 20 YEAR HISTORY OF SASAKAWA SPORTS FOUNDATION

**Date** 30 Apr, 2011  
**Produced by** Kiyoko Ono  
**Published by** Sasakawa Sports Foundation  
1-15-16 Toranomon Minato-ku, Tokyo 105-0001 Japan  
Tel. 03-3580-5965 Fax. 03-3580-5968  
URL <http://www.ssf.or.jp/> Email [info@ssf.or.jp](mailto:info@ssf.or.jp)  
**Printed by** Nihon Publicity Co.,Ltd.  
**Cover Designed by** Atsuhiko Sanbongi (Nihon Publicity Co.,Ltd.)

---

---

笹川スポーツ財団 20年史

THE 20 YEAR HISTORY OF SASAKAWA SPORTS FOUNDATION

